

社會經濟調查所編

支那經濟資料七

江西糧食調查

生活社刊



MG  
F329.56  
4

社會經濟調查所編

支那經濟資料七

江西糧食調查

生活社刊



3 2167 9284 0

## 序 言

長江流域は我の國米産區であり、江西は長江流域中米を輸出する省に屬する。又南昌、九江は全國有名の米市であるが故に米穀生産運搬販賣上その地位は特に重要である。

江西麥の生産は自給に足らず、米の生産のみが本省消費に供する外尙他省を助ける餘力があり、その數は平年百萬石以上で收穫の稍々良い時には尙これに止らない。民國十三年の輸出額の如きは二百五十萬石に達した。

これは長江流域米糧運搬販賣上固より重要なことで江西全省の收入上にも關係は非常に切實重要なるものである。平均石當り七元として計算すれば二百五十萬石の米糧の輸出は約一千八百萬元の收入となり、全省最大多數の農民の生活は實に之に依存してゐる。故に匪患平定さるるも民力未だ回復せざる時、米穀生産運搬販賣の提唱と改進とは實に重要な意圖に屬する。

江西米穀の運搬販賣には大體一定の路線がある。その交易市場は南昌であり、その輸出地點は九江である。南昌は近年來人口増加し商業繁盛し、一ヶ年米糧消費は五六十萬石前後に達し、且つ、ここには加工機關多く、交通は又南部各河流の下流に位し、南潯鐵道の始點であるが故に全省米穀の加工の中心及び集散の市場である。九江に至つては長江のほとりに位し、南潯鐵道は之を終點となし、上流からの水路も直通してゐるから、全省米糧輸出は概ねここより出づるを要し、實に江西の門戸となり、その地位は江西について言ふも又長江流域について言ふも共に重要である。

本會はこれに鑑み特派員をして數ヶ月にわたつて實地を調査せしめ、これを草して上梓した。

中は三章に分け一は江西全省、一は南昌、一は九江に關するものである。遺漏のあるは自ら免れ難き所であり讀者が進んで之を指摘されんことを祈る。

民國二十四年四月一日

行政院農村復興委員會秘書處

# 江西糧食調查 目次

## 序 言

### 第一章 江西全省糧食生產運搬販賣概況……………一

第一節 江西米麥の生産量及びその長江流域に於ける地位……………一

第二節 江西米穀の生産區域及び其品種……………八

第三節 江西省内米穀集中の路線……………一六

第四節 各縣米商の一般組織、交易情形及加工設備……………二〇

(一) 小商人と仲買問屋

(二) 米 號 と 米 商

(三) 加 工 機 關

第五節 江西糧食の輸出と輸入……………二七

第六節 江西各縣の米價……………五

(一) 各地米穀價格の比較

(二) 米價と商人の原價

第七節 度量衡制……………五

第八節 倉庫情形……………六

第二章 南 昌 市……………七

第一節 江西米穀運搬販賣上に於ける南昌の地位……………七

第二節 南昌米市の組織及び交易順序……………七

(一) 糧 食 行

(二) 機 米 廠

(三) 藝 坊

(四) 米 舖

第三節 米穀の來源及び數量…………… 八二

第四節 運輸情形…………… 八五

(一) 裝運情形

(二) 運費

(三) 碼頭組織

第五節 米穀價格…………… 九〇

(一) 早晚米穀市價の比較

(二) 各種米穀三年來變動の情形

(三) 米價と商人の原價

### 第三章 九江市…………… 一〇三

第一節 九江米市の性質…………… 一〇三

第二節 九江米市の組織…………… 一〇六

第三節	運 輸 情 形	108
第四節	米の原價増加の過程	111
第五節	米 價	113

附 錄	(一) 江西省南昌市米業一覽	110
附 錄	(二) 江西省南昌市豆麥業一覽	113
附 錄	(三) 江西省九江市米業一覽	116

# 第一章 江西全省糧食生産運搬販賣概況

## 第一節 江西米麥の生産量及びその長江流域に

### 於ける地位

長江流域各省は我國屈指の産米區域で湖南・四川・安徽等の省の如きは毎年米穀を他省に供給してゐる。江西は近年災患のため田園荒蕪し、生産額に減じ、遂に外に輸送するだけの餘分の穀物を得ることが出来なくなつた。

しかしながら、過去の平年について言へば江西産米の地位は長江流域各省中亦特に重要なものに屬し、毎年生産せるものは自給の外他省を救済する力量を持ち、最高の場合は二百五十萬担に達した(民國十三年の場合の如き)。

その生産能力について言へば江西の農民は前農商部民國七年の時の統計に依れば、三六、六三〇、〇〇〇畝、後民國二十年の時張心一先生は再び一統計を作り四一、六三〇、〇〇〇畝となつた。この外江西賦役全書中に登載されたものに據れば、即ち現在租税を徴收してゐる米田地は三三、九三四、〇〇〇畝となつてゐる。然しこの三數は江西省政府經濟委員會の意見によれば、いづれも過少で該會の統計は五二、〇〇〇、〇〇〇畝である。

江西の自然環境は稻作に適し、人民は習慣上又凡て米を食し、農村中凡そ稻を種ゑることの出来る地に稻を種ゑぬものはない。故に上述の總數中稻を栽培してゐる畝數は江西省政府經濟委員會の統計に據れば最少六五%、最大

七五%即ち三三、一八〇、〇〇〇畝より三九、〇〇〇、〇〇〇畝に至つてゐる。江西上等農田は年二回の收穫があり、第一回は四月初に播種し六月末に收穫し、早稻と稱し、每畝多れば穀四石、少なければ穀二石五斗の收穫がある。第二回は七月初に播種し、九月末に收穫し晚稻と稱し、每畝多ければ穀二石五斗少なければ一石五斗の收穫がある。二回合計每畝多ければ六石五斗少なければ四石の收穫がある。普通の稻田にいたつては年一回の收穫のみでその早種は亦早稻とも稱し、每畝多ければ穀四石、少なければ一石八斗の收穫がある。その晚種は亦晚稻とも稱し、穀三石少なければ一石五斗の收穫がある。上等稻田毎年數量を平均すれば每畝收穫約五石二斗五升、普通稻田毎年產量を平均すれば每畝收穫約二石五斗七升である。更にこの兩者の平均數を平均すれば每畝收穫三石九斗一升、碾いて飯米となさば一石八斗を得る。

この各畝の生産率を上述の田畝數に乗ずれば江西平年一年當りの產米量は最大七千餘萬石、最少六千餘萬石となる。穀子<sup>て</sup>についていへば毎年最大一億五千餘萬石、最少一億三千餘萬石である。

上述の數字が大體の統計となつてゐるか否かは、當然尙考慮の必要がある。けだし江西八十一縣は均しく米穀を産すといふとも、鄱陽湖以北、湖北區各縣より贛縣以南各縣、贛東五山一帶に及ぶまでは大體に於て一回收穫のみである。全省の二回收穫田と一回收穫田の比較は尙缺如し、各種統計は自然その正確を期し難い。

最近三、四年の數字を以つて見れば上述の統計と相距ること甚だ遠く、民國二十年の江西米穀總產量(糯米をも含めて)の如きは金陵大學農業經濟系の統計は八〇、〇七〇、〇〇〇石(穀子)となし、立法院統計處統計は六二、三七三、三八五石となしてゐる。民國二十一年には金陵大學農業經濟系統計に據れば八三、一四〇、〇〇〇石、民國

二十二年には中央農業實驗所統計に據れば八八、〇九〇、〇〇〇石、江西省建設廳統計に據れば一一一、四二八、一九七石である。

民國二十三年の江西省政府統計並統計に據れば九二、〇六一、九五六石である。

最近四年間の各六面よりの江西稻穀產量  
に對する統計  
(單位石)

年 別	總 生 產 量	統 計 者
民國二〇年	八〇、〇七〇、〇〇〇	金陵大學農業經濟系
民國二〇年	六二、三七三、三八五	立法院統計處
民國二一年	八三、一四〇、〇〇〇	金陵大學農業經濟系
民國二二年	八八、〇九〇、〇〇〇	中央農業實驗所
民國二二年	一一一、四二八、一九七	江西省建設廳
民國二三年	九二、〇六一、九五六	江西省政府統計室
平 均	八六、一九四、〇九〇	

上述四箇年の數字を平均すれば四箇年來江西米穀平均產量は八六、一九四、〇九〇石であることを上述該省建設廳統計に比すれば七七、三五%に過ぎない。唯これを立法院統計處統計に比すれば反つて三八、二二%増加して居り、これを金陵大學農業經濟系の民國二十年、二十一年兩年の統計及び中央農業實驗所統計に比すれば殆んど同じである。たゞ江西は近年になつ災害頻發して居るから此の數字は當然年平均と看做すことは出来ない。

江西は水田區域で境内河流縱横に流れ、灌漑便利で旱田甚だしく、爲めに麥の生産は多くない。各方の統計に依れば毎年大麥、小麥總產額は約四百萬石乃至七百萬石の間である。

縣 稻 穀 產 額 (單位石)

年	二 十 三 年			
	早 稻	中 稻	晚 稻	糯 稻
241,574	2,086,000	66,000	945,000	153,300
220,752	1,268,400	291,200	980,000	72,000
360,544	1,350,000	360,000	1,176,000	126,000
117,760	320,000	36,000	241,056	63,000
47,712	360,000	—	259,200	13,000
89,600	672,000	—	360,000	84,000
135,744	840,000	—	324,000	42,000
83,664	588,000	—	349,560	45,000
57,600	1,116,000	225,000	336,000	36,000
100,918	480,000	93,600	140,000	37,500
56,000	360,000	89,280	403,200	31,600
48,960	250,000	72,000	210,240	18,000
155,520	1,134,000	102,000	288,000	52,500
139,392	840,000	42,960	201,600	49,000
37,440	432,000	—	187,200	30,000
35,520	600,000	88,800	319,680	46,000
126,720	1,280,000	315,000	396,000	90,000
129,600	1,200,000	68,640	378,000	60,000
120,960	1,890,000	540,000	766,800	126,000
59,616	907,200	132,000	245,840	42,000
48,600	432,000	—	432,000	36,000
34,560	324,000	—	230,400	22,500
50,400	720,000	117,000	296,000	63,000
16,800	508,800	75,600	440,000	60,000
28,800	392,000	—	315,000	31,500
30,000	384,000	—	324,000	21,600
14,400	194,400	—	126,000	12,000
177,600	1,161,000	300,000	740,000	120,000
56,000	480,000	110,000	265,920	40,000
48,400	600,000	150,000	224,400	49,000
145,920	552,000	376,000	216,000	45,000
7,680	86,400	54,000	22,500	4,500
61,440	336,000	240,000	176,400	45,000
4,200	108,000	54,000	30,000	3,000
512,000	360,000	110,000	277,200	60,000
128,000	319,200	240,000	626,400	108,000
198,720	237,600	355,200	496,600	52,500
57,600	96,000	246,000	414,000	24,000
48,000	569,000	60,000	259,200	66,240
18,000	160,000	27,120	57,600	10,080
14,832	192,000	75,600	118,080	15,000

四

應に據る。民國二十三年は江西省政府統計室に據る。

江西省三年來各

年別 縣別	二十 年		二 十 二		
	秈 稻	糯 稻	早 稻	中 稻	晚 稻
南昌	2,983,860	277,453	3,013,200	388,800	1,590,840
新建	1,880,720	426,640	789,750	496,692	2,867,400
豐城	1,577,913	101,147	1,863,000	935,438	1,423,701
新淦	232,773	17,073	250,560	—	577,728
淦江	305,493	40,433	265,952	—	299,520
新淦	608,400	190,667	256,000	—	662,400
吉水	305,827	84,527	610,848	—	304,824
永樂	645,993	57,573	564,732	—	376,488
安高	1,257,788	140,047	1,440,000	712,000	432,000
高上	268,220	62,373	554,000	—	443,200
宜萬	1,009,993	77,880	256,000	72,000	1,008,000
清江	863,753	226,013	206,400	—	275,200
新喻	537,300	57,840	1,274,130	174,240	337,200
新分	520,833	223,893	1,038,960	519,480	156,240
宜春	968,587	26,280	561,000	—	249,600
萍鄉	1,109,973	194,953	1,024,000	96,000	118,800
分宜	1,972,380	49,020	1,404,000	396,000	648,000
萍鄉	2,122,953	104,533	1,440,000	—	638,400
臨川	944,240	72,000	3,024,000	1,080,000	1,008,000
東鄉	1,060,907	24,853	1,434,880	—	481,600
金南	573,833	27,993	660,320	—	550,800
南豐	1,377,040	106,813	478,080	—	333,400
崇仁	661,153	24,467	810,000	—	327,600
宜黃	486,760	75,760	293,760	—	262,500
黎川	1,188,533	104,307	432,000	—	189,000
南豐	221,273	179,660	459,000	—	259,200
廣昌	2,494,106	26,153	374,400	—	100,800
餘萬	515,660	209,867	1,537,500	102,500	1,140,000
餘萬	1,076,647	55,247	511,200	129,600	342,000
貴溪	1,459,820	51,100	749,250	121,500	468,000
江溪	131,347	—	431,000	323,320	461,700
溪陽	199,633	19,350	85,400	38,000	115,200
橫峰	148,007	21,720	414,720	397,400	239,200
鉛山	516,453	17,173	86,400	75,600	48,000
德山	521,106	113,693	342,720	291,760	231,840
豐山	360,360	21,813	576,000	518,400	432,000
上廣	476,300	40,813	244,800	503,200	326,400
玉山	528,793	29,767	160,000	714,000	221,000
永德	350,080	152,760	630,000	24,000	729,000
安義	392,560	19,237	243,000	108,000	144,000
安義	—	21,220	494,100	136,800	60,624

五

註 民國二十年は立法院統計處に據る。民國二十二年は江西省建設

縣稻穀產額（續）

年	二 十 三 年			
	早 稻	中 稻	晚 稻	糯 稻
73,728	72,000	211,400	117,000	42,000
86,400	452,760	165,840	280,000	30,000
18,000	192,000	270,000	240,000	32,000
240,000	504,000	156,000	270,000	45,000
6,480	45,000	44,000	240,000	19,200
21,600	—	239,000	—	8,400
22,560	75,000	500,000	—	20,000
8,960	84,000	140,000	—	7,200
57,600	93,600	640,000	60,000	36,000
64,600	—	225,000	—	13,500
22,400	10,000	324,000	—	14,400
102,400	1,700,000	360,000	582,000	90,000
25,920	480,000	160,000	540,000	50,000
107,200	849,600	300,000	600,000	110,000
70,400	280,000	177,600	187,000	27,000
340,000	1,540,000	354,000	873,600	141,600
112,000	1,278,900	137,000	672,000	122,400
70,400	661,500	121,000	313,200	81,200
28,800	358,640	—	459,000	32,400
5,120	180,482	—	105,840	11,200
49,300	1,050,000	80,000	561,600	32,400
15,300	310,400	—	223,488	448,000
70,272	576,000	96,000	480,000	92,000
256,000	1,120,000	420,000	1,008,000	78,600
201,600	896,000	126,000	1,232,000	168,000
100,080	882,000	291,000	666,400	54,000
10,800	162,000	72,000	252,000	19,200
41,600	180,000	120,000	236,800	50,760
30,240	364,000	57,000	396,000	57,600
57,600	864,000	—	648,000	72,000
74,880	1,080,000	—	712,800	126,000
4,320	180,000	—	145,800	90,000
28,800	720,000	—	563,200	36,000
21,600	504,000	—	421,200	25,560
98,600	900,000	105,300	720,000	105,300
68,000	448,000	336,000	364,000	27,000
48,000	364,500	19,440	270,000	16,200
5,600	262,500	120,000	240,000	12,000
25,600	175,000	31,500	268,000	19,600
16,000	160,000	129,600	151,200	22,400
6,776,308	46,241,832	11,634,480	29,599,204	4,584,440

六

臨に據る。民國二十三年は江西省政府統計室に據る。

### 江西省三年來各

縣別	年別 種類	二十 年		二十 二		
		仙 稻	糯 稻	早 稻	中 稻	晚 稻
靖 安	安新	645,760	173,713	75,680	527,400	83,200
	修武	592,480	110,300	455,400	607,500	244,800
奉 新	水鼓	719,460	66,727	53,280	625,320	326,880
	昌江	796,986	73,893	486,000	432,000	282,240
武 寧	江子	253,600	64,553	51,840	155,520	153,600
	九星	180,213	24,660	2,000	441,030	720
都 昌	昌江	442,120	102,247	75,264	941,978	145,300
	彭澤	150,507	25,560	124,335	270,000	24,000
湖 口	昌江	840,560	69,300	112,000	1,361,252	41,600
	陽梁	421,740	20,487	—	—	44,200
瑞 昌	平興	382,920	19,867	33,400	609,110	—
	樂德	1,105,080	166,387	3,527,500	526,500	412,800
德 安	新花	780,366	21,160	760,000	121,600	775,008
	同和	1,507,786	116,293	1,435,200	20,180	493,200
永 修	安福	343,906	50,747	240,000	324,000	192,000
	福新	919,847	111,147	1,880,400	400,000	1,152,000
寧 都	吉安	304,153	114,060	720,800	288,000	480,000
	泰和	383,580	78,573	540,400	252,000	291,600
興 國	安福	441,260	61,540	388,800	97,200	259,200
	萬安	190,260	35,293	211,896	68,010	95,760
高 安	同和	280,000	116,667	1,440,000	147,600	48,000
	安川	264,733	29,873	290,700	—	275,400
潯 陽	安川	470,953	123,507	254,952	254,952	140,544
	贛南	222,653	38,493	972,000	783,100	840,000
上 饒	贛南	603,113	135,700	776,000	302,400	537,600
	崇仁	703,113	63,073	533,600	233,770	441,000
大 庾	贛南	87,992	20,340	162,000	72,000	176,000
	石城	262,006	38,393	366,720	115,200	201,600
會 昌	贛南	230,200	105,773	252,800	15,880	284,400
	瑞金	734,133	169,860	576,000	—	518,400
石 城	城昌	1,291,667	143,021	737,280	—	662,400
	會昌	147,213	10,880	159,840	—	155,520
會 昌	城昌	1,010,013	70,847	604,800	—	576,000
	金豐	444,493	15,667	367,200	—	345,000
瑞 信	達摩	999,220	89,673	443,120	293,625	419,220
	安尋	742,493	22,573	458,400	324,000	192,000
龍 南	龍南	131,387	16,493	216,000	108,000	221,000
	龍南	202,013	51,133	280,000	4,000	245,000
龍 南	龍南	234,393	14,267	229,200	34,880	166,600
	龍南	252,013	18,747	183,360	17,190	184,960
總 計		55,797,733	6,575,652	61,768,829	19,772,403	33,110,657

七

註 民國二十年は立法院統計處に據る。民國二十二年は江西省建設

上述した所を總括すれば江西の糧食の地位は實に米穀の生産にあり、麥は左迄重要ではない。平年には米穀は自己消費の外尙ほ他省に供給する餘額がある。民國十三年に就て言へば九江税關を経て輸出したものは殆ど二百五十萬擔に達し、而かも税關を経ざるもの及び湖口或は其他各地より輸出したものは計算に入れてゐないのである。

## 第二節 江西米穀の生産區域及び其の品種

江西は水田區域中の一省ではあるが境内各處の情形が亦甚だ異なり、産米區域について言へば河流に依り大體左の如く區分することが出来る。

- (一) 贛河下流區 南昌、新建、豐城、新淦、峽江、吉水、永豐、樂安等の八縣。
- (二) 錦江區 高安、上高、宜豐、萬載等の四縣。
- (三) 袁江區 清江、新喻、分宜、宜春、萍鄉、等の五縣。
- (四) 撫河區 進賢、臨川、東鄉、金谿、南城、崇仁、宜黃、黎川、南豐、廣昌等の十縣。
- (五) 信河區 餘干、萬年、餘江、貴溪、資溪、弋陽、橫峯、鉛山、上饒、廣豐、玉山等の十一縣。
- (六) 修水區 永修、德安、安義、靖安、奉新、武寧、修水、銅鼓等の八縣。
- (七) 江湖區 瑞昌、九江、星子、都昌、湖口、彭澤等の六縣。
- (八) 饒河區 鄱陽、浮梁、樂平、德興等の四縣。
- (九) 贛河中游區 吉安、安福、永新、蓮花、寧岡、泰和、安國、萬安、遂川等の九縣。

(一〇) 瀘河上流區 贛縣、南康、上猶、崇義、大庾、零都、壽都、石城、會昌、瑞金、信豐、安遠、尋鄔、龍南、虔定南等の十六縣。

江西省各縣小麥產額 (單位石)

縣別	年別		縣別	年別	
	二十年	二十三年		二十年	二十三年
南 昌	三四、六〇〇	二、八八〇	上 猶	八、三二一	六六〇
新 建	六三、〇七一	五、九五二	崇 義	一六一、〇六四	三、二〇〇
豐 城	一九九、四〇七	五四、二一〇	大 庾	一一、四五〇	五七〇
峽 江	九、四四三	二、四〇〇	南 康	三一、六八六	五七六
上 高	二一、八八六	六三〇	萬 安	七〇、一五〇	—
臨 川	一二二、八五〇	一、一五二	泰 和	二一、一七九	二二、八〇〇
進 賢	九三、八二八	—	安 福	七一、二八六	六八、二五〇
餘 干	八〇、七三六	六八、三一〇	吉 安	五一、七〇七	六四〇、〇〇〇
鄱 陽	九三、一四三	一〇三、九五〇	吉 水	一七、八二九	—
都 昌	八七、〇七九	八四、〇〇〇	永 豐	一六、八五〇	—
湖 口	九、六二一	二三、四七二	興 國	一六、〇〇〇	—
彭 澤	一六、四〇七	二〇、一六〇	贛 縣	一三、七七九	—

各區米穀の生産量は自然環境の不同により亦頗る上下がある。通常贛河下流區域生産は比較的多く、これに次ぐものは撫河區で其次は信河區贛河中流及び贛河上流區である。

縣別	年別	
	二十年	二十三年
鄂都	三六、八〇〇	—
信豐	二六、二〇〇	—
龍南	一四、五七一	一、八〇〇
虔南	九、〇七九	—
定南	三、四三六	—
安遠	二二、二三六	—
球鵲	三一、一七九	—
會昌	五三、二二九	—
瑞金	一四、四〇七	—
寧都	五九、八八六	—
浮梁	四二、二五〇	四三、七四〇
餘興	二三、七六四	—
玉山	三八、七〇〇	六〇、〇〇〇
廣豐	六四、三五〇	二六一、五〇〇
上饒	四八、〇四三	一一、九六〇
橫峯	一七、九二九	—
縣別	年別	
	二十年	二十三年
鉛山	一六三、二六四	五、三七六
弋陽	一九、八八六	—
樂平	一二三、五五七	六四、八〇〇
萬年	一六、三七一	—
餘江	五〇、四二一	四八〇
貴溪	一一五、〇〇七	—
資溪	四、八五七	—
黎川	二一、四二一	—
東鄉	四四、六一四	三〇、〇〇〇
金溪	三九、六五七	—
樂安	三七、〇六四	—
宜黃	一八、五九三	—
廣昌	一〇、一〇〇	—
石城	二〇、二四三	—
修水	五二、六九三	六、八〇四
武寧	六三、〇七九	七〇、〇〇〇

民國二十二年に就て言へば全省稻穀總產量中贛河下流區にて生産せるものは一六・九〇%即ち六分之一前後を占め、撫河區は一三・六六%・信河贛河中流及び贛河、上流區は平均一二・〇〇%以上である。民國二

瑞昌	德安	永修	九江	星子	安義	靖安	奉新	宜豐	銅鼓	南城	南豐	崇仁
三一、一九三	五二、四二九	一五一、〇八六	八八、〇三六	二五、一七九	五、二七九	一八、九三六	一六、二〇七	一九、八七一	二一、九二一	二九、九二一	四〇、七二一	六四、五九三
一一、七六〇	二二、四〇〇	三〇、六〇〇	一一、八〇〇	一一、七〇一	七、九二七	六三〇	—	五七六	五、〇四〇	二四〇	—	三八、八五〇
新淦	清江	新喻	分宜	宜春	萍鄉	蓮花	永新	寧岡	遂川	萬載	萬安	—
三七、四〇七	二〇、六五七	三〇、二二一	二九、七〇七	二二、五五〇	二一、五六四	一七、九〇七	二二、〇九三	八、二五〇	一五、一七一	六九、三〇七	六五、一一四	—
—	一八、一九二	四、九六八	—	三六四	一〇二、六〇〇	—	—	—	三、六七五	—	—	—

總計 三、五五六、五七八

一、三四六、九五五

註 民國二十年の數字は國民政府主計處統計局統計に據る。

民國二十三年の數字は江西省政府統計室に據る。

西米穀の主要産地は實に上流五區（贛河上、中、下三區、信河區、撫河區を指す）で約七〇%前後を占め（民國二十

十三年の情形も亦大體同様である。唯此の年は北部大旱、南部豐作の爲め贛河上流區の産量が首位に躍進し全省の五分之一弱を占め、其の他四區は一・〇〇%乃至一三・〇%であつたこれに依り江

二年六七・六五%、二十三年七三・四九%、其の他錦江、袁江、修水、饒河、江湖等五區の産する所は三〇%前後に過ぎなく。

江西省二年來各區稻穀の生産量 (單位石)

區別	二 十 二 年		二 十 三 年	
	産 量	百分率	産 量	百分率
贛河下流區	一八、八三五、二二三	一六・九〇	一三、四七一、〇一六	一四・八三
錦江區	五、六六二、二七八	五・〇八	三、八九九、二二〇	四・二四
袁江區	八、五四二、八四二	七・六七	六、四九四、七四〇	七・〇六
撫河區	一五、二二一、四七六	一三・六六	一一、九一四、二八〇	一二・九四
信河區	一三、七八二、一七〇	一二・三七	一〇、六一一、八二〇	一一・五三
修水區	七、六三五、六二四	六・八五	五、〇三八、一二〇	五・四六
江湖區	五、〇七七、三八五	四・五五	二、四八一、一〇〇	二・六九
饒河區	九、一三三、九〇八	八・二〇	六、四九六、六〇〇	七・〇六
贛河中游區	一三、五二〇、五〇六	一二・一四	一四、〇一六、六〇〇	一五・二三
贛河下流區	一四、〇一六、七八五	一二・五八	一七、六三九、四六〇	一九・一六
總計	一一一、四二八、一九七	一〇〇・〇〇	九二、〇六二、九五六	一〇〇・〇〇

註 二十二年は江西省建設廳統計に據り、二十三年は政府統計室に據り改製。

次に各區早稻晚稻の生産比率も亦各々異つてゐる。大體江西全省は早稻が晚稻より多く各區中江湖區の早稻極少を除く外、餘は早稻が比較的多く、其中特に袁江區が最大である。大

體河湖の傍らの低窪の場所は夏春に増水して常に淹没を被るため唯晚稻を栽培出来るのみ、山脚の稍々高い場所には秋季雨少く乾涸し易いため早稻の栽培が出来るのみである。故に江河附近の農夫は晚稻を栽培する者多く山脚に近き農夫は早稻を栽培する者が多いのである。又蔭蔽の甚だ深い山旱田、又水源寒冷の深泥田は早晚兩種の稻の栽培は共に其の收穫の望みがない。蓋し太陽光線が不足し、水源が甚だ寒冷な所は、植物の成長及び結實に影響するからである。故に斯かる田畝に對しては僅か中稻を栽培することが出来るのみである。鄉農が大禾を栽培するといふのは、早稻田に間挿する晚禾が苗が小さく成長期間が甚だ短かく肥料が不足すれば發育が弱まるのに比して、斯かる中稻は苗が大きく發育期間が長く肥料は少しで足り（毎年一回栽培するのみであるから本田は毎年肥料消化が少く自然肥力大となる）、發育旺盛で禾苗の佳なるものは洗面器大であり、因て之れを大禾と稱するのである。併し其の收穫時期が晚稻と遜くないから之れを通稱して晚稻とも言ふ。

江西省大小城市の消費及び外省輸出の米は多く晚米に屬する。城市は機關林立し、經濟は比較的豊かで中等以上の人口比較的多く、生活狀況優越して居る事が影響し、人民の飲食に就ても亦鄉村に比して進歩し、晚米は穀質柔かく、粘氣あり、氣味は芳香なるため購買者が特別多いのである。農商販賣は利潤獲得の大なるを旨としてゐるから、晚穀産量が比較的少きも城市の需要比較的多い爲め早稻を留めて自己の食用に供し、少數の晚穀又は晚米を城市に運送し高價で賣出して其の厚利を得んとする目的を達せんことを希望してゐるのである。

江西省二十二年各區各種稻穀產量の百分率

區別	早稻		中稻		晚稻		糯稻	
	本區總產量に對する%							
贛河下流區	四〇・四二	九・六七	四二・〇二	六・八九				
錦江區	四三・三八	一三・八五	三八・一二	四・六五				
袁江區	六二・〇八	一三・八五	一八・二五	五・七九				
撫河區	六一・七九	七・一〇	二七・六〇	三・五一				
信河區	三七・二九	二三・三六	二九・二一	一〇・一四				
修水區	三二・五九	三四・二六	二六・五二	六・六三				
江湖區	六・九四	八四・一四	五・〇五	三・八七				
饒河區	六五・二八	一〇・六八	二〇・五一	三・三五				
贛河中游區	四九・五六	一六・九四	二六・四九	七・〇一				
贛河上流區	四五・二八	一〇・七八	三八・〇〇	五・九四				
總計	四六・四六	一七・七四	二九・七一	六・〇九				

註 江西省建設廳の統計に據り改製

江西省二十三年各區各種稻麥產量の百分率

一四

早稻晚稻等一般區別の外江西米穀の品種は尙ほ若干の分類があり、餘干一縣に就て論ずれば早稻には早紅、早白、團身早、長身早（別名葉下窗、産額最も大）、短身早（一説には團身早）、五十早、四十早、六十早、七十早（一説には早紅）、長桿早、短脚早等の別がある。晚稻には晚紅、晚白、八月白、大肚白（この種の産額最も大）、貴溪白、寒冬早、鐵脚撥、長鬚紅、野外白、野外紅、小柳晚、夜禾種、

區別	早 稻			
	本區總產量に對する%	中 稻	晚 稻	糯 稻
贛河下流區	五五・五六	五・五九	三四・四〇	四・四五
錦江區	五六・五七	一二・三一	二七・九六	三・一六
袁江區	六五・九九	八・四五	二一・四四	四・一二
撫河區	五八・三五	七・八三	二九・八四	三・九八
信河區	四〇・八六	二一・〇六	三二・八八	五・二〇
修水區	四三・四〇	二〇・〇五	三一・四〇	五・一五
江湖區	一〇・五八	八二・九九	二・四二	四・〇一
饒河區	五〇・九四	一五・三六	二九・四三	四・二七
贛河上流區	四六・一六	八・六三	三三・五一	七・三八
總計	五〇・二三	一二・六五	三二・一六	四・九六

註 根據江西省政府統計室統計に據り改製。

種穀（南昌に産す）陽早、撫州早、豐城早、吉安早、崇安早（いづれも産地を以つて名となす）湖南早（南昌に産す）がある。晚稻には南昌晚、南昌小晚（穀粒が小さい）新建大晚（穀粒が大きい）、豐城晚、撫州晚（撫河附近に

夜禾紅、細葉紅、強盜紅（最も肥料を吸収し易く本年該種の稻を栽培した田は明年は極めて瘦せ再栽培不可能）等の各種がある。糯稻には早紅穀糯、晚紅、穀紅、早白穀糯、晚白穀糯、洋糯、一説には長身糯、或は柳條糯（圓糯（一説には短身糯）、等の種類がある。南昌市場で見られるものには左の各種がある。早稻には

産す)、瑞晚(瑞河附近に産す)、稻には黄穀糶(南昌に産す、穀色によつてこの名がある)、白穀糶(南昌、新建、南城等に産す、穀色によつてこの名がある)、紅穀糶(南昌、瑞州、南城等に産す、穀色によつてこの名がある)、棉花糶(豊城に産す。白きこと棉花の如くである)、柳條糶(新建、新塗等に産し、幹長く柳に似てゐる)。この外、觀音秬(新建に産す、非常に良質である。一説には九月觀音の生辰の時收穫するといふ、晚穀にしては比較的早い)がある。各種米の形狀は早米は大部分扁圓で、晚米は大抵細長い。

### 第三節 江西省内米穀集中の路線

江西省内米穀集中の路線は大體河流に依て進行して居る。贛南各縣は大體贛縣に集中する。蓋し贛縣は贛江上流に位し貢、章二水がここに合し、上猶、南康、信豐、零都等の水道と交通が共に便利で遠く瑞金、會昌、安遠、尋鄔、崇義、廣大にも亦達することの出来る河流がある。故に各地の米穀は剩餘のある時は即ち贛縣に向つて集中するのである。

贛西各縣は大體吉安に集中する。吉安は贛江中流に位し且つ廬江、烏江の注入する處で、地産米亦豊富なため贛西最大の米市場となつてゐる。凡そ樂安、永豐、吉水、萬安、泰和、遂川、永新、寧岡、蓮花、安福等各地の米穀でここに集中しないものはなす。

撫河流域の米市場は臨川で、凡そ廣昌、南豐、黎川、南城、宜黃、崇仁、金谿、東鄉等各縣の米穀は均しくここに集中し、臨川自身も亦年八十餘萬石の剩餘穀物を持つてゐる。臨川縣内は縣城を除き著名な米市場が三個處ある。

一は上頓渡で縣城を距ること二十里、一は瀟灣で縣城を距ること四十五里、一は李家渡で縣城を距ること八十里である。宜黄及び崇仁、樂安の米は概ね上頓渡に集中し、該地の米問屋、精米所は四十五家を下らない。金谿南城一帯の米は瀟灣に集中する。金谿に就て言へば年に十餘萬擔の穀を産し、平日は水路により瀟灣に運集する。該地米問屋は三十家に近く精米機械及び挽臼はいづれも備へてある。東郷一帯の米は李家渡に集中される。該地は臨川米穀の省外輸送の時の交易中心となつてゐる。

信河流域一帯即ち鉛山、橫峯、弋陽、貴溪、萬年等の諸縣は餘江、餘干を集中地としてゐる。餘干の著名なる米市場に瑞洪鎮があり、年々の輸出數量は十萬擔前後である。餘江の著名なる米市場は黃金埠で、毎年常に二十萬擔前後を輸出してゐる。

萍鄉、宜春、分宜、新喻の如き、袁江區各縣の米穀は概ね清江縣の樟樹鎮を中心としてゐる。蓋し該鎮は贛河の中段に位し且つ袁、贛兩河の合流點であり、袁江の米の省外輸送の時は必ずこの間を通らねばならない。故に樟樹鎮には米問屋三十餘家あり、全省著名米市場の一つで、平年輸出數量は少くとも十萬擔以上である。この流域中、樟樹鎮に次ぐ米市場は新喻縣の黃江墟で平年輸出また四萬擔前後ある。

錦江流域各縣の萬載、宜豐、上高、高安等の米穀は何れも直接錦江に沿うて南昌の市汊鎮に集中する。該鎮は晉に錦江流域の中心たるのみならず且つ贛江一帯の米穀集中地であり、米問屋二十餘家があり、何れも精米機器を備へ且つ倉庫を持ち屯積に供してゐる。單に錦江流域のここより輸出する米穀のみでも平年亦十萬石前後である。

上述各區の米穀は何れも南昌に集中され、省外に輸出する時には南潯鐵道又は水路によつて九江に運ばれる。こ

れが江西省内米穀集中の要主幹線である。この外尙ほ其の集中徑路の稍々異なつてゐる兩區の米穀がある。一は修水區域で、この區域中修水、武寧及び銅鼓、奉新、靖安、安義等の各縣の米穀は何れも修水の涂家埠に集中され、然る後、南潯鐵道に轉じて九江に往く。第二は饒河區一帯で浮梁、樂平、德興、婺源等各縣の米穀の集中地は鄱陽で、其の輸出地は湖口である。

上述した所を統合すれば江西省内米穀集中の路線の主要なるものは贛江及び撫河の二大水道で、集中地點の主要なるものは南昌で、輸出口岸は九江及び湖口で其の中九江が最も主要なるものである。

江西の地勢は南部高くして北部低く、其の河流は何れも北流の勢を呈してゐるが故に上述した集中徑路も亦自然同様な趨勢となつてゐる。全省各大小市場は殆んど河邊、或は水路と餘り遠からざる土地に開設され、運輸の米穀はすべて民船及び筏を利用し、南潯鐵道の陸運の外、其の他は何れもこれに重きをおいてゐない。江西各縣の民船は約數萬あり、其の中米穀運輸をなすものが多數を占めてゐるのである。

江西省各縣鎮民船統計

縣別	數量(隻)	縣別	數量(隻)	縣別	數量(隻)
南昌市	二八四	崇仁縣	五八	樂平縣	三〇
新建縣	一七九	宜黃縣	一〇〇	吉安縣	六七
峽江縣	二七	餘江縣	三七〇	泰和縣	二〇

運賃に至つては南潯鐵道の詳細なものを除き、其の他の水路は本流、支流を論ぜず每石里數に等しい。其

南	東	進	萍	宜	萬	宜	上	高	永
城	鄉	賢	鄉	春	載	豐	高	安	豐
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣
一三四	二〇	六	四〇	七〇〇	一五四	三〇	三〇	七二〇	二〇
浮	彭	湖	都	九	靖	安	廣	鉛	貴
梁	澤	口	昌	江	安	義	豐	山	溪
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣
八〇〇	二六	一八	一四〇	三、〇〇〇	二三〇	三八〇	一二〇	二二〇	一〇三
總	永	龍	信	大	上	南	贛	萬	
計	修	南	豐	庾	猶	康		安	
	縣	縣	縣	縣	縣	縣		縣	
九、五九八	一、一〇〇	二〇	三二	八〇	三六	二五	二五九	二〇	

註 峽江縣、民船の積載量七、八千斤以上のもの四隻、三、四千斤のもの八隻、一、二千斤のもの一五隻である。

であり、即ち本流上下一倍の時支流の上下は二倍又は三倍である。

民船の場合には吉安より贛河を下つて南昌に到るまで四百二十里で穀は每石三角、米は每石五角である。上流贛河に到つても亦四百二十里であるが穀は石當り六角六分米は石當り九角である。同一の本流でも上下を比較すれば穀は三角六分、米は四角の差があり、平均約一對三弱の比例である。

又急に騰貴する場合には、民船は永豐より恩河によつて吉水に下り贛河に入ると九十里で每石穀約二角七分を要

の上行下行の入費は普通約一對二又は三の比であり、即ち下り一倍であれば上りは二又は三倍である。本流と支流を比較すれば每石里數に同等で、其の上行、下行に要する運賃の比例も亦上と同様

し、即ち每里三厘である。更らに吉水より贛河により南昌に下れば三百八十里で每石穀約五角を要し、即ち每里一厘餘である。斯くの如く同一里程で何れも流れを下つてゐるのに、本流と支流を比すれば每石穀の相違が二厘で一対三の比である。蓋しこれは支流は狭く淺く流れが急で、上るにも下るにも本流に比して不便だからであらう。

#### 第四節 各縣米商の一般組織、交易情形及び加工設備

江西省内米穀集中の徑路は各大小河流に沿うて居る。其の集積方式は各農家より小市場に集り、小市場より大市場に集り各大市場より更に各重要米市場に集る。其の經る所の過程は亦甚だ悠長であるが故に此の間に居る者は實に一重要地位を占めてゐる。今先づ米穀最初の交易について述べよう。

農民は毎年收穫の後剩餘米穀のある場合には小賣店に賣り、或は米店に賣り、或は大問屋に投じ、或は食糧店に賣り或は直接消費者に賣る等、其の交易情形は頗る不同の如くである。唯實際には斯かる交易情形は殆んど地方環に制限されてゐる。即ち米市場が近くにある場合には農民の剩餘米穀は普通、米商、食糧店、又は米店派遣人が收購し、仲介人の手にはよらない。併し僻遠の土地に行けば事實上全く小商人に頼つてゐる。各方面の觀察を綜合すれば、江西各地で農民と直接米穀の交易を爲す者は實に小商人が最大多數である。換言すれば農民手中の米穀は大部分小商人により省外に輸送されるのである。

#### (一) 小商人と仲買問屋

斯かる小商人の数は甚だ多く、凡べて城市を稍々遠く離れてゐる區域は即ち彼等の活動の場所である。小商人の

資本は何れも限られて居り、其の營業の特む所は即ち若干の仲買問屋又は米商、米店と一定の聯絡を持ち、貨物を得れば直ちにこれを其處へ持つて行つて轉賣するにある。唯、資本が少く且つ買付けの方法に就ては甚だ精明強幹なる商人であり、又中間で問屋等に頭をはねられねばならないから斯かる小商人は常に極力農民を救済し、利潤を獲得せんことを圖つてゐる。ここに就て或は任意に價格を低落せしめ、或は色をなして缺點をあさり、或は不正の度量衡器を使用し、一部分に對してのみ現金を支拂ひ大部分を借りにしておくのは日常に見られることである。

各地小商人は米穀を購入して米商に轉賣する時、常に仲買問屋又は仲買人の手を介する。所謂仲買人とは一人單獨の經營で一定の時間地點及び組織無く亦官廳にも報告を提出しない。斯かる人は何れも地方の情形を甚だ熟知し若干の小米商人及び食糧店と共に一定の連絡を持つて居るが故に中に立つて交易を斡旋するのである。仲買問屋に至つては一定の場所を持ち、且つ政府から鑑札を受けてゐる故に仲買人と仲買問屋は常に同一市場で經營活動して居るが、其の性質は前者は私人行爲に屬し、後者は公開營業であり、仲買人の存在し得るのは自身大した消耗及び費用を要しないからであるが、大宗の賣買は多く仲買問屋による。蓋し小賣と米商は時には先づ支拂をなし、後貨物を得、或は先づ貨物を得後支拂をなし、或は貨物を受取る時一部分支拂をなす等のため、皆問屋より貨物支拂の清算保證、責任負擔等の手續をなすか又は若干の先拂をせねばならない。而して斯かる責任を所謂仲買人は負擔の必要はないのである。

仲買人と仲買問屋は純粹なる仲介人的性質のため、其の營業收入は全く手数料に依存してゐる。正當なる手数料は各地普通二、三%であるが實際上は決して之れに止まらず八、九%に登るものも常に見られる。以前平和の時代

に吉安等の大市場の仲買問屋は各店毎月多い時には五、六百元、最も少い時でも二、三百元あつた。それより小さい市場にあつては最大二、二百元、最小八、九十元あつた。近年以來災患頻發し、米穀減少し、商賣も振はざる爲めに大なる市場も最大一、二百元、最少八、九十元に過ぎず、より小なる市場は最大五、六百元、最少二、三十元に過ぎない。故に近年來各地米商中仲買問屋の休業廢業するものが甚だ多數現はれた。

仲買人或は仲買問屋を経由する賣方は、一は農民であり一は小賣人である。市場の情形により農民が必ず問屋により貨物を賣り捌かねばならない時、問屋の農民に對する欺罔茶毒は實に言ふに堪へざるものがある。普通賣つて支拂を得る場合には「八掛拂ひ」又は「整數九九交現」(百元の價格のものは現金九十九元のみを交付し、一元を割引にする、然からずんば支拂を延期し何回かに分けて支拂をする)が行はれ、小賣人に對する船上開船費用は資本雄厚なる問屋により操縦される。問屋手数料の外、問屋内の店員に贈る所謂『茶水費』の如きは極めて普通のことである。

仲買問屋を経由する米穀は仲買問屋により賣買の紹介が成功して貨物を交付する場合、慣例により計量師により量を計らねばならない。斯かる計量者は各米市場中甚だ大なる勢力を持つて居る。蓋し彼等は殆んど世襲で壟斷の地位にあるからである。計量費は規定によれば多くはなく、各地は大體每擔一分であるが、實際上計量師は常に各の技術を持ち、一十擔の穀物に就て言へば計量により一、二擔多くすることも又は逆に一、二擔少くすることも出来る。故に賣買兩方では正常の計量費の外に各々何れも若干の金を計量師に贈らねばならないのである。

江西は米穀輸出省に屬するため、亦省内米穀は大部分南部より北部の南昌、九江一帶に集中されてゐるため、内地の各大米市場中、吉安、臨川、上頓渡、李家渡、潯陽、樟樹鎮、市汊鎮等各處の所謂米業の主要骨幹は實に米號と米商である。

米號と米商は共に内地各米市場より米穀を吸収し、南昌、九江或は省外の大商人の許に運ぶのである。其の區別は米號は一定の場所に止まつて商賣をなし、米商は行商を爲すものである。米號は一定の組織、一定の場所及び地點を持つてゐるが、米商は若干人が各地の間を往來して購入及び運搬、販賣に従事する。

大多數の情形に就いて言へば米穀は農民の手から小商人に集中されて後、漸次各該區域中の著名米市場に集中され、更に仲買問屋を介して各米號に集中されるのである。斯かる米號は凡そ著名なる米市場にはいづれも設立され一般に資本雄厚、規模偉大で専ら小商人及び一般農民の米穀を吸収し、然る後、南昌、九江或は甚だしきに至つては省外に運ぶのである。以前米穀輸出の旺盛な時分には秋收が來て一個月もすると南昌、九江等各地の食糧店、精米所、甚だしきに至つては輸出商途が人を派遣して内地各米市に到り、各米號に託して米穀を採集し、或は直接米號より購買する時には上述の如く専ら米穀の採集運搬販賣に従事してゐる米商も亦米號に代つて其の斡旋をする。現存する米號の大半は何れも小賣店を附帶し、自ら倉庫並びに碾米機器を備へ、以て精米を精製する。精米に精製すれば外に運送するより輕便であるから、一般米商も亦穀子を購入した後時々米號に代つて碾い貰ふ場合もある。

米商に至つては一定の組織、場所のない外、其の根本性質は米號と全く同じで、即ち専ら内地各米市にて米穀を購入し、然る後、南昌、九江等の大港又は省外に運出する。

之等の商人は何れも秋の收穫期になるや、各米市に集まり、仲買問屋を介して小商人及び農民の手中より（時に甚だしきに至つては米號より）米穀を購入し、其の南昌に運送するものは普通穀子のまゝであり、九江、漢口又は上海に輸送せんとするものは何れも其の土地で碾いて精米とする。斯かる米商も亦極めて大なる資本を持つてゐる者が居て各米市場に倉庫を設け能く市場を操縦する。

試みに江西米穀の省外輸出の經過を研究すれば、斯かる米號と米商は實に甚だ重要な地位を占め、常に内地米市が彼等の操縦を受けるのみならず、南昌、九江の米市に對しても米號と米商は亦相當の勢力を有つてゐる。米穀生産の最大部分の利潤が之等中間人の人々に吸收されてゐるのは極めて顯著な事實である。

### (三) 加工 機 關

江西の碾穀精米機關は各地に何れも存在し普通分業になつてゐる（南昌を除く）。即ち碾穀者は精米をせず、精米者は碾穀しない。米商は米穀を買つて後碾穀所にて脱穀し、精米所にて精米する。但し碾穀と精米を兼ねてゐる者もあるが甚だ少數である。

今精米機械に就いて述べよう。

江西の精米機は南昌に最も多く、贛、撫兩河上流各米市が之れに次ぎ、全省の輸出港たる九江には却て斯かる設備が無い。其の原因は、精米運輸が穀子より廉價だから九江に至るものは全く精米ばかりだからである。各地精米機は二個米枓が最も普通で一臺の裝備費が約二千四百元、四個米枓は三千餘元であるが、之れは江西には餘り見ら

れない。上海、蕪湖、漢口等各地の十餘個米枋機を備へてゐるものに對して少しも遜色がない。唯、斯かる情形は全省を綜觀するとき、又さうでない。蓋し江西各地の精米機米枋の總數は實に甚だ觀る可きものがある。

江西各地碾米機器米數目統計

地 點	枋 數	地 點	枋 數
南昌市	一〇〇	豐城	七
南昌縣	三五	溫家鎮	八
(連荏港在內)	九	撫河城內	二八
鄱陽	五	李家渡	一三
餘干城內	一一	上頓渡	四
餘干鄉間	五	壽湖	二四
萬年	五	南豐	二
景德	四	南城	一
新建	八	餘江	六
漆家埠	五	貴溪	二
吉安	五	高安	四
樟樹	六	總計	二九七
新淦			

今、表として説明すれば左の如くである。

上述の機は普通何れも一個枋であり、二個枋のものも尙ほ多く、三個枋、四個枋のものは甚だ少い。毎枋毎日の精米能力は平常は八十擔で、多い時は一百擔である。

普通一擔の穀子を挽いて精米にするまでの過程は亦甚だ長い。原重量一百十斤(市秤)と假定すれば、臼に入れる前に沙土を除き、臼に入れて後、消耗するものに槽糠、碎米、粗糠(即ち穀殼)等がある。然る後、精米するや其の時又米皮、碎米等の消耗があり、總計穀子一石を挽いて精米とすれば僅か四斗七升となる。

每石穀子を碾いて精米となす過程

原 量	磨に掛ける前除く		下 磨 後 備 出 まで	碾 三 次	附 註
	損 耗	正 味			
市桶穀一石 重量一〇〇斤 (市 秤)	沙土四兩	細 糠 六 兩 重四斤八兩 碎米〇・五升 風揚から出る粗糠 (即穀殼)一八斤	支米五斗七 升重八六斤 八兩	碾筒の底 から出る 米皮一斗 重八斤 碎米一升 重一斤八兩	一、支米五斗七 升より精米四斗 七升を得。 二、精米一石に は穀子二石一斗 二升八合を要す
總 計	四 兩	重二二斤二〇兩	八六斤八兩	重九斤八兩	
				重 七 七 斤	

碾いて精米にする迄の費用は概を挽く費用が普通の粗米について平均すれば石當り一角で、

一擔の穀子(稈)を挽いて粗米とすれば五斗七升となるから、其の挽く費用は五分七厘、精米費は九分一厘で、精米用様の費用が二分四厘で總計一角七分二厘である。故に一擔の穀子に付いて言へば精米になつた後の數量は四斗七升で費用は一角七分二厘である。唯、この量及び費用の消耗中、碎米を除き皮糠、細糠、粗糠等消耗品の賣價は普通三角四分六厘である。

石當り穀子より精米にするまでの原價及び費用

假 定 額	精 米 碾 成 費		損 耗 品 賣 價
	精 米	碾 成	
假 定 額	假 定 額	假 定 額	假 定 額
一石五元	碾工(每石\$〇・一)五斗七升	\$〇・〇五七	碎 米(每石\$五)四升
	碾費(每石\$〇・一六)	\$〇・〇九一	皮細糠(每石\$〇・八)一斗六升
	糠碎を淘ぐ	\$〇・〇二四	粗 糠(即穀殼)一八斤
總 計		\$〇・一七二	
			\$〇・三四六

今、表を擧げて説明すれば下記の如くである。

## 第五節 江西糧食の輸出と輸入

江西糧食の供給と需要の情形は已に第一章中にて論じた。即ち米穀生産が豊富で他省を救済すべき餘剩額があるが、麥の生産と小麥粉の消費とを相對せしむれば、略々不足を感じ、反つて他省の供給を仰がねばならない。凡べて斯かる一切のことは一年糧食の輸出入上に共に甚だ顯著である。

唯、江西の四圍は八省に連なり、其の總門戸は九江であるが、南部梅嶺は廣東に通ずべく、西部萍鄉一帶は又湖南に連なり、東部黎川、廣昌、石城は又福建に近く、玉山の鐵道は浙江に連なり、湖口の水路は安徽に通じ、更に交通便利である。故に斯かる情勢の下にあつて所有貨物は、特に其の輸出にあつては、何れも近路を擇んで行き、其の九江を経由するものは實に一部分に過ぎない。曾て九江税關に奉職して居た米人ライト氏は其の著「商業と捐税」の中で、民國三年より七年に至る間に江西の貨物が東南北四境に輸出せる價格を評價し、其の九江税關を経由して輸出されるものは僅か全省の三分の一、其の他道を経由するものが反つて三分の二強であると言つてゐる。

斯かる評價を糧食に適用出来るか否かは自ら別問題ではあるが、米穀について言へば其の集中經路及び運輸道路が水道に依らざるもの無く、而して九江は南昌の下流に位し、南昌は又全省加工の中心地であるから糧食輸出入上にては九江は恐らく最も重要な門戸であらう。

併し乍ら糧食業者の言ふ所に據れば、全省の米穀輸出は九江を経由するもの十分の六、湖口を経由するものが十分の二、其他各處より輸出するものが亦十分の二であると言ふ。其の理由は江西米穀重要産地は贛河中、下流及び

撫河、信江一帶で、其の流れを下つて運ばれるのは理の當然である。次に中北部一帯は晚米を産するものが比較的多く、江西は普通早米を食し晚米を輸出してゐるが故に、中北部の米の過半は省外に輸出される。其の路線は自然必ず九江を経由し、其の一部は湖口に出ることになる。唯、所謂此の九江を経由するものの中、尙ほ一部の税關を経由せざるものが約六分の一ある。後にあげる數字（海關統計に據る）は實に全省輸出の十分の五前後である。

唯、斯かる評價がどの程度の正確さを持つて居るかは遽に斷言出來ないが故に、吾人が茲で論ずるものは即ち九江海關の數字を根據とする。

先づ食米に就いて言へば江西は長江流域の米を輸出する省であり、二十餘年來、宣統三年の時及び民國二年、民國三年の三個年を除き巨額の輸出をしない時はない。唯、民國四年以前毎年總額は十萬擔を超えなかつたが、糧食界人の言によれば當時蕪湖米市場の盛んな時、一般商人は何れも民船を用ひて往き、海關數字は一小部分に過ぎなかつたが故であるといふ。民國四年以後民國二十二年に至るまで十九年間、民國十五年は僅か六萬餘擔であつたが其の他各年は平均十五萬擔以上であり、就中民國八年、十二年、十七年、十八年等の四個年は平均一百萬擔以上であり、民國九年には貳百萬擔以上、民國十三年には二百四十萬擔以上である。一般の専門に輸出入を營んでゐる米商の評價に據れば、江西の食米輸出能力は常に一百五十萬擔以上であるが、普通輸出米穀を上海等の地方に運搬する場合には大船を仕立て、且つ大船を仕立てれば必ず海關を経由せねばならない。漢口の市價がよい場合には漢口に運ぶが、この時には大體民船を用ひ、民船は海關に報告しないものが甚だ多いから上述の數字は毎年などと相距ること甚だ遠いのである。

最近三十年來の江西食米輸出數量表

年	別	數	量(單位擔)	年	別	數	量(單位擔)
清光緒三〇年		一九〇四	二〇、三三四	民國九年		一九二〇	二、一〇一、八九八
三一年		一九〇五	七四、七六四	一〇年		一九二一	一六二、九二九
三二年		一九〇六	三〇、四三六	一一年		一九二二	二六三、九一六
三三年		一九〇七	七三、九四九	一二年		一九二三	一、二四七、九三一
三四年		一九〇八	一、三九〇	一三年		一九二四	二、四四七、八三一
清宣統元年		一九〇九	一三、四五〇	一四年		一九二五	六八〇、九三六
二年		一九一〇	六八、一二一	一五年		一九二六	六七、一五四
三年		一九一一		一六年		一九二七	三九四、八一六
民國元年		一九一二	二七、一三〇	一七年		一九二八	一、三九六、八九九
二年		一九一三		一八年		一九二九	一、〇九九、二九〇
三年		一九一四		一九年		一九三〇	三四四、八四六
四年		一九一五	五九、八九〇	二〇年		一九三一	二九七、九七九
五年		一九一六	三六六、四九七	二一年		一九三二	一二八、五二六
六年		一九一七	六三〇、五一六	二二年		一九三三	五三〇、九四一
七年		一九一八	四六三、八六二	總計			一四、四一九、六九二
八年		一九一九	一、四二三、四六一				

たゞ最近數年來大軍江西に雲集し同時に省内産地が縮小されたため輸出は激減したのは自ら必然のことである。ここに於て民國十七年より江西も竟に食米の輸入をなすに至り、民國十九年の時輸入したものである。

十六萬擔の外米があつた。元來産米をもつて著れた省がかくの如き巨額の外米を輸入してゐるのは、農業經濟の崩潰の一斑を語るものである。

最近六年來の江西食米輸入數量表

年 別	數		量		位	
	合 計	本 國	百 分 比	外 國	百 分 比	
民 國 一 七 年	一 九 二 八	一 四		一 四	一 〇 〇 〇 〇	
一 八 年	一 九 二 九					
一 九 年	一 九 三 〇	一 六 四、六 一 五	三、〇 九 七	一 六 一、五 一 八	九 八・一 二	
二 〇 年	一 九 三 一	八 四 〇		八 四 〇	一 〇 〇 〇 〇	
二 一 年	一 九 三 二	二 〇 三	二 〇 三			
二 二 年	一 九 三 三	三、七 九 三	三、七 九 三			
總 計	一 六 九、四 六 五	七、〇 九 三	一 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 四・一 九	一 六 二、三 七 二	九 五・八 一	

更に麥食にいたつては江西は全く不足を感じてゐる。江西省内には製粉所はないが小麥を運出するものは少い。同様に三十年來の小麥輸出情形について言へば、輸出數字のあるは僅に民國七年より十六年に至る迄、且つその中華民國七年の輸出額が十萬擔以上あつたのみである。而して民國十七年以後小麥も亦輸出を開始した。

最近三十年來の江西小麥輸出數量表

年	別	數	數(單位擔)	年	別	數	數(單位擔)
清光緒三〇年	一九〇四			民國九年	一九二〇	五〇、二八〇	
三一年	一九〇五		二一、一八九	一〇年	一九二一	二四、一二九	
三二年	一九〇六		二三、一七八	一一年	一九二二		
三三年	一九〇七			一二年	一九二三	一二、六七八	
三四年	一九〇八			一三年	一九二四	五、二〇一	
清宣統元年	一九〇九			一四年	一九二五	三七、六九九	
二年	一九一〇			一五年	一九二六	八一七	
三年	一九一一			一六年	一九二七	四二、一六四	
民國元年	一九一二		四四	一七年	一九二八	九六、九九三	
二年	一九一三			一八年	一九二九	四〇、一八三	
三年	一九一四			一九年	一九三〇	四八、七七九	
四年	一九一五			二〇年	一九三一		
五年	一九一六			二一年	一九三二		
六年	一九一七			二二年	一九三三	一、九九五	
七年	一九一八		一五四、二三一	總計		五七九、一一六	
八年	一九一九		一九、五五七				

最近六年來の江西小麥輸入數量表

年 別	數		量		外 國	位	百分比
	合 計	本 國	百 分 比	(單 位)			
民國一七年 一九二八	四	—	—	四	—	—	—
一八年 一九二九	二	—	—	—	—	—	—
一九年 一九三〇	一、六五六	一、六五六	一〇〇・〇〇	—	—	—	—
二〇年 一九三一	七二	七二	一〇〇・〇〇	—	—	—	—
二一年 一九三二	三、六六二	三、六六一	九九・九七	—	—	—	—
二二年 一九三三	四六七	四六三	九九・一三	—	—	—	—
總 計	五、八六三	五、八五三	九九・八三	—	—	—	—

小麥粉輸入は三十年來、民國三年より民國六年にいたる四年間を除き、其他の年になく、平均約五六萬擔前後であり、一省の消費量としては多い數字ではない。民國十九年後一躍して十萬擔以上となり民國二十年には三十萬擔以上あつた。ただ各年の洋粉を繰調すれば尙ほ少い。三十年來輸入の總計中、洋粉は僅か百分の一前後に過ぎなう。

最近三十年來の江西小麥粉輸入數量表

年 別	數		量		外 國	百 分 比
	合 計	本 國	百 分 比	位		
清光緒三〇年	一九〇四	一、八九〇	一〇〇・〇〇			
三一年	一九〇五	二、二五二	一〇〇・〇〇			
三二年	一九〇六	一〇、一七三	一〇〇・〇〇			
三三年	一九〇七	一一、三五五	一〇〇・〇〇			
三四年	一九〇八	一四、七二一	一〇〇・〇〇			
清宣統元年	一九〇九	一一、八一八	一〇〇・〇〇			
二 年	一九一〇	一三、〇五五	一〇〇・〇〇			
三 年	一九一一	一一、三五四	一〇〇・〇〇			
民 國 元 年	一九一二	一四、九九四	一〇〇・〇〇			
二 年	一九一三	一、〇八八	一〇〇・〇〇	一、〇八八	一〇・〇〇〇	
三 年	一九一四					
四 年	一九一五					
五 年	一九一六					
六 年	一九一七					
七 年	一九一八	五六、五四一	一〇〇・〇〇			

民國八年	一九一九	二四、五二五	二四、五二五	一〇〇・〇〇	一	一
九年	一九二〇	一九、九五八	一九、九五八	一〇〇・〇〇	一	一
一〇年	一九二一	六九、六七〇	六九、六七〇	一〇〇・〇〇	一	一
一一年	一九二二	八二、三八〇	八二、三八〇	一〇〇・〇〇	一	一
一二年	一九二三	七一、一四四	七一、一四四	一〇〇・〇〇	一	一
一三年	一九二四	九三、二二五	八八、五〇三	九四・九三	四、七二二	五・〇七
一四年	一九二五	九八、七〇四	八九、四三五	九九・七〇	二、六九九	〇・三〇
一五年	一九二六	六一、七七七	六〇、七三〇	九八・四〇	一、〇四七	一・六〇
一六年	一九二七	二六、一〇五	二五、九八〇	九九・五二	一、二五	〇・四八
一七年	一九二八	五四、五六九	五四、三四七	九九・五九	二、二二	〇・四一
一八年	一九二九	六六、五四九	六六、一〇三	九九・三三	四、四六	〇・六七
一九年	一九三〇	一四一、一〇八	一四〇、九二八	九九・八七	一、八〇	〇・一三
二〇年	一九三一	三二七、二四〇	三二三、七六〇	九八・九四	三、四八〇	一・〇六
二一年	一九三二	一四一、九三七	一三八、七〇三	九七・七二	三、二三四	二・二八
二二年	一九三三	二〇六、九八五	二〇六、九七四	九九・九九	一	〇・〇一
總計		一、六二六、一一七	一、六一一、二九三	九九・〇九	一四、八二四	〇・九一

三四

最後に江西豆類の輸出も亦特に見るべきものがある。三十年來の輸出額は平均毎年二、三十萬擔前後で近年にな

つて輸入あるも少敷にすぎない。

最近三十年來の江西豆類輸出數量表

年	別	數	年	別	數
清光緒三〇年	民國	三三四、三〇一	七年	民國	三二六、一九三
〃 三一年	〃	一九六、五四六	八年	〃	一二三、五二六
〃 三二年	〃	三七五、二〇七	九年	〃	二六三、九五六
〃 三三年	〃	四六二、八八二	一〇年	〃	二八四、五六七
〃 三四年	〃	三六七、〇一三	一一年	〃	三五四、一四四
清宣統元年	〃	四二九、七九七	一二年	〃	一八二、七六八
〃 二年	〃	二四三、八九〇	一三年	〃	一〇九、〇九二
〃 三年	〃	三七一、五六六	一四年	〃	一三〇、三九二
民國元年	〃	三六二、七〇九	一五年	〃	三二、九二八
〃 二年	〃	一三七、五〇六	一六年	〃	一五九、七一七
〃 三年	〃	四三四、八〇四	一七年	〃	五一二、二二五
〃 四年	〃	二〇五、三一一	一八年	〃	三二九、八六九
〃 五年	〃	一八九、六一六	一九年	〃	三九八、七二一
〃 六年	〃	四一七、五四六	二〇年	〃	一三三、九七三

民國二十一年	一九三二	四八、一七五	總計	八、〇三五、三四三
二十二年	一九三三	一一六、四〇四		

最近四年來の江西豆類輸入數量表

年 別	數		量 (單位擔)	
	合計	本國	百分比	外 國
民國十九年	一九三〇	四四〇	一〇〇・〇〇	—
二十〇年	一九三一	—	—	二一、九六九
二十一年	一九三二	—	—	二一、九六九
二十二年	一九三三	—	—	二一、九六九
總計	四五、九一五	四四一	〇・九六	四五、四七四

### 第六節 江西各縣の米價

江西各縣の米價の特徴は二つある。第一、江西は米穀産地であるが故に省内各縣米穀の價格は上海、漢口の比ではないのみならず、南昌、九江等大都市と比するも亦著しく低落してゐる。第二、河流の交通甚だ便利であり、又近年になつて全省の公路網が完成を告げたため前年の旱災後等の特殊事情の場合を除き、各地米價の差異は尙ほ徴

少である。民國二十二年之秋、南昌行營は江西糧食管理局を設け封鎖並に糧食調達等の事を處理せしめた。該局は民國二十二年八月成立し二十三年七月撤廢された。その存在してゐる間に各縣の米穀價格の統計を作つた。南昌、九江、修水區の修水、涂家埠、錦江區の高安、撫河區の臨川、信江區の餘江、贛江上流の贛縣、中流の吉安、下流の樟樹鎮、江湖區の鄱陽等はいづれもその中に含まれた。その所得の結果も大體上に論斷したのと似たものである。ただその中贛縣の價格は特殊環境の影響により當然別問題である。

今、(一)各地米穀價格の比較 (二)米價と商人の原價の二節に分けて述べよう。

### (一) 各地米穀價格の比較

江西各縣鎮間は交通便利なるため、差額が均等で且つ米穀の集中と輸出地點が均しく一定路線に制限されてゐるため、全省を大觀すれば米穀價格は差異の懸絶するもの極めて少く、穀子について言へば上等穀子は大體二元七、八角の間で中等穀子は二元五、六角の間で下等穀子は大體二元四、五角の間である。上等米は大體六元前後、中等は大體五元七、八角の間、下等米は大體五元五、六角の間である。

少數の例外を除き各地の價格に劇烈なる差異のあるものは極めて少い。所謂少數特殊情形とは第一、九江(穀價なし)、南昌、臨川等各地である。蓋し米穀最大市場であるため價格は普通一般より稍々高いのである。其の次ぎに上饒は地元の産米自給するに足らず、甚しきに至つては時には玉山等より輸入せねばならないので價格はこれがたけ高い。第三、贛縣及び南城兩處は特殊環境の影響を受け普通の情形を見ることは出来な。

今、民國二十二年八月より民國二十三年七月までの一ヶ年の江西各地各類の逐月の米穀市價を表示すれば左の如くである。

江西省各重要縣鎮の二十二年八月より  
 二十三年七月に至る上等穀子の市價變遷

(一律に市稱に換算(元))

縣鎮別	年												
	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	總平均
九江縣			二・〇三	二・〇二	二・二七	二・〇五	二・三三	二・四六	二・八五	二・九二	二・九三	二・八九	二・五二
塗家埠								二・四六	二・八五	二・九二	二・九三	二・八九	二・五二
修水縣	三・五三	三・六六	三・二七	二・七三	二・七三	二・八七	二・八七	二・五五	二・六〇	二・六四	二・七〇	二・四三	三・〇〇
南昌市						二・八六	二・八七	二・五五	二・六〇	二・六四	二・七〇	二・四三	三・〇〇
市鎮		二・〇六	二・三三	二・三三	二・三三	二・四九	二・五五	二・六〇	二・六四	二・七〇	二・七〇	二・四三	三・〇〇
高安縣		二・〇三	二・三三	二・三三	二・三三	二・四九	二・五五	二・六〇	二・六四	二・七〇	二・七〇	二・四三	三・〇〇
荏港鎮		二・〇三	二・三三	二・三三	二・三三	二・四九	二・五五	二・六〇	二・六四	二・七〇	二・七〇	二・四三	三・〇〇
臨川鎮	三・三三	三・一五	三・一五	二・九五	二・九五	二・八二	二・七七	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三
上頓渡	二・九五	二・九五	二・六九	二・六九	二・六九	二・七七	二・九二	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三
李家渡	二・九五	二・九五	二・六九	二・六九	二・六九	二・七七	二・九二	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三
南城縣	二・〇四	二・四五	二・六九	二・六九	二・六九	二・七七	二・九二	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三
南金埠	一・九〇	二・四五	二・六九	二・六九	二・六九	二・七七	二・九二	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三
黃金埠	一・九二	二・四五	二・六九	二・六九	二・六九	二・七七	二・九二	三・〇三	三・〇三	三・〇九	三・一三	三・三三	二・七三

江西省各重要縣鎮の二十二年八月より二十三年七月に至る中等穀子市價變遷 (一律に市桶に換算(元))

縣別	年		縣別
	月	年	
九江縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
修水縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
南昌縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
漢鎮	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			

縣別	年		縣別
	月	年	
贛安縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
萍鄉縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
峽江縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
樟樹縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
上饒縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
鄱陽縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			
瑞洪縣	八月	二	市鎮
	九月	十	
	十月	二	
	十一月	年	
	十二月		
	一月	二	
	二月	十	
	三月	三	
	四月	年	
	五月		
	六月		
	七月		
總平均			



縣 別	年	縣 別														
		九 江 縣	徐 家 埠	修 水 縣	南 昌 市	市 漢 鎮	高 安 縣	荏 港 鎮	臨 川 鎮	上 饒 鎮	李 家 渡	南 城 縣	黃 金 埠	瑞 洪 鎮	鄱 陽 縣	上 饒 縣
二 十 二 年	八月							二·六〇	二·八五	二·四六	二·四〇	一·九〇	一·六六			
	九月					一·八	二·〇〇	一·四	二·四		二·〇	一·九				
	十月					二·〇	一·五	二·五〇	二·四	二·四	二·八五	一·九	一·七六			
	十一月		一·八		二·四	二·三	二·〇〇	二·四		二·四		二·〇				
	十二月		二·〇		二·五	二·三	二·三		二·三〇	二·〇	二·八		二·二	二·四	二·四	
	二 十 三 年	一月		二·〇		二·六	二·三	二·〇		二·四	二·〇	二·八	二·五	二·二	二·六	二·六
		二月				二·七	二·六	二·七	二·五	二·五	二·九	二·〇	二·五	二·九	二·九	三·一
		三月		二·三		三·〇	二·九	二·九	二·七	二·七	二·六	三·〇	二·七		二·九	二·九
		四月		二·六		三·〇	二·八	二·八	二·八	二·八	二·七	三·七			二·九	二·九
		五月		二·九		三·三	二·九	二·八	二·八	二·九	二·七	三·六		二·七	二·七	三·七
	三 年	六月		二·八		三·四	二·九	三·〇	三·〇	三·〇	三·〇	三·四		二·八	二·八	三·五
		七月		二·四			三·二	三·二	三·二	三·二	三·八	三·六		二·六	二·六	三·六
總平均			二·五		二·九	二·五	二·五	二·五	二·五	二·七	二·八	一·九	二·四	二·四	二·八	

江西省各重要縣鎮二十二年八月より二十三年七月に至る上等米市價變遷

(一律に市桶に換算(元))

縣別	年												
	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	總平均
樟樹鎮													一九二
萍鄉縣													一八九
吉安縣				二二七									
贛縣					一九九								
峽江縣						二二三							
吉安縣							二二六						
萍鄉縣								二八九					
峽江縣									三〇三				
吉安縣										三二二			
樟樹鎮											三二三		
萍鄉縣												二七六	
峽江縣													二六三
吉安縣													
贛縣													
九江縣		七〇〇	七〇七	六〇三	六〇〇	五九六	六〇九	六二二	六六〇	六八二	七三三	八二五	六六九
修水縣				五三三	四九五	五二六	五三三	五二六	六〇〇	六二七	六三三	六七三	五七三
南昌市	七八九	七八九	七八九	五九四	六〇〇	六〇四	六八三	六六九	六〇〇	七〇三	七八九	八二〇	七二〇
市漢縣				五〇七	五〇三	五〇九	五二五	五九一	六〇〇	六二四	六七二	七三〇	五九〇
高安縣				四〇八	五〇五	五〇三	五三三	五九〇	六〇〇	六二四	六七二	七三〇	五九〇
花港鎮				五二八	五〇三	五〇三	五七九	六〇〇	六三二	六四八	六六三	七一九	五八〇
臨川鎮	七〇六	六三三	五六四	五八八	五八〇	五九三	六三三	六八三	七〇〇	七二八	六七七	七〇七	六四九

上	南	黃	瑞	鄒	上	樟	峽	李	萍	吉	濟
頓	城	金	洪	陽	饒	樹	江	家	鄉	安	縣
波	縣	埠	鎮	縣	縣	鎮	縣	渡	縣	縣	縣
六八六	六八五	五〇八	五〇三	五〇三	六六六	六六六	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五
五九六	六七〇	五〇八	五〇三	五〇三	五五五						
六四九	七三四	五〇五	四九四	四九四	五五五						
五五六	七二八	四八八	五〇四	五〇四	五五五						
五〇六	六四三	四七九	五〇六	五〇六	五五五						
五七五	六三五	五六三	五五〇	五五〇	五五五						
六二九	六七五	五七三	五五四	五五四	五五五						
六三九	七一九	五八三	五六一	五六一	五五五						
六五三	七五六	五九九	五九六	五九六	五五五						
六五三	七八三	六二五	六二五	六二五	五五五						
六九一	七八三	六二〇	六二〇	六二〇	五五五						
七三三	七二七	六二七	六二七	六二七	五五五						
六三三	七二六	五五五									

江西省各重要縣鎮二十二年八月より二十三年七月に至る中等米市價變遷

(一律に市桶に換算(元))

縣	鎮	別	月	年
九	江	縣	八月	二
			九月	十
			十月	二
			十一月	年
			十二月	
			一月	二
			二月	十
			三月	三
			四月	年
			五月	
			六月	
			七月	
			總平均	

吉 萍 峽 樟 上 鄱 瑞 黃 南 李 上 臨 荏 高 市 南 修 徐  
 安 鄉 江 樹 饒 陽 洪 金 城 家 家 川 港 安 市 昌 水 家  
 縣 縣 縣 鎮 縣 縣 鎮 埠 縣 渡 渡 鎮 鎮 縣 鎮 市 縣 埠

							六·七〇			六·七五				七·六三			
							五·一〇	五·九八	五·九六	六·〇二	四·七二	三·八二	五·三三	七·六六			
							四·七一			五·四四	四·八〇		四·六六	六·六六			四·三三
五·三二	四·四六		五·二三		四·六九	四·六五		五·〇六		五·八八		四·七九	四·七二	五·七九			四·七七
五·三八	四·六二		五·四三	八·三六	四·七二	四·六六		四·八七	五·三七	五·八〇		四·九〇	四·八九	五·七〇			四·九二
五·四三	四·三三		五·六二	八·四三	五·〇〇	五·五五		四·八八	五·〇六	五·三三		五·九〇	四·九三	五·〇〇			五·〇〇
五·九四	五·〇八		六·〇四	八·三七	五·一九	五·六三		五·四三	六·一〇	六·三三	五·五七	五·二〇	五·〇七	五·七〇			五·〇〇
六·二二	五·三四				六·三三	五·七二		五·九二	六·二五	六·八三	五·八三	五·二〇	五·五二	六·一〇	五·三五		五·五三
六·七二	五·四三		六·三九		六·五三	五·五八		六·四二	六·三六	七·〇〇	六·二〇	六·一七	五·八四	六·九七	五·七五		五·九二
六·八三	五·六〇		六·四六		六·五五	五·九五		六·四三	六·三三	七·一八	六·二九	六·五五	五·八八	七·二四	五·五九		六·〇六
六·八九	五·八四		六·五六		六·四七	五·七三		六·〇〇	七·四〇	六·六九	六·七二	六·四三	六·三五	七·八三	五·四九		六·三三
六·三三	五·三九		六·八四		六·三三	六·〇〇		六·四四	七·六八	六·八四	七·〇五	七·〇七	六·五七	八·一〇	五·〇〇		六·五七
六·〇〇	五·〇〇		六·〇七	八·三九	六·四〇	五·七〇		五·五一	六·八三	五·六八	六·三三	六·四四	五·四九	六·七五	五·四四		五·五二

贛 縣

一・三・六三  
一・三・三三  
一・二・八〇  
二・七・三三  
二・二・八八  
二・二・〇三  
二・二・〇六

江西省各重要縣鎮二十二年八月より二十三年七月に至る下等米市價變遷 (一律に市棉に換算元)

縣 鎮 別	年												
	二十二年						二十三年						
	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	總平均
九江縣	四・七四	四・八五	四・五五	四・五六	四・九〇	四・九二	五・〇〇	五・〇三	五・九四	五・九四	六・三二	七・三三	五・六三
涂家埠									五・八二	五・九一	六・一一	六・四四	五・五三
修水縣									五・七九	六・三九	六・六五	七・〇五	五・九二
南昌市	五・八九	五・〇〇	五・三〇	五・三〇	五・三〇	五・三〇	五・三〇	五・七九	六・三九	六・六五	七・〇五	七・〇〇	五・九二
市鎮									五・七九	六・三九	六・六五	七・〇五	五・九二
高安縣									五・七九	六・三九	六・六五	七・〇五	五・九二
荏港鎮									五・七九	六・三九	六・六五	七・〇五	五・九二
臨川鎮	六・五五	五・八二	五・四三	五・四三	五・四三	五・四三	五・四三	五・九六	六・〇二	六・一一	六・〇八	六・七三	五・〇〇
上頓渡									六・〇二	六・一一	六・〇八	六・七三	五・〇〇
李家渡									六・〇二	六・一一	六・〇八	六・七三	五・〇〇
南城縣									六・〇二	六・一一	六・〇八	六・七三	五・〇〇
黃金埠	四・二九	四・〇〇	四・三六	四・三六	四・三六	四・三六	四・三六	四・七五	五・三六	五・六二	六・〇二	六・三三	五・二六

豫	吉	萍	峽	樟	上	鄱	瑞
安	安	鄉	江	樹	饒	陽	洪
縣	縣	縣	縣	鎮	縣	縣	鎮
							四・九〇
				四・二五			四・九〇
				四・三			四・三八
		四・八			七・六四		四・四六
五・四		四・三六			八・三		四・六六
五・〇		四・五		五・四三	八・九		四・五三
		四・八三		五・八	八・六		四・三
	六・四四	五・〇一			七・九		五・〇一
	六・五六	五・三〇		六・一九	七・四〇		五・七
	六・四	五・三		六・三	七・八		五・七
	六・七〇	五・三三		六・六	八・二		五・四六
	六・四九	五・三六		六・六	八・二		五・七六
	六・二	四・九〇		五・六三	七・九〇		五・〇二

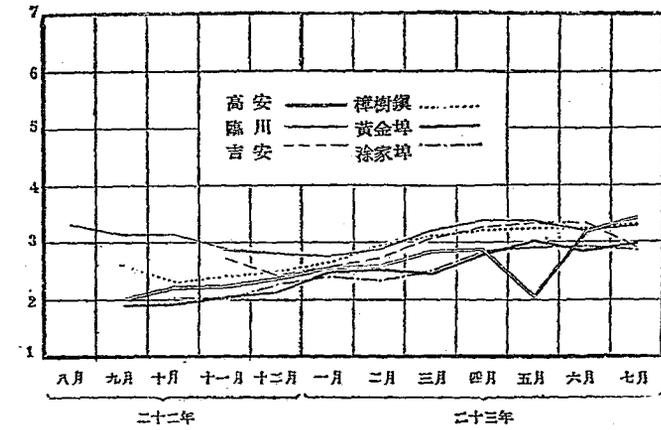
試みに錦江流域の高安、撫河流域の臨川、贛河流域の吉安、樟樹鎮、信河流域の黃金埠、修水流域の涂家埠等六ヶ所を比較する時、穀價方面は臨川が民國二十二年下半年期に稍々高騰を呈し、高安が民國二十三年五月に一度暴落を演じた外、其他各地はいづれも劇烈なる波動少く、且つ彼此の差異は四、五角が普通の幅度である。

米價の一般騰落情形は穀價より劇しい。その中臨川は常に各地の上であり、吉安之に次ぎ、樟樹鎮又之に次ぐ。この一年の米價變動中六縣ははつきりと二組に分れ、上述三ヶ所が一組となり比較的高騰で、高安、黃金埠、涂家埠が又一組で比較的低い。各地各月の價格差異の幅度は常に一元前後で、唯昇降趨勢は大體相似て居り、民國二十二年最後の三ヶ月に各地の價格は一致して暴落し、二十三年月二―五月には各地の價格は又一致して昇騰してゐる。民國二十二年以前の米穀價格は江西財政廳の調査によれば、ただ各縣の詳細が一定してゐないが尙參考資料とす。

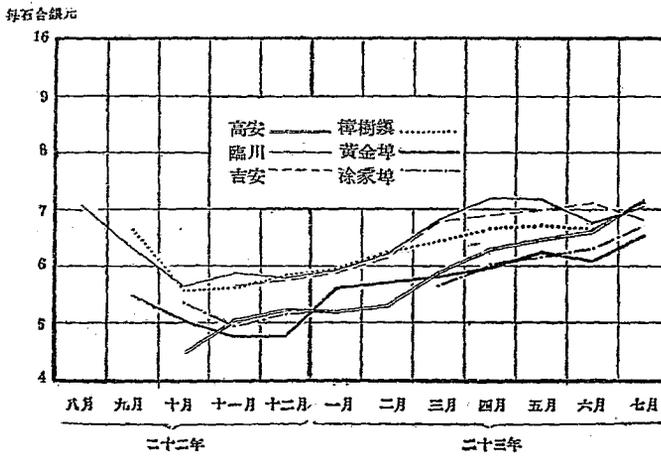
ることが出来る。

其中特記すべきものは民國十九年の時全省不作で各地米價昂騰し、一擔十八、九元になつたことである。

第一圖 江西省各縣鎮の上等穀の市價趨勢圖



第二圖 江西省各縣鎮の上等米の市價趨勢圖



江西省最近三年來の各縣穀價

(每石合銀元數)

縣別	十一年		十二年		十三年	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低
南昌	六・〇〇	二・〇〇	四・八〇	三・〇〇	四・〇〇	二・〇〇
東海	七・五〇	三・四〇	四・〇〇	三・〇〇	四・〇〇	三・四〇
新建	八・〇〇	二・〇〇	四・〇〇	三・〇〇	四・〇〇	二・六〇
奉新	五・〇〇	四・〇〇	二・一〇	一・七〇	二・一〇	一・七〇
臨川	六・八〇	三・〇〇	四・六〇	三・二〇	四・六〇	二・六〇
上饒	三・〇〇	二・〇〇	四・五〇	三・二〇	四・〇〇	二・五〇
萍鄉	二・六〇	二・〇〇	二・六〇	二・〇〇	四・〇〇	二・五〇
武寧	四・〇〇	二・六〇	三・七〇	二・八〇	三・八〇	二・七〇
餘干	四・〇〇	二・五〇	三・〇〇	二・二〇	三・〇〇	二・二〇
宜豐	三・八〇	三・四〇	三・〇〇	二・二〇	二・五〇	二・〇〇
高安	三・八〇	三・四〇	三・四〇	三・三〇	二・五〇	二・〇〇
南康	七・二〇	三・四〇	三・四〇	三・三〇	二・五〇	二・〇〇
修水					四・〇〇	二・一〇
樂平					四・〇〇	二・二〇



東 南 縣 別	價 別	格 年	
		最 高	最 低
鄉 昌	格 年	十 年	一七・〇〇
		九 年	八・〇〇
	格 年	二 十 年	
		十 年	
	格 年	二 十 年	
		一 十 年	
	格 年	二 十 年	
		一 年	八・〇〇

江西省最近三年來各縣の米價

(每石合銀元數)

瑞 浮 黎 資 萬 湖 永 德 彭 星 廣	昌 梁 川 谿 安 口 豐 安 澤 子 豐						
四・五〇	一〇・〇〇	七・〇〇	九・〇〇	三・八〇	六・〇〇	九・〇〇	七・〇〇
	二・九〇	三・〇〇	四・五〇	三・〇〇	四・五〇	五・〇〇	四・二〇
六・〇〇	五・三〇	七・〇〇	四・八〇	三・八〇	四・五〇	四・〇〇	五・二〇
	三・六〇	三・〇〇	四・〇〇	三・〇〇	三・五〇		三・四〇
	五・三〇	四・〇〇	三・〇〇	三・五〇	三・八〇	三・五〇	四・六〇
三・五〇	三・七五	二・五〇	二・五〇	三・〇〇	三・〇〇	二・五〇	四・〇〇

進 九 南 永 清 玉 樂 修 南 高 宜 餘 武 萍 上 臨 奉 新

賢 江 豐 修 江 山 平 水 康 安 豐 干 寧 鄉 饒 川 新 建

七·八·一  
六·〇·〇  
〇  
一·七·一  
〇·〇  
〇  
一·三·一  
〇·〇  
〇  
一·四·一  
〇·〇  
〇  
一·五·一  
〇·〇  
〇  
八·八·一  
四·〇  
〇  
一·二·一  
〇·〇  
〇  
八·九·一  
〇·〇  
〇  
五·五·一  
二·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
一·二·一  
〇·〇  
〇  
一·九·一  
〇·〇  
〇  
一·九·一  
〇·〇  
〇

五·八·一  
〇·二·〇  
〇  
五·五·一  
〇·八·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
四·〇  
〇  
五·五·一  
三·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
四·四·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
四·〇  
〇  
一·一·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
四·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇

一·二·一  
五·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
四·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
九·〇  
〇  
八·八·一  
六·〇  
〇  
五·五·一  
二·〇  
〇  
一·一·一  
〇·〇  
〇  
九·九·一  
五·〇  
〇  
六·六·一  
三·〇  
〇  
一·〇·一  
〇·〇  
〇

八·八·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
四·〇  
〇  
五·五·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
四·〇  
〇  
五·五·一  
三·〇  
〇  
七·七·一  
三·〇  
〇  
四·四·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
八·〇  
〇  
五·五·一  
五·〇  
〇  
七·七·一  
五·〇  
〇

七·七·一  
六·〇  
〇  
一·一·一  
〇·〇  
〇  
八·八·一  
二·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
〇·〇·一  
〇·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
〇·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
三·〇  
〇  
八·八·一  
五·〇  
〇  
八·八·一  
〇·〇  
〇  
一·〇·一  
〇·〇  
〇  
九·九·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
三·〇  
〇  
九·九·一  
〇·〇  
〇

五·九·一  
〇·七·〇  
〇  
六·六·一  
〇·九·〇  
〇  
四·四·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
五·五·一  
〇·〇  
〇  
四·四·一  
二·〇  
〇  
六·六·一  
〇·〇  
〇  
五·五·一  
五·〇  
〇  
六·六·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
七·七·一  
〇·〇  
〇  
五·五·一  
〇·〇  
〇  
六·六·一  
一·〇  
〇  
五·五·一  
五·〇  
〇  
六·六·一  
〇·〇  
〇

湖 永 德 彭 星 廣 安 吉 金 上 靖 新 南 新 宜 安 德 崇

口 豐 安 澤 子 豐 福 安 谿 高 安 塗 城 喻 黃 義 興 仁

一  
九  
〇  
〇

九  
〇  
〇

一  
五  
〇  
〇

一  
九  
〇  
〇

一  
七  
六  
〇

六  
〇  
〇

九  
〇  
〇

一  
一  
二  
〇

一  
二  
〇  
〇

六  
五  
〇

八  
七  
〇

五  
〇  
〇

六  
五  
〇

一  
一  
〇  
〇

一  
〇  
〇  
〇

一  
二  
〇  
〇

七  
〇  
〇

五  
二  
〇

六  
七  
〇

一  
二  
〇  
〇

九  
〇  
〇

一  
〇  
〇  
〇

八  
〇  
〇

一  
二  
六  
〇

八  
五  
〇

八  
〇  
〇

八  
六  
〇

九  
三  
〇

七  
〇  
〇

六  
五  
〇

九  
〇  
〇

九  
七  
〇

七  
二  
〇

七  
七  
〇

七  
〇  
〇

五  
三

九  
〇  
〇

九  
〇  
〇

九  
〇  
〇

七  
〇  
〇

一  
三  
〇  
〇

六  
〇  
〇

七  
五  
〇

八  
〇  
〇

六  
〇  
〇

七  
六  
〇

九  
四  
〇

七  
〇  
〇

七  
四  
〇

八  
〇  
〇

三  
五  
〇

六  
五  
〇

六  
八  
〇

六  
〇  
〇

一  
一  
〇  
〇

三  
〇  
〇

七  
〇  
〇

五  
二  
〇

四  
〇  
〇

六  
八  
〇

六  
五  
〇

六  
〇  
〇

六  
一  
〇

五  
五  
〇

三  
〇  
〇

萬安	資縣	黎川	浮梁	瑞昌
一三・〇〇	九・〇〇	一七・〇〇	五・〇〇	六・二〇
六・〇〇	七・〇〇	九・〇〇	六・〇〇	四・〇〇
五・〇〇	四・〇〇	六・四〇	六・四〇	六・四〇

(二) 米價と商人の原價

江西各縣の米穀販買者と米穀加工者の半數以上は相混合し、一般に碾坊及び碾米廠等は時に行家を兼ねてゐるのを除き大部分はいづれも小賣店を設け、精製した精米を他人に轉賣してゐる。而して加工機關にして人に代つて精米して收入を計るを業としてゐるものは或は絶無といふことが出來よう。この故に江西全省の米市中九江を除き商業利潤最大なる場合は穀子を購入し精米となし賣出す過程である。一般糧食商は言つてゐる、「江西各縣と一般純粹消費區域（上海の如き）とを比較する時江西の穀價は卸賣値に等しく、米價は小賣値となつてゐる。けだし消費區域中、米店の購入するものは精米であるが、江西各縣の米店（最も小なるものを除き）の購入するものは大部分穀子であるが故に、この時の穀價は即ち消費區域の米店の購入價格である」と。

この言は實に理由のないことではない。けだし江西各縣はいづれも米穀を産し、市場に出賣されてゐるものは、大部分農民又は小賣人の穀子であり、又各地に加工機關が甚だ普遍してゐるから、一般商人は最も小なるものを除き穀子を購入し精米として賣出すことを欲しないものはない。自ら精製出來れば固より有利であるが碾坊、碾米廠

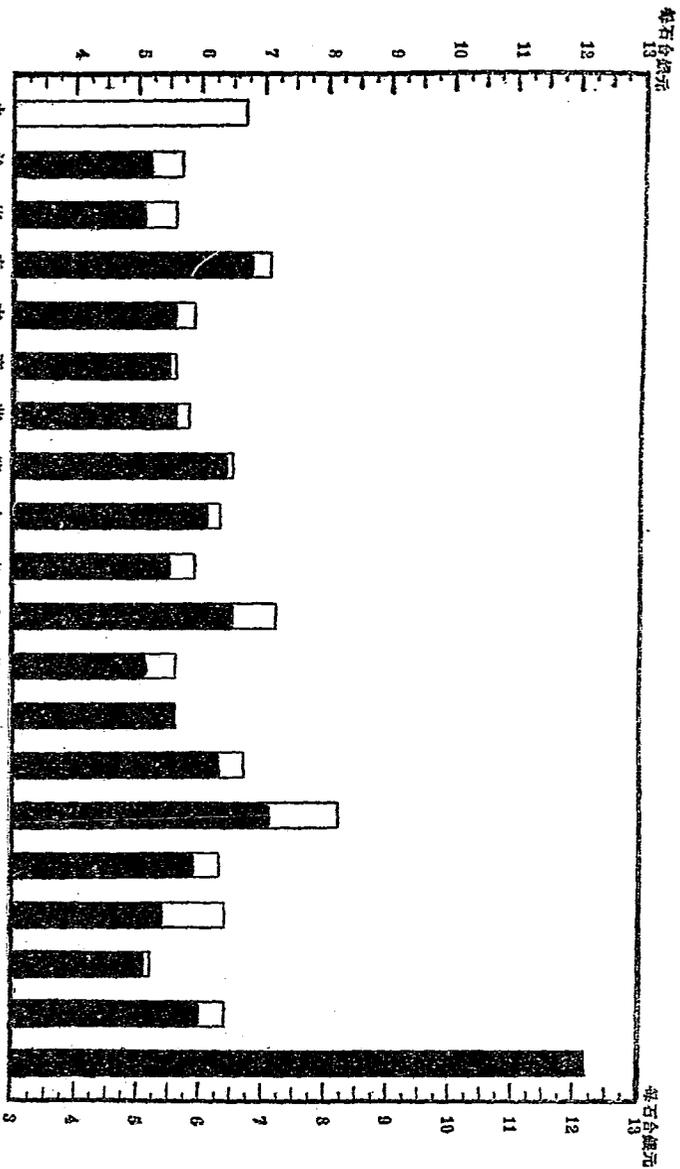
に代つて精製させるも有利である。これで純粹消費區域中にて運搬されて來るものゝ大部分が精米である状態とは自然異つてゐる。

穀子を精製して精米となす過程、即ち分量上の消耗、費用の計算及び消耗品の賣價等は已に加工機關を論及した時詳述した。かかる計算が可能である場合、この方法に依り過去一年來の穀價に據り、同類米價の實際原價を算出することが出来る。左圖に示す所は上等米の一例である。

左圖の中から吾人は各地上等米の市場價格と、その穀子價格及碾製過程上に算出される實際原價が一致してゐないのを容易に窺ふことが出来る。二十縣の中、高安、臨川、瑞洪、萍鄉、贛縣等小數地方が僅か數分乃至一角の差あるのを除き、實際原價の線はいづれも市場價格の線に比して低い。修水、涂家埠、李家渡、黃金埠等に至つては兩者の差の幅度がいづれも五角前後であり、上饒、峽江にては一元以上である。これ即ち市場價格下に隠藏された商業利潤の真相である。

第三圖 江西南各縣上等米市價と其の原價比較圖

坪六



注 (1) 時期は二十二年八月より二十三年七月まで (2) 上等米一石の原價は上等米二石一斗二升八合として市價に換算した。但  
 碾費を加へ消耗品及び買出後同販する費用を除いて得たる例格なり。(3) 九江縣には當時市場なき故原價は極く。

## 第七節 度量衡制

江西境内は河流に交叉し交通發達し米穀集中にいつれも一定の路線があり、各地米價の變動情況及び差異の程度はいづれも劇甚ではなく、江西の省内市場は相當整備してあるといふことが出来る。この理を以つて見れば各地の度量衡は相等統制されてゐる筈であるが周知の如く事實は全く然らざるものがある。

江西米穀市場度量衡の差異は南昌に於いて見られる程度でも、已に人を驚かすものがある。各地より南昌にいたる穀子の如きは毎石重量の相等しきものは實に少い。例を擧げて言へば、五十早と新種穀は毎石重量一一・七斤であるが鄱陽早は一〇・五斤、崇仁早、撫州早、豐城早は一〇九・三斤、吉安早は一〇八・二斤、湖南早は一〇七・一斤、觀音秈、南昌晚、南昌小晚、新建大晚、豐城晚、撫州晚及び瑞州晚等一一四・〇斤である。糯米は普通斤量いつれも小で黄穀糯米は一〇〇・〇斤、白穀糯米は九七・七斤、紅穀糯米は九五・四斤である。九江市場に見られるものが該省上等米は普通一九〇・〇斤（市秤）、二等米は一八五・〇斤、下等米は一八〇・〇斤である。

南昌、九江尚ほかくの如くであり、其他各地情形の懸絶は更らに想ふべきである。江西糧食管理局は全省各縣鎮の米市の斗斛を調査しこれを市桶に比較すると、原來の所謂一石には多い場合は一・二二石、少ない時には僅か〇・七八石であるのを發見した。

### 江西省各縣鎮糧食斗斛の市桶換算表（單位石）

河東鎮	崇仁縣	江家埠	楓港鎮	豐城縣	瑞洪鎮	市汊鎮	安義縣	臨川縣	餘江縣	萬舍鎮	奉新縣	乾州鎮	餘干縣	三下渡	縣鎮別	穀子數	精米數
一·〇五	一·〇二	一·〇六	一·〇四	一·〇五	一·一八	一·一〇	一·〇八	一·〇五	一·〇五	一·一〇	一·〇八	一·〇八	〇·九四	一·〇八			
一·〇五	一·〇二	一·〇六	一·〇六	一·〇五	一·一八	一·一〇	一·〇八	一·〇五	一·〇五	一·一〇	一·〇八	一·〇八	一·〇六	一·〇八	縣鎮別	穀子數	精米數
鄧家埠	大濟渡	新喻縣	溫家坡	宜黃縣	李家渡	黃金埠	東鄉縣	廣潭鎮	進賢縣	萬家埠	樟樹鎮	馬口鎮	餘程鎮	上頓渡	縣鎮別	穀子數	精米數
〇·七八	一·〇八	一·〇四	〇·九七	一·一五	〇·九一	〇·八三	一·〇八	一·〇九	一·〇八	一·〇八	一·〇五	一·〇八	一·〇〇	一·〇五			
〇·七八	一·〇六	一·〇四	一·〇五	一·一〇	一·〇五	〇·九五	一·〇六	一·〇八	一·〇八	一·〇八	一·〇五	一·〇八	一·〇〇	一·〇五	縣鎮別	穀子數	精米數
雲山鎮	九江縣	羅坊鎮	清江縣	謝埠鎮	新淦縣	黃土墟	貴溪縣	荏港鎮	池溪橋	東林橋	藏坵鎮	濟溝鎮	德安縣	永修縣	縣鎮別	穀子數	精米數
一·〇一	一·〇〇	一·〇九	一·〇五	一·〇八	一·〇七	一·〇五	一·〇九	一·〇六	一·一〇	一·一〇	一·〇二	一·〇五	一·二二	一·〇八			
一·〇一	一·〇〇	一·〇九	一·〇五	一·〇八	一·〇七	一·〇五	一·〇九	一·〇六	一·一〇	一·一〇	一·〇二	一·〇五	一·二二	一·〇八	縣鎮別	穀子數	精米數

重量について言へば普通所謂一石なるものも漫然としたもので標準はない、同じ湖口で同じ一石でも上等米の重量は一五二斤、早穀の重量は僅か九六斤、小麦の重量は僅か八六斤である。又同じ瑞昌にても上等米は每石重量一〇六斤、下等米は一三五斤である。又同じく上等米でも安南は每石一八〇斤であるが徳安は一〇四斤にすぎない。差異の複雑してある情形は人をして統一の必要を感じしめる。

江西省各縣鑛各種糧食每石重量表 (重量單位普通斤)

縣別	糧食名稱										該縣所用之名稱
	上等米	中等米	下等米	早穀	晚穀	糯米	小麥	黃豆	綠豆		
南昌縣	一三五	一三二	一三一	一〇二	一〇四	一三二	一二六	一二六	一四四	市秤	
新建縣	一四八	一四〇	一三八	一〇八	一〇八	一四〇	一二〇	一三〇	一四〇	二七河福	
(新建縣)	一四四	一四二	一四〇	一〇〇	一〇〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇		
永修縣	一四四	一四二	一四〇	一〇二	一〇〇	一四五					
靖安縣	一一〇	一〇五	一〇〇	七五	八〇	六五	一〇〇	一四〇			
奉新縣	一四〇	一三七	一三五	一〇二	九八	一三二		一一五	一一六	二五升秤	
德安縣	一〇四	一〇二	一〇〇	七五	七四	六九	九五	一〇五			
銅鼓縣	一三〇	一二九	一二七	九〇	九〇	二八	一一三	一三四	一一八	條印秤	
瑞昌縣	一六〇	一五〇	一三五	一〇〇		一五〇	一二〇	一一〇	一一五	米は官秤を以つて、 雜糧は鄉秤を以つてする	
星子縣	一四五	一三八	一三二	一〇五		一四四	一二〇	一三〇			

定南縣	信豐縣	南康縣	泰和縣	吉安縣	清江縣	清江縣	清江縣	宜豐縣	高安縣	南城縣	東鄉縣	進賢縣	樂平縣	浮梁縣	鄱陽縣	湖口縣	都昌縣
一八〇	一四〇	一二五	一四〇	一四二	一四二	一四〇	一二五	一〇六	一五六	一四〇	一二八	一二六	一四〇	一四二	一五二	一二五	
一七五	一四〇	一二五	一二〇	一三八	一三九	一四〇	一三五	一二〇	一四六	一五〇	一三八	一二四	一二〇	一四〇	一三八	一五〇	一二三
一六七	一四〇	一二五	一一六	一三三	一三五	一三八	一三〇	一二〇	一四五	一三一	一二〇	一〇八	一四〇	一三六	一四八	一二〇	
一四〇	一〇八	一〇〇	八〇	九八	九八	一〇〇	一〇二	九六	一〇四	一一八	一一〇	九八	八四	一三〇	九六	九六	九五
一三〇	一〇八	一〇〇	八六	九六	一〇三	一〇三	一〇四	九四	一〇七	一〇八	一一〇	九六	八二	一三〇	九八	一〇〇	一
一七七	一三六	一二五	一一四	一三二	一三四	一四〇	一三五	一一六	一四五	一五三	一二〇	一二〇	二六	一四〇	一三八	一五四	一二五
	一〇〇	一〇〇	一一〇	一二〇	一一八	一四〇	一三〇	一三八	一四〇	二四	二四	一一八	一四〇		八六	一二〇	
一七一	一三六	一二五	一二〇	一三二	一四六	一二四	一四〇	一〇五	一五三		一四〇	二二八	二二〇	二二五	一四四	一二〇	
一七五	一三六	一三一					八〇	一七		一四〇			一七			一四〇	
十升樹		二五正樹	五升樹	三十升樹		河樹	正河樹								焚七七樹		

糧食運搬販賣上度量衡制の劃一は實に重要な事であり、各地各石重量及び斗斛容積の不一致等の情形はその結果實に市場の統一性を破壊し、米穀の流通を不円滑ならしめ、市價をして漫然として標準なからしめ、中間者をして利を得せしめる。之に比すれば時間の遷延及び人工の浪費等は小なるものにはすぎない。

## 第八節 倉庫情形

穀物蓄積の制は我國では已に久しく行はれてゐる。その糧食調整上の作用が甚だ大なるが故に糧食調査にてもこれに對して一章をおく。江西は產米區域であり、自給の外年に剩餘があるが故に昔から各縣公私義倉が等しく甚だ發達し、平均毎年舊米を販賣し、新米を貯藏し、一旦荒年に遇ふもこれによつて救済することが出来たのである。民國十六年以後各地倉庫貯藏は漸次弛廢し、或は倉庫が長年修築せず、或は貯藏穀物を餘すところなく消費してつた。近年にいたり貯藏政策の推行は中央から各省にいたるまで何れも積極的に行はれるにいたつた。ここに於て江西の穀物蓄積の情形は始めて略々舊觀を復した。ただ連年の災患により民力凋衰し、實際穀物を保存してゐるものは總じて豫定の計畫の如くには行かない。江西の倉庫貯藏は左の五種に分れる。

一、縣倉。即ちこれは一縣の備荒總豫備倉で全縣の公有となし、その保存穀物の集收計畫、補充、使用は全縣を以つて標準範圍としてゐる。但し使用は災害狀況により之を變更することが出来る。規定に據れば分倉を設くることは出来ないことになつて居り、これにより漸次分割される危険を防いでゐる。

二、區倉。即ちこれは全區の公共穀物保存倉庫で、保存穀物の蒐集、補充、使用は、全區を標準範圍とする。但

し災害情況により之を變更することが出来る。區倉は縣政府により斟酌處理され、その所藏貯穀は規定に従つて整理保存し、任意に持ち出して一緒にしたり分散したりすることが出来ないやうに定められてゐる。ただし各縣はそれらの區倉を同時に處理出来ないのです。保存をなさなければかかる區倉は永遠に成立の望はないからである。

三、郷倉と鎮倉。これは一郷一鎮の公共積穀倉で、積穀の集中及び補充は、一郷一鎮を以つて標準範圍となし、恤貧救荒に用ふるを主旨とし、省政府はこれは各地方が必ず設立すべき基本倉庫と規定してゐる。

四、社會倉。私人團體又は社會團體が濟荒處理の積穀倉である。

五、義倉。私人の義捐を集めた積穀倉である。現在、各縣の所有してゐるのは縣倉及び郷鎮倉の二種のみで、大きい掠奪の後では社會倉、義倉は決して出來さうにもない。

縣倉、區倉、郷鎮倉の貯藏の來源は省政府により規定されたものは左の如くである。

(一) 江西各縣市倉の穀物の準備は各地方貯藏倉管理規則第四條規定に依り、左の原則にて之を處理する。

(1) 地方公收入

(2) 徵收

(3) 義捐募集

(二) 地方公收入は左のものに限定する。

(1) 原有積穀及び積穀に關する收入

(2) 地方公有營業(公設質屋銀行の類)純益金、但し既に教育、建設又は救濟事業の用途に規定されたものを

除く

(3) 其他公收入公産の正當の用途を規定せざるもの

(三) 徴收は左の標準にて之を行ふ。

(1) 田 畝 (2) 人 口 (3) 資 本 (4) 其 他

以上各項は地方の情形を斟酌し公平なる方法で之を集め貧乏の家からは徴收することは出来ない。

(四) 縣倉、市倉積穀の集中は上述の辦法による外左の方法により之を行ふ。

(1) 公共團體の預金 (2) 地方へ移讓した不急の經費

(3) 縣行政部の罰金 (4) 公産の轉變賣

(五) 郷倉、鎮倉積穀の集中は上述の辦法の外左の方法により之を行ふ。

(1) 香會、神社公集收入

(2) 郷鎮公收入で未だ正當の用途を指定してゐないもの

(3) 公共據金 (4) 各種補助費

目下各縣積穀の實際數量の縣倉に屬するものは一萬八千餘石、郷倉に屬するものは四十九萬三千餘石で合計六十二萬二千餘石にすぎない。今各縣の情形を表にして説明すれば左の如くである。

江西省各縣二十三年縣倉及鄉鎮倉の所要積穀數量

(單位石)

縣別	類別	積穀		倉別	預定總額	前年既に 充てられた積穀 の量	新に本年 準備する積穀 の量	所要積穀 の超過	比較の 不足	合計 不足積穀の 量(即ち本年 準備する積穀 の量)
		二十二年	二十三年							
南昌 (直轄縣)	安善	安善	安善	縣鄉鎮	70,671	43,080	70,671	—	27,591	31,951
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	4,360	—	4,360	—	4,360	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	43,978	13,781	43,978	—	30,197	30,197
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	49,000	5,000	32,667	—	27,067	57,542
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	84,238	25,080	56,152	—	30,475	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	22,000	11,203	22,000	—	10,797	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	33,585	—	33,588	—	33,598	44,895
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	25,000	1,846	16,667	—	15,321	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	38,353	32,506	38,353	—	5,847	21,168
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	7,333	1,230	3,667	—	3,667	9,172
九江	安善	安善	安善	縣鄉鎮	13,170	—	0,785	—	—	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	40,000	16,738	30,000	—	13,262	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	73,778	23,298	49,186	—	25,888	39,150
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	9,000	500	6,000	—	—	5,500
吉安	安善	安善	安善	縣鄉鎮	18,840	18,831	—	91	—	—
	安善	安善	安善	縣鄉鎮	26,667	1,000	14,315	—	13,815	—
萍鄉	安善	安善	安善	縣鄉鎮	53,409	—	29,672	—	29,672	43,487

宣	春	縣	28,000	—	13,000	—	13,000	—
宜	豐	縣	42,530	25,138	31,898	—	6,760	19,760
上	高	縣	18,687	1,520	6,687	—	5,147	10,448
新	廠	縣	21,889	4,850	10,146	—	5,285	—
分	宜	縣	10,687	—	7,111	—	7,111	21,710
茂	廠	縣	18,000	—	14,589	—	14,589	—
作	永	縣	31,809	8,082	20,878	—	12,000	—
武	豐	縣	6,000	60	3,000	—	2,940	—
安	廠	縣	6,202	2,501	3,101	—	600	3,540
泰	廠	縣	9,000	—	3,750	—	3,750	—
銅	廠	縣	10,109	—	4,213	—	4,213	7,683
永	廠	縣	29,333	280	10,476	—	10,246	-13,234
		縣	28,119	17,107	20,085	—	2,978	—
		縣	14,687	2,126	9,778	—	7,652	—
		縣	19,087	3,387	12,731	—	9,394	—
		縣	8,473	8,850	—	377	—	—
		縣	16,703	15,799	—	—	904	904
		縣	12,000	11,548	6,687	—	6,687	—
		縣	13,772	—	13,633	—	4,095	—
		縣	4,334	80	1,734	—	1,654	—
		縣	4,082	—	1,637	—	1,637	—
		縣	13,000	—	4,333	—	3,333	—
		縣	29,083	1,000	9,688	—	9,688	—
		縣						13,021





江西省各縣二十三年縣倉及鄉鎮倉の所要積穀數目 (續)

キニ

(單位石)

縣別	積		倉別	測定積額	前年度に 準備され た積穀數	新に本年 準備すべ き積額	應集積額 の比較	不足積額の合計 即本年準備す積額
	廿二年	廿三年						
東 鄉	重 災	安 新	縣	10,000	4,045	7,500	—	8,310
安 鄉	重 災	復 災	縣	20,512	9,929	15,364	—	—
贛 縣	重 災	—	縣	7,338	—	4,889	4,889	14,091
贛 縣	重 災	—	縣	18,160	2,905	12,107	9,202	—
贛 縣	重 災	—	縣	5,000	1,080	5,000	3,970	8,970
贛 縣	重 災	—	縣	10,748	10,846	—	98	—
贛 縣	重 災	—	縣	7,000	3,235	3,334	—	3,334
贛 縣	重 災	—	縣	14,028	5,300	6,080	—	3,445
贛 縣	重 災	—	縣	5,332	—	5,333	33	4,389
贛 縣	重 災	—	縣	13,089	—	4,56	—	—
贛 縣	重 災	—	縣	6,338	—	1,588	—	1,588
贛 縣	重 災	—	縣	6,000	—	3,000	—	3,000
贛 縣	重 災	—	縣	4,782	—	2,366	—	2,366
贛 縣	重 災	—	縣	4,667	1,000	3,111	—	2,111



江西省各縣二十三年縣倉及鄉鎮倉の所要積穀數量 (續)

(單位石)

四〇

類別	縣別	積		倉別	豫定積穀	前年度に 收儲され た積穀數	新に本年 新備すべ き積穀	積穀總額の比較		不足總額の合 計 即本年收儲すべ き積穀總額
		十二年	十三年					超過	不足	
遂川縣	遂川縣	災	災	縣	8,333	—	2,778	—	2,778	7,555
		◇	◇	鄉鎮	15,077	—	5,026	—	5,026	10,051
安義縣	安義縣	災	災	縣	14,066	—	7,333	—	7,333	6,733
		◇	◇	鄉鎮	40,430	2,002	9,777	—	11,480	29,250
上饒縣	上饒縣	災	災	縣	11,000	—	48,430	—	7,333	37,400
		◇	◇	鄉鎮	24,987	—	7,333	—	10,625	14,362
南都縣	南都縣	災	災	縣	3,066	—	7,218	—	3,066	4,152
		◇	◇	鄉鎮	7,218	—	4,445	—	7,218	3,583
廣都縣	廣都縣	災	災	縣	6,067	—	8,322	—	4,445	1,922
		◇	◇	鄉鎮	12,483	—	14,667	—	8,322	4,161
新復縣	新復縣	災	災	縣	22,000	—	25,820	—	14,667	7,333
		◇	◇	鄉鎮	38,730	—	—	—	25,820	12,910





## 第二章 南昌 市

### 第一節 江西米穀運搬販賣上に於ける南昌の地位

江西の米穀運搬販賣上、南昌は最も重要な米市であることは、こゝに集中される米穀の數量はいふまでもなく、加工機關について言つても、米業組織について言つても共に極めて明かである。南昌米市の形成は吾人の調査した所によれば左の如き諸原因をあげることが出来る。

第一は地位の關係である。南昌は贛河下流に位し、贛江上流の贛縣に集中せる米穀、吉安、樟樹鎮等に集中した米穀、換言すれば贛江、早江、瀘水一帯の米穀を贛北或は省外に輸送する時いづれも悉く南昌に集めねばならぬのである。江西の地勢は南部高く北部低く、河川はいづれも北流し、糧食運輸は全く水運に依存してゐるから南昌が中心地となるのは自然の趨勢である。この外、撫河流域の米穀は臨川に、錦江流域の米穀は高安に集中せる後、孰れも南昌を最後の市場としてゐる。故に南昌の荏港、市汊の二地は江西著名の米鎮である。

第二に南昌は江西の中心地で人口多く、最近二年の情形を以て計算すれば、約二十七萬餘人であり、居住民の大部分は米を食し、麵麥の消費は重要な地位を占めてはゐない。故に一般糧食商の計算によれば毎日精米消費量は約一千三百石で平年總計四十七萬石前後にあたり、實に全省最大の消費市場である。故に消費量にのみ就いて言つて

も南昌米市中の米穀交易は年五十萬石前後にのぼつてゐるのである。

第三、南昌はただに省内各地重要河流の中心たるのみならず、南潯鐵道により全省水陸交通の接觸地となつてゐる。近來、江西米穀の輸出は鐵道より九江に運搬するのが漸次多くなつたから南潯鐵道は糧食運搬販賣上特に重要となつたのである。南潯鐵道經由の時には南昌を通るのは必然の途である。

凡そ一米市の形成は必ず米商に便利たるを必要とするが今米穀が南昌に來た後、南昌自身が消費能力を持つても、南昌で賣りさばき盡くすことの出來ない時は九江に運搬すべく、陸路としては既に、鐵道があり、水路も亦通行出來る。故に米穀の集中するのは當然の現象である。

第四、南昌は江西全省の金融商業の中心で、中央、中國交通、上海、四省農民銀行等の支店、本省の裕民銀行、市立銀行等が共にこゝに設けられ金の支拂にも便利であるから、普通、米穀移出地は九江であるが交易中心は南昌である。

第五、江西には穀子を輸出することはなくその輸出するのはほとんど精米である。その原因は碾米等の加工機關が省内に普遍的に發達してゐるからで特に南昌は加工の中心地である。さきの統計で述べた如く全省碾米機の柝は合計（鄉鎮内）二百九十七柝即ち三百柝に近く、その中南昌にあるものは一百三十五柝の多きにのぼり殆んど全省の半を占めてゐる。これにより各地の穀子は一部分が原産地又はその附近で加工される外大部分は實に南昌は集中されることが知られる。

凡てこれらの各點が南昌米市形成の主要原因であり、この外南昌自身の産米も甚だ豊富で鄱縣は品種の最も良い

「觀音粘」を産出し、毎年周圍一帶より集中せる米穀も觀るべきものがある。

## 第二節 南昌米市の組織及び交易順序

南昌全市で米業を営むものは當地營業稅局の統計によれば合計五百十家あり、米業公會内の人の報告によれば五百七十家あるがその中五百十家のみが營業稅を納めてゐるのである。かかる米業は性質上より大體（一）糧食店、（二）機米廠、（三）碾坊、（四）小賣米店等の四種に分れる。

（一）糧食店 南昌市中糧食店は米穀交易の仲介者で當地の俗稱は「行家」といふ。かかる行家は沿江一帶、城南三角塘、西部廣潤門外、及び稍々北の文孝廟等に分布してゐる。水路より運ばれて來る米穀は、殆んど凡て行家の仲介を経由するから、その性質は南京の河行と似てゐる。普通の順序は米穀は南昌に送り取引先の行家に販賣數量を説明し、且つ當時の市價を探り然る後行家に代つて各地に出賣して貰ふ。普通一行家は必ず若干の機米廠或は碾坊（大部分は小賣店を兼有してゐる）と不斷に聯絡を持ち彼等が貨物の入手を要求してゐるか否かを詳細に調査し、貨物入手を要求してゐる場合には、又大約如何なる種類のものや、如何なる價で如何なる數量を希望してゐるかを調べてゐる。故に斯る仲介は、大體一度話があれば行家より買方と賣方を招いて價格を商議し價格及び支拂辦法を決定して始めて交易が成立する。然る後仲介者（行家）は手数料を得、穀子の場合には一元につき三分賣方より出し、精米の場合には擔當り一角を買方より出す。本地米穀は通例精米を購入せず、又精米を購入する者は凡て大部分外省より來る卸賣米商である。故に南昌手数料の原則は「之を外人より取る」のである。

大量の米船が来て數量が甚だ多い場合には行家は途を分つて出賣するから手續も亦甚だ複雑になる。

且つ通常交易成るも買方が即時に支拂はず、船客は現金支拂の要求の急ぐ場合には行家は立替へねばならない。故に一部分の人の言に據れば手數料は穀子の時一元につき三分、精米の場合は石當り一角と規定されてゐるが實際上行家はかかる額で満足しない。又小數の行家はかかる船客を思ふ儘に翻弄し、貨物が着いた時、偶々市場の價格が下落してゐる場合には、賣客方面で多少の危険を冒してもなるべく早く手離す事を希望するから、行家は故意に出賣を遅延し或は今日一小部を賣り、明日又一部分を賣るとかいふ状態を續け、船客が仕方なく一定の條件を與へるに至つて始めて努力して貨物を賣りさばくのである。

南昌糧食店は從前甚だ多く德勝門外より三角塘にいたるまでの路にはならんでゐた。近來になつて各地産額減少し來貨が盛んでなく米市日に衰へ、手數料收入では收支償はざるために現在營業してゐるものは僅か十八家で、その分布情形は進外三角塘に、永盛、立豐祥、益豐行、同豐行、義隆行、義豐行、三和祥等七家があり、惠外にあるものは、僅か永茂行一家で、西公套にあるものは僅か興復一家のみで、廣外浮橋にあるものは同信行、義盛行、義安行、同慎行等四家であり、章外沿江路にあるものは信孚行、合義盛、豫順行、裕和行、慎和行等五家である。その中永盛行、立豐祥二家は客に代つて買賣する外、機器碾米廠を有し、營業が大である。

附近の新建の如き陸路から來るものは大體かかる行家を經ない。その交易情形は別に詳述する。この外尙一般と外縣船戸及び本地米等とに孰れも孰知せる人又は曾て米業界の従業員であつて後離脱し、専ら仲介買賣を業となすものがあり、之等の人を私仲買人といふ。南昌にはかかる私仲買人が甚だ多く合計七、八十人あつて行家の營業は

時に彼等の影響を受ける。私仲買人の手數料は通常非常に低く穀子每擔六分半、甚しきにしたつては三分を取るのみである。ただ彼等自身には信用なく、且つ支拂の代辨等をなすことが出来ないから、稍々大なる買賣は行家の手で行はれる。

行家の仲介にて交易が成立した後通常「扒斛」により代量され、如何なる米穀も擔當り一分で、穀の場合には賣方より米の場合には買方より負擔される。かかる扒斛は概ね世襲で全市に計二十餘人居り従前は壟斷の情形甚だ烈しく、行家を仲介とした米穀は必ず彼等によつて代つて計量されねばならなかつたが近年になつて壟斷の情形は漸く減少した。ただ賣方或は買方から賄賂を受けた場合に或は多く或は少く計量するといふ弊があるが、その能力は少くとも百擔に二擔前後である。

(一) 機米廠 南昌は唯に江西の米穀市場たるのみならず全省の加工の中心である。南昌市内及び鄉鎮の碾米機器の米枘は一百三十五枘で殆んど全省の半數にあたる。加之に南昌に來るものは水陸兩路の統計によれば穀子が約九を占め精米は僅か一を占むるにすぎない。かかる情形の下にあつて南昌の碾米業は甚だ發達し全市機米廠（即ち機器を用ひて米を挽くもの、人力を用ふるものは入れない）は八十七家あつて各處に分布し、機器の米枘は約百數個（鄉鎮を含めず）に近い。近年になつて穀子の來る數量が以前程旺盛ではないから、廢業するものも少くない。

かかる機米廠の營業性質は特に複雑であるが今分析すれば左の如くである。(一)貨物買入に就て言へば、一部分の機米廠は行家の手を経て買入れる。然しこの種の機米廠も亦大部分は江邊に開設され且つ各路の船客と孰れも相互によく知り合つてゐるから、行家の仲介を経ず自ら直接船客と交易するか、或は内地米商に託して代辨せしめ、

甚しきに至つては人を派して内地に往き穀子を購入するものもある。これによれば行家、扒斛等、仲間人の費用を節約することが出来、且つ彼等の操縦を受けなくなる。第二に加工に就て言へば、現存機米廠の大部分は自己で米を碾き發賣する。時には米商又は米店の委託を受け代つて米を碾き料金を取るものもあるが、純粹に之（人に代つて米を碾く）をなすものは極めて少數である。第三に營業に就て言へば、この八十七家の機米廠中二十餘家は小賣店を設けず専ら輸出及び卸賣業を營み即ち購入せる穀子を精製して精米とした後米店に卸賣をなし（これは少い）或は運搬輸出する（多し）。その他各機米廠はいづれも小賣店を設け、自ら碾き自ら賣り、時には小米店に卸賣するがこれは少數である。かかる自ら碾き自ら賣る小賣店は米業中の人の言によれば、平均毎擔少くとも四角の利潤を得ることが出来るといふ。碾製費及びその經過については已に前文で詳述したからここでは再述しない。

(三) 磨坊 磨坊とは人力を用ひて米を碾く精米所のこと、機米廠が未だ發達せざる時代にあつては、磨坊は穀子加工の唯一の機關であつた。その營業範圍は客に代つて米を臼でひき之を貯藏して發賣するのである。自ら碾き自ら賣ることは大體に於て今日の機米廠と異つてゐないが、機米廠發達の後各地磨坊の存在するもの頗る少くなり、尙營業するものもあるも玄米を作るを主としてゐる。ただ南昌の情形は稍々異つてゐる。南昌の磨坊の數は甚だ多く合計三百餘家あり、いづれも小賣店を併置してゐる。かかる磨坊は専ら人力を以つて精米して自己の店から發賣するからその營業性質は全く機米廠と異らない。現物購入情形は普通いづれも行家又は私仲買人の仲介を經、自ら直接交易するものは少い。

(四) 米舖 米舖とは一般小賣店のこと、資本の規模はいづれも上述の機米廠にして小賣店を兼ねるもの又は

驛坊にして少賣店を兼ねるものより小である。その商品の買入経路は、或は精米の卸買或は自ら穀子を購入し糶米廠に託して碾米させたものである。かかる米舗は全市に合計一百餘家あつて、その中にも亦規模の極く小なるものがある。

この外南昌陸路の米穀市場及交易情形をもここで附帯して述べよう。南昌の陸路米穀交易壇、俗稱穀場なるものは計四處ある。一は南壇、一は大市、一は澹台門、一は德勝門外にある。この四穀場に來る米穀はいづれも省城附近周圍二十里以内のものである。

陸路から來るものの交易はいづれも直接行はれ、仲買人が仲介することなく、農民又は小賣人が米穀を該地に運搬し、市内糧食店が人を派して買收する。その時間は大部分午前六時である。四ヶ處の中德順門外の外の三ヶ處は孰れも車で運搬し、每車二百三十二斤あり約十二元の價格（昨年十二月現在の價格）である。度量衡は已に市桶に改められ、四桶一擔は一百十二斤である。勝德門外には大部分擔つて來るもので一百二十二斤一擔で度量衡は未だ市桶を用ひない。以上は孰れも精米を指して言つたものである。往年には德勝門外に來る穀物は毎日多い時には約二百擔で、その他三ヶ處には毎日約一千車、二十擔來る。

最後に米市の組織の一部と見ることは出來ないが實際上糧食市場と特に關係のあるものに倉庫がある。今その概を述べれば次の如くである。各地より南昌に來る米穀は毎月あるが毎年秋の收穫後及び翌年の春の水の出る時に數額が最も大である。且つ南昌の加工設備は比較的豊富であり、各地から來た米穀は加工の後再移出のため陸揚げされるもの頗る多く、爲に南昌の米糧倉庫業は特に發達してゐる。米糧倉庫業を營むものは約三種類に分つことが

出来る。

一は轉運業で、普通米商の南昌より精米を九江に運搬して輸出するものの大部分は轉運業の手を經る。之は費用は大したものではないので、一切の倉の出し入れ、船積み船下し、貨車への積下し等の手續、途中での抜取等の損失はいづれも轉運業者が責任を負ふから自分で處理するより反つて便宜なものである。かかる轉運業者の大部分は牛車場附近に倉庫を持ち貨物の貯藏運搬に便にしてゐる。全市米糧倉庫の彼等に屬するものは十餘棟あるが、借むらくは近年米市衰落し休業廢業するものが多い。

第二は規模のやゝ大なる機米廠及び糧食店にして米廠を兼ねてゐるものが輸出業を營む關係上必ず自ら倉庫を設けねばならず、且つ自己の貨物を置く外、時には保存料をとつて米商の貨物をも置くのである。

第三は各銀行が時に糧食を、或は人から抵當に押へた米穀を貯藏するため亦倉庫を設けてゐるものである。

南昌市米糧倉庫一覽

店名	業別	地點	倉庫棟數	約計容量	附記
新通	轉運倉	牛行停車場北	一	一〇、〇〇〇	中國銀行に代り擔保貸付
日生	〃	〃	一	三、〇〇〇	休業
永達	〃	〃	一	四、〇〇〇	休業
捷成	〃	牛行停車場南	一	一〇、〇〇〇	休業、現在義記に賃貸
悅來	〃	〃	一	一〇、〇〇〇	休業



この五倉の積穀數量は市政委員會接收の時の報告に依れば府義倉一百六十八石七斗、南興倉五百三十石、新興義倉三百六十九石四斗、籌備倉一千九百五十八石七斗五升、合計四千二百五十石、別に六斗二升の古米がある。この外尙二十三年に新穀四千四百石が加へられ總計新舊八千六百餘石を貯藏してゐる。

### 第三節 米穀の來源及び數量

南昌の米穀は地域を以て區分すれば撫河流域のもの三〇%強を占め、贛江一帶のものが三〇%弱を占めその餘は本地及びその他のものである。その中贛江一帶、吉安等各地より來るものは早穀多く撫州より來るものは晚穀が多い。集中地點について云へば、大體臨川、豐城一帶の米穀はいづれも三角塘であり、貴溪及び贛江一帶のものはいづれも廣潤門に集まる。

鄱湖一帶のものは章德段に集中する。以前比較的良好の年には三角塘には八十餘萬擔、廣潤門には一百三、四十萬擔、章德段には三、四十萬擔來たが最も良好な年は當然更に多い。水路より來るものは穀子多く、精米は直接九江に運ばれる。輸出入數量には合計三種の統計がある。

其一是米業巨商吳君の統計で彼は最近七年來各地米穀の南昌に來た數量は大體次の如くであると言つてゐる、

民國十七年の時、米穀は上流地方安穩で運輸に便利であつたため近年來の最高記録を作り、到來した穀子約二百四、五十萬擔あり、之を碾いて精米一百二、三十萬石を得、本地消費の外南潯鐵道又は水路により九江に輸送したものは約七、八十萬石あつた。民國十八年は比較的少く、到來した穀子は約一百七、八十萬擔であつた。

年 別	輸 出 數 量
民國十七年	八〇〇、〇〇〇石
〃 十八年	六〇〇、〇〇〇石
〃 十九年	八〇、〇〇〇石
〃 二十年	一〇〇、〇〇〇石
〃 二十一年	一〇〇、〇〇〇石
〃 二十二年	八〇、〇〇〇石
〃 二十三年	四〇、〇〇〇石

より輸出した食米數量の統計である。

其三は南潯鐵道の統計で最近五年來南昌より南潯鐵道にて輸出入した數量であるが、この統計中には一部分に豆類が併入されてゐる。故に局中の人の言によれば、平均約二%を除き始めて實數に近いといふが今暫くこれを入れたまま參考に資しよう。

### 最近五年來南潯鐵道による南昌米穀輸入の數量

(單位 石)

年 別	輸 入 數 量
民國十九年	一六、九二〇
〃 二十年	二二、七六〇
〃 二十一年	八、八〇〇
〃 二十二年	七、三〇〇
〃 二十三年	四三、〇〇〇
〃 二十四年	六、五〇〇
〃 二十五年	三、七〇〇
〃 二十六年	四一、〇〇〇
〃 二十七年	三〇、〇〇〇

民國十九年に至り、上流各地の米穀は下流に運送する方法なく南昌に來た穀子の數額も減激し一百万擔前後しかなかつた。故に南昌米價も一石十八、九元となり、輸出は一層減少した。民國二十年は大洪水があつたが南部地帯は比較的高いので波及せず、ために南昌に來た米穀の數額は十九年よりやゝ増加した。

民國二十一年は豊作であつたが産地縮少關係から南昌にいたつたものは僅か一百五、六十萬擔であつた。ついで各地の大軍贖南に雲集し、米穀の對外輸送量激減し加ふるに昨年夏季北部の旱災のため民國二十二年、二十三年兩年中南昌に來た米穀は約一百二、三十萬擔前後であつた。

其二は米業公會の人及び四省農民銀行江西支店儲運部劉德傑君の最近七年來南昌

最近五年來南潯鐵道による南昌米穀輸出の數量

月	年
一月	十九年
二月	十九年
三月	十九年
一月	二十年
二月	二十年
三月	二十年
一月	二十一年
二月	二十一年
三月	二十一年
一月	二十二年
二月	二十二年
三月	二十二年
一月	二十三年
二月	二十三年
三月	二十三年

總計	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月
四、八七〇、三一二	三、八〇〇	一五、五〇〇	一九、四二五	三〇、四八四	九、八三六	六、九八三	三、一六九、三二五	一、五九八、〇三九	
二四三、六三九	四一、〇〇〇	六八、一〇〇	一、九二九	三〇、〇〇〇		三〇、〇〇〇	七六〇	三〇、〇〇〇	一〇、二九〇
二一六、〇〇二	五三、三〇〇	三〇、九四九		六八、三六九	八、〇〇〇	三五、七二〇	四、六一四		一、二〇〇
二六一、一八四	三九、七〇〇			三二、一八〇	二七〇	九〇	二、〇〇〇	四一、四一九	四二、九〇〇
八〇一、一四五				一、八八三	二二〇、一四六	六〇、〇三六	六〇、〇八〇	二五八、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
								三五、〇〇〇	五五、九二五
								四一、四一九	五〇

### 第四節 運輸情形

四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十 一 月	十 二 月	總 計
一、六六七、九七六	七八、四七四	二七〇、〇四八	五、〇〇一、六四三	一、七二八、三三四	八、六四一、〇五四	五、五一一、二六六	五、六一〇、四〇六	六、三三四、八六七	四六、八〇九、七八七
九三、四八三	一、四七八、〇〇二	二四八、四〇〇	九二、〇五四	五七〇、五六四	一六〇、〇〇〇	一、一一一、一一二	一、一九五、四一九	二、四四二、三二三	二八、三二四、六四九
一、九八二、五六八	四、八三八、〇六六	二、六九二、二〇七	二、五三五、六三五	三八〇、一一五	四六七、三一一	一六七、四二五	三、一一三、五四四	二、二六四、七三一	二九、八八二、〇七一
一、一六九、六六五	四二四、一一五	二八一、〇〇〇	二二〇、六九五	六五、二五七	六六、四一一	三二二、〇九一	一、六二六、九一四	三、一一一、五八〇	一五、四〇九、〇九九
一二、五一九	一〇、一四〇	一九七、六〇六	二九七、六〇六	八三三、六六六	七六四、二六一				五、一〇七、四六八

各地より南昌に運搬して来る米穀の經過情形及び消耗費用等を左記の三節に分けて述べよう。

(一) 裝運經過 各地米穀の南昌に裝運されるものの性質は特に複雑である。假りに臨川を例とすれば少くとも六種に分つことが出来る。

(1) 臨川にて米店を開いてゐる米商で船に託して南昌に着いて後、或は行家に投じ、或は直接熟知の機米商に賃

物の處分を依頼するもの。

(2) 元來臨川にて店を開き客に代つて賣買してゐる行家が、南昌市價の高昂を見て利圖るべしとなし、自ら購入して船に託して來るもので行家に投入する情形は前と同様である。

(3) 米商の運來せるもので行家に投ずるものと投じないものがある。

(4) 船戸が裝して來るもので、かかる船戸は客に代つて裝運する外自ら購入し自ら運搬し彼地に往つて販賣するが大部分は行家に投ずる。

(5) 農民が船に託して來るもので、これも亦大部分行家に投ずる。

(6) 南昌の機米廠等が買つて來るもの。南昌より運出する精米の大部分は悉く二十餘家の碾米廠と輸出業を兼ねてゐるものの手を經る。近年外省の米商で南昌に來つて購入するものは甚だ少い。

上述各例中、船戸自装を除き其他はいづれも船戸に託して代裝させねばならない。普通穀子の大部分は散裝で運搬前船戸と九九包又九九・五包等と値段を決める。換言すれば一百擔の穀子を甲地より乙地に運ばば、少くとも九九擔又は九九・五擔になる。包運者は必ずしも人を再派して運送しない。時に人を派して運送する場合には船戸は却て責任を負はぬ。故に穀子を裝する弊は比較的少いが、米を裝する場合にはその弊はより大である。普通裝する前に船戸と會同して包の絶対數を秤る(九九等數ではない)。米は大部分麻袋に裝されてゐるから船戸は散裝は時に消耗する等の理由に藉口出來なくなるから値段は安くなる。併し如何なる値段を決めても船戸が米を盗むといふことは常に行はれてゐる。巧妙なるものは一百包の米を裝する場合三、四十包の中から若干を盗み取り目的地に着い

た後には、普通たゞ若干包を秤にかけるのみであるから、容易にそれをかくすことが出来るのである。また如何なる船戸が米を裝する場合でもその食つてゐる糧食は總て船貨の中のものであることは云ふまでもない。

裝運の船隻は大小色々あり、春夏兩季の水の漲つてゐる時は所謂能く滿れば船走るので、大なるものは能く二、三千擔を裝運するが、秋冬は水淺く、大船又は餘り多く載せすぎてゐるものは行駛することが出来ない。普通多くて二、三百擔を裝運することが出来るのみで、水の最も淺い時は甚だしきに至つては五、六擔を積んで行走するものも曳船を使ふ。

(二) 運賃 南昌の運賃は二項に分ける事が出来る。一は南昌に來る運賃で、一は南昌より搬び出す運賃である。各地より南昌に來る大部分は水路運賃であり、水路の深淺が不同であるから上半期と下半期の運賃の相違が甚だ大である。

各地より南昌に運ぶ米穀船運賃表（每擔含銀元數）

縣鎮別	精米		粳	
	上半年	下半年	上半年	下半年
市鎮	〇・一六元	〇・一六元	〇・一元	〇・二元
萬合鎮	〇・一五	〇・一五	〇・一元	〇・一元
荏港鎮	〇・二〇	〇・二〇	〇・一元	〇・一元
麻川縣	〇・三〇	〇・五〇	〇・二元	〇・二元

運賃の中に沿路に於て納める税金を計入せねばならない。江西一部の縣鎮の米穀移出又は經過の時徴收する税金に關して、江西省政府經濟委員會が組織される以前實地調査が行はれた。「國家が釐金税を撤廢した後沿路には元來税金と言ふべきものはない。ただ各地に近年保衛團を招集し又其他軍事建設又は兵

上頓渡	○・三〇	○・五〇	○・二〇	○・二〇	○・二〇
許灣鎮	○・三五	○・五四	○・二二	○・二二	○・二二
安仁鎮	○・二四	○・二四	○・一五	○・一五	○・一五
黃金埠	○・二四	○・二四	○・一五	○・一五	○・一五
豐城縣	○・二〇	○・二〇	○・一二	○・一二	○・一二
樟樹鎮	○・一五	○・一五	○・一〇	○・一〇	○・一〇
新余縣	○・三〇	○・三五	○・二〇	○・二〇	○・二〇
高安縣	○・二二	○・二二	○・一四	○・一四	○・一四
李家渡	○・三〇	○・三〇	○・一六	○・一六	○・一六
拓林鎮	○・一〇	○・一〇	○・〇六	○・〇六	○・〇六
峽江縣	○・二五	○・二五	○・一八	○・一八	○・一八
生米鎮	○・一二	○・一二	○・〇八	○・〇八	○・〇八
吉安縣	○・五〇	○・八〇	○・三〇	○・五〇	○・八〇
餘江縣	○・三〇	○・四五	○・二〇	○・三五	○・八〇
貴溪縣	○・三五	○・五〇	○・二〇	○・三五	○・八〇

※吉安縣は下半年期水量不足の時は中途でハシケを雇つて運ぶ。

し統一的に納めることとなり、永豐境内の各地の税金を併合廢止し、ただ財政局より一石當り二角づつ一回取り、た穀物は贛洲輸入税として廣東毫洋一元即ち大洋七角を徴し、合計一元一角餘となつた。最近贛洲擾亂し、永豐より商民の運んだ穀物は贛洲輸入税として廣東毫洋一元即ち大洋七角を徴し、合計一元一角餘となつた。其他の縣にも同様の現象

差等の經費が入らず又は不足せる場合多くは商人の販賣の米穀に税金を加へる。大體石當り一角より一元餘等色々あり、且つ本縣各市鎮輸出の時徴收し、再び外縣各市鎮に輸入又は通過する時又徴收する。永豐縣の商民の如きは昨年以前米穀運搬販賣の時、永豐縣恩江上流七都墟第二區保衛團が一回徴税し、その中間で永豐縣城財政局が又一回徴税し（縣警察隊用として供給す）下流にいたり第四區保衛團が又一回徴税し、吉水縣に到り縣城南門の恩江より出で贛河に入る時、又吉水警察隊に一回納租して、やうやく通運出來たのである。後各縣團隊改編され、税捐は統一的に徴

あることは想像出来よう。

南昌より運出する精米の大部分は南潯鐵道より九江に運ばれる。その過程中の費用は右當り上の如くである。

程次	種 類	每石費用
1	河邊にいたる牛車費	〇・〇八元
2	駝力（ハシケ）	〇・〇三元
3	陸揚費（停車場にいたるまで）	〇・〇八元
4	汽車積込費	〇・〇二元
5	汽車賃	〇・〇七元
6	荷卸費	〇・〇六元
7	其他	〇・〇五元
	總 計	〇・五九元

南昌より九江に至るまで水路で運送するものもあるが陸路より時間がかかる。しかし費用は上述の鐵道運賃よりも一角七八分前後安い。

### (三) 碼頭組織

南昌碼頭組織は組合の劃分が特に嚴密で各縣より來る船は必ず各組合の碼頭に頼り之を越えてはならないのである。臨川より來る船は撫幫碼頭に頼り、贛縣から來る船は贛幫碼頭に頼らねばならない。故に濱江一帶の著名なものに都陽幫、都昌幫、撫洲幫、贛幫、廣信幫、瑞昌幫、貴溪幫、樂平幫、武寧幫等の劃分があり、界域の嚴かなることは他所で見られないものがある。各碼頭の分境劃界により、そこにゐる工人も亦各自門戸を充て甲碼頭の工人は乙碼頭の貨物を積み卸しすることは出來ない。これに違はないものは武力

を以つて解決する。かかる劃分を考ふるにその初意は嘉すべきものであつた。けだしかくすれば船隻の停むるにも工人の工作にも争ひを惹起することはないのである。然しその結果、運輸方面にあつては壟斷となりその情形は益益烈しく、且つ甲碼頭に貨物が非常に多く着き商人と船家は急いで貨物を卸さうとするも該處の工人は若干に限定されて居り、他人が代つて勞働することが出來ないため坐して市價を失ふことが常に見られるのである。かかる

延誤の情形は運輸方面にて特に不便を感ずる。

南昌市政府は已にこれに對し整理に着手してゐる。今その新改碼頭名稱及び工人の人數を左に表示する。その中には米穀を關係のない者もあるが重要な參考資料たるを失はない。

新改碼頭名稱	工人數	新改碼頭名稱	工人數
第一水運碼頭	四	大平巷碼頭	九五
第二水運碼頭	五〇	吉水倉碼頭	九七
第三水運碼頭	一八	中山路碼頭	二四一
第四水運碼頭	一六	滕王閣碼頭	七二
第五水運碼頭	三二	上安濟渡碼頭	八一
第六水運碼頭	三一	下安濟渡碼頭	一〇〇
第七水運碼頭	二〇	塘子河碼頭	五八
第八水運碼頭	六六	大巷口碼頭	五五
第九水運碼頭	二四	過渡處碼頭	二三
第十水運碼頭	一七	上河窩碼頭	三九
第十一水運碼頭	六	下河窩碼頭	八九
三角塘碼頭	三一三	打纜洲碼頭	六〇

この外南昌全市水運碼頭荷物船は合計一百二十四隻で、その内大型二十六隻、中型五十六隻、小型四十二隻である。

### 第五節 米穀價格

南昌は江西省域で南部各河流と南潯鐵道交通の樞軸を占め、實に全省米穀の最重要消費地點であり加工區域及集數市場である。故に南昌米價の騰落は實に全省米穀需要供給情況の指數である。南昌の米價は最近五年の情形に就て言へば民國十九年の時、不作のため一度暴騰し當時の最高米價格は一石十八元に達し、南昌、九江等の消費區域は孰れも恐慌状態を呈した。ついで民國二十三年下半年期に旱災の影響

炭港 碼頭	一四四	黃泥洲 碼頭	二四
妙濟觀 碼頭	三三一	水荖街 碼頭	六九
君子巷 碼頭	七五	夢洲街 碼頭	六〇
圓覺寺 碼頭	一五五	華陀廟 碼頭	四一
柴巷口 碼頭	一五八	瓦子角 碼頭	三九
浮橋頭 碼頭	一二一	裘家廠 碼頭	四五
煤炭坡 碼頭	四八	棕帽巷 碼頭	四四

を受け加ふる各地人民が團體を組織し糧食の輸出を禁止したため米價は又急激に暴騰を示した。

吾人の今回調査したものは僅かに最近三年即ち民國二十一、二十二及び二十三年に過ぎない。調査した種類別は早穀、晚穀、三機早米、雙機早米、單機早米、三機晚米、雙機晚米及び單機晚米等八種に分たれる。材料來源は一部分を米業公會の調査により

得、一部分は江西省政府統計室の報告により、尙一部分は南昌市政府委員會に託して調査したものである。たゞ江西は近年來大軍雲來し、軍米の徵發が甚だ巨額となり、徵發區域は南昌が又中心點の一となつてゐる。故に市價の落騰は全く常軌を失して季節性の需給關係で解き難き場合がある。これは調査の時實際經驗したもので必ず提出すべきものである。今(一)早晩米穀市價の差異、(二)各種米價三年來變動の情形、(三)米價と商人の原價等の三節に分けて之を述べよう。

### (一) 早晩米穀市價の差異

江西には早稻、晚稻の産量はいづれも豊富であるが、その消費情形には多少異つた所がある。大體各原産地住民は早米は質は劣るも廉價なるため日用にはいづれも早米を主となし、晚米は外に輸出するか或は本省各城市に運送して消費せしめる。故に穀子にても精米にても早晩の間には價格は常に一定の距離がある。南昌市場にて見られる

ものは特に顯著である。穀子に就て言へば三年來早穀と晚穀の市價の差異は平均三、四角前後である。その中華民國二十一年七、八月の兩月には相差の幅度は遂に一元に達した。之はこの年早穀の收穫が良好で國曆で七、八月正值登場旺盛の時價格は暴落し差異が非常に烈しくなつたからである。二十二年より二十三年にいたる情形は比較的平穩で、ただ二十三年八月以後晚穀は暴騰し差異は又五角以上増した。

精米の情形も大體似て居り、民國二十一年は一年を通じ常に五角前後の差を維持して來た。民國二十二年上半年は頗る平穩で下半年期晚穀登場前又一度高くなつた。二十三年の情形も亦下半年期より漸次分岐してゐる。要するにこの三年中早米の最低市價は五元七角、晚米は五元九角であり、早米の最高市價は十元八角、晚米は十一元七角であり最低について言へば差は僅かに二角であり最高の場合は差は九角である。

### (二) 各種米穀三年來變動の情形

この三年來の南昌米價變動の情形について言へば早米、晚米いづれも二十三年が最も劇しかつた。この一年の晚米について言へば最低價格は五元五角、最高價格は十一元七角に達したのである。早米について言へば最低價格は五元で最高價格は十元八角に達したのである。その實二十三年は江西は旱災に遭つたが受災區域は僅か贛北一帯のみで、中南部の若干の縣には豐作のものもあつた。故に需要供給の情形について論ずれば當然米價にかくの如く劇烈なる變動を發生せしむる筈はないのである。ただ、中南部各縣人民は餘剩を得ても北部一帶の旱災に鑑み、盛んに自發的に團體を組織し、糧米の輸出を禁止し、管に一縣に一縣の組織を持つたのみならず、一區一鄉も亦一區一鄉の組織を持つていたつた。ここに於いて南昌の米價は暴騰したのである。民國二十一、二十二年の兩年にいたり

變動情形はいづれも比較的平穩で、その中二十二年が最も平穩であつた。二十一年の時上半期の市價は少し騰勢を呈した。

二十二年八、九月間にいたり晩米市價が反轉して高くなつたのは、糧食界の人の言によれば、この時大軍撫洲に雲集し臨川の晩米が下流に運搬されず、南昌又在庫品が少かつたためかかる偶然の現象を呈したのであるといふ。

### (三) 米價と商人の原價

南昌は江西米穀加工の中心地である。上流各縣は精米を持つ場合には直接九江に運往し、南昌に來るものは土中八、九は穀子である。故に南昌の機米廠と糶坊はいづれも穀子を購入し精米を發賣するのを主要營業としてゐる。普通穀價（即ち平均數に計算すれば）は碾製費を加へて後米價となす時は常に市價より低いからこの一過程は實に利潤の出る所である。第八、九圖は毎月平均穀價に碾製費を加へ、消耗品を賣つて回收した費用を除いて出した時の石當りの精米と市價を比較したもので、早米、晩米孰れもその原價は常に市價の下にあるのが見られるであらう。

江西省南昌市最近三年穀子市價統計  
(每石合銀元)

年 月	別 價格	早			晚			平均
		最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均	
二十一年一月	月	3.96	3.96	3.96	4.41	4.41	4.41	
二十一年二月	月	4.05	4.05	4.05	4.42	4.42	4.42	
二十一年三月	月	4.18	4.18	4.18	4.45	4.45	4.45	
二十一年四月	月	4.13	4.08	4.08	4.35	4.25	4.30	
二十一年五月	月	4.20	3.60	3.90	4.33	3.78	4.06	
二十一年六月	月	3.80	3.50	3.65	4.40	4.00	4.20	
二十一年七月	月	3.50	2.40	2.95	4.50	3.40	3.95	
二十一年八月	月	3.40	2.00	2.70	4.20	3.00	3.60	
二十一年九月	月	3.80	1.70	2.75	4.20	2.70	3.45	
二十一年十月	月	3.80	1.70	2.75	3.80	2.20	3.00	
二十一年十一月	月	2.70	1.60	2.15	3.00	2.00	2.50	
二十一年十二月	月	2.50	1.60	2.05	2.60	2.20	2.40	
二十二年一月	月	2.80	2.70	2.75	3.00	2.60	2.80	
二十二年二月	月	3.00	2.80	2.90	3.20	3.00	3.10	
二十二年三月	月	3.00	2.80	2.90	3.20	3.00	3.10	

四	月	2.90	2.80	2.85	3.20	3.00	3.10
五	月	2.90	2.30	2.60	3.20	3.20	3.20
六	月	3.50	3.20	3.35	3.65	3.30	3.48
七	月	3.30	3.20	3.25	3.40	3.40	3.40
八	月	3.20	2.70	2.95	3.60	3.40	3.50
九	月	2.80	2.70	2.75	3.50	3.30	3.40
十	月	2.80	2.50	2.65	3.50	2.70	3.10
十一	月	2.80	2.50	2.65	2.80	2.65	2.73
十二	月	2.80	2.60	2.70	2.90	2.80	2.85
一	月	2.80	2.65	2.73	2.90	2.85	2.88
二	月	2.70	2.65	2.68	2.90	2.85	2.88
三	月	3.40	2.70	3.05	3.40	2.80	3.10
四	月	3.60	3.10	3.35	3.53	3.23	3.38
五	月	3.60	3.30	3.45	3.54	3.39	3.47
六	月	3.50	3.40	3.45	3.80	3.65	3.73
七	月	4.40	3.40	3.90	4.80	3.40	4.10
八	月	4.60	3.90	4.25	5.25	4.75	5.00
九	月	4.55	3.45	4.00	4.60	4.40	4.50
十	月	4.60	4.20	4.40	5.20	4.60	4.90
十一	月	4.80	4.20	4.50	5.40	4.70	5.05
十二	月	5.46	4.36	4.91	5.95	4.95	5.45

元

江西省南昌市最近三年早米市價統計

(每石含銀元數)

年 月	類 別	三 機			雙 機			單 機		
		最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均
二十一年一月	月	8.35	8.35	8.35	7.60	7.60	7.60	7.25	7.25	7.25
二十一年二月	月	8.55	8.55	8.55	7.80	7.80	7.80	7.45	7.45	7.45
二十一年三月	月	8.80	8.80	8.80	8.20	8.20	8.20	7.80	7.80	7.80
二十一年四月	月	8.80	8.40	8.60	8.20	8.20	8.20	7.80	7.60	7.70
二十一年五月	月	8.50	7.80	8.15	8.20	7.40	7.80	7.60	7.00	7.30
二十一年六月	月	8.50	8.00	8.25	8.10	7.50	7.80	7.70	7.10	7.40
二十一年七月	月	8.00	7.60	7.80	7.50	6.80	7.15	7.10	6.50	6.80
二十一年八月	月	7.90	7.90	7.90	7.30	7.30	7.30	6.90	6.90	6.90
二十一年九月	月	7.90	6.80	7.35	7.00	7.00	7.00	6.70	5.80	6.25
二十一年十月	月	6.50	6.00	6.25	6.00	5.20	5.60	5.60	5.20	5.40
二十一年十一月	月	6.20	6.00	6.10	5.80	5.60	5.70	5.20	5.00	5.10
二十一年十二月	月	6.00	6.00	6.00	5.60	5.60	5.60	5.00	5.00	5.00
二十二年一月	月	6.80	6.20	6.50	6.40	5.80	6.10	6.00	5.40	5.70
二十二年二月	月	6.80	6.40	6.60	6.40	6.00	6.20	6.00	5.80	5.90
二十二年三月	月	6.50	6.20	6.40	6.00	6.00	6.00	5.80	5.80	5.80

四	月	0.40	6.20	6.30	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	5.80	5.80	5.80
五	月	6.40	6.40	6.40	6.00	6.40	6.00	6.00	6.00	6.00	5.80	5.80	5.80
六	月	7.75	6.80	7.28	6.50	6.50	6.30	6.40	6.00	6.00	5.80	5.80	5.90
七	月	7.20	7.10	7.15	6.50	6.50	6.50	6.50	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00
八	月	7.10	6.00	6.55	6.70	6.70	5.70	6.20	6.00	5.30	5.30	5.65	6.00
九	月	6.20	6.00	6.10	5.70	5.70	5.70	5.70	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
十	月	6.10	6.00	6.05	5.70	5.70	5.70	5.70	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
十一	月	6.00	5.70	5.85	5.70	5.70	5.60	5.65	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
十二	月	5.70	5.70	5.70	5.60	5.60	5.00	5.60	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
二十	月	5.70	5.70	5.70	5.60	5.60	5.00	5.60	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
二十一	月	6.10	5.70	5.90	5.00	5.00	5.00	5.00	5.30	5.30	5.30	5.30	5.30
二十二	月	6.80	6.10	6.45	6.00	6.00	6.10	6.10	6.45	6.45	6.45	6.45	6.45
二十三	月	7.20	6.65	6.88	6.80	6.40	6.60	6.60	6.60	6.60	6.60	6.65	6.65
二十四	月	7.30	7.15	7.22	6.80	9.80	6.85	6.70	6.60	6.60	6.60	6.65	6.65
二十五	月	7.80	7.30	7.55	7.50	6.90	7.20	7.30	7.30	6.70	7.00	7.00	7.00
二十六	月	8.70	7.70	8.20	8.10	7.40	7.75	7.80	7.80	7.00	7.40	7.40	7.40
二十七	月	10.00	8.70	9.35	9.40	8.10	8.75	8.50	8.50	8.00	8.00	8.00	8.00
二十八	月	9.20	8.80	9.00	8.80	8.40	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60
二十九	月	9.80	9.40	9.60	9.00	8.80	8.90	8.90	8.90	8.90	8.90	8.90	8.90
三十	月	10.40	9.80	10.10	9.95	9.25	9.65	9.65	9.65	9.65	9.65	9.65	9.65
三十一	月	1.60	10.00	10.80	11.20	9.10	10.15	10.15	10.15	10.15	10.15	10.15	10.15

二十三年九月至十二月無市。

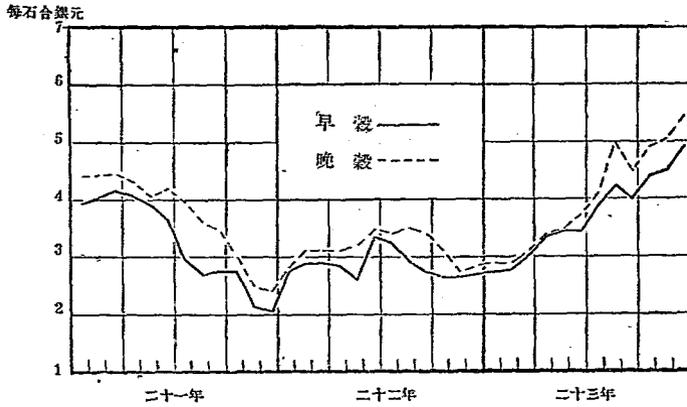
### 江西省南昌市最近三年晚米市價統計

(每石合銀元數)

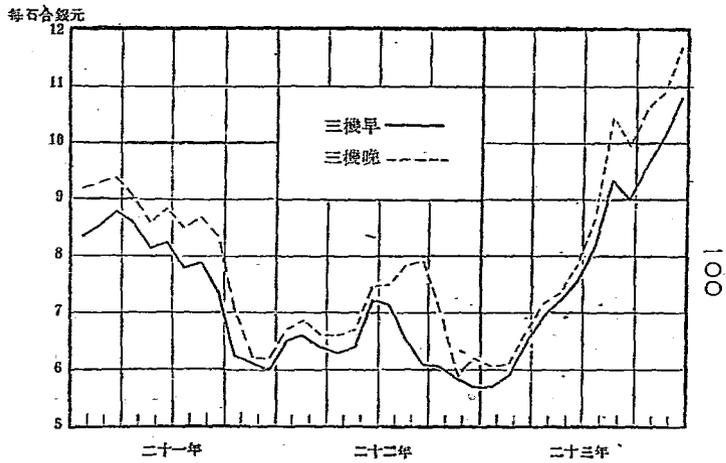
年 月	類 別 價 格	三			晚			雙			晚			單		
		最 高	最 低	平 均												
二十一年一月	9.20	9.20	9.20	9.20	8.50	8.50	8.50	8.00	8.00	8.00	8.00	8.00	8.00	8.00	8.00	8.00
二十一年二月	9.30	9.30	9.30	9.30	8.70	8.70	8.70	8.20	8.20	8.20	8.20	8.20	8.20	8.20	8.20	8.20
二十一年三月	9.40	9.40	9.40	9.40	9.00	9.00	9.00	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60	8.60
二十一年四月	9.30	9.30	9.30	9.05	9.00	8.60	8.80	8.30	8.30	8.30	8.30	8.30	8.30	8.30	8.30	8.45
二十一年五月	8.80	8.80	8.40	8.60	8.60	8.20	8.40	8.30	7.60	7.60	7.60	7.60	7.60	7.60	7.95	8.05
二十一年六月	8.80	8.60	8.40	8.85	8.80	8.20	8.50	8.30	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.40	8.05
二十一年七月	8.80	8.20	8.50	8.50	8.50	8.00	8.25	7.80	7.00	7.40	7.00	7.40	7.00	7.40	7.80	7.40
二十一年八月	8.70	8.70	8.70	8.70	8.50	8.50	8.50	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80	7.80
二十一年九月	8.70	8.00	8.35	8.35	8.50	7.60	8.05	7.40	6.40	6.90	6.40	6.90	6.40	6.90	6.90	6.90
二十一年十月	7.70	6.38	7.02	7.02	7.20	6.00	6.60	5.80	5.80	6.00	5.80	6.00	5.80	6.00	6.00	6.00
二十一年十一月	6.40	6.00	6.20	6.20	6.20	6.00	6.10	6.00	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.90
二十一年十二月	6.20	6.20	6.20	6.00	6.00	6.00	6.00	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80	5.80
二十二年一月	7.00	6.40	6.70	6.80	6.80	6.20	6.50	6.60	6.00	6.30	6.00	6.30	6.00	6.30	6.30	6.30
二十二年二月	7.00	4.70	6.85	6.80	6.80	6.20	6.50	6.60	6.10	6.35	6.10	6.35	6.10	6.35	6.35	6.35
二十二年三月	6.70	6.50	6.60	6.50	6.50	6.30	6.40	6.30	6.10	6.20	6.10	6.20	6.10	6.20	6.20	6.20

四	月	6.70	6.50	6.60	6.50	6.30	6.40	6.20	6.10	6.15
五	月	6.80	6.60	6.70	6.50	6.40	6.45	6.20	6.20	6.20
六	月	7.80	7.00	7.45	7.00	6.80	6.80	6.70	6.50	6.60
七	月	7.70	7.80	7.60	7.20	7.00	7.10	6.70	6.70	6.70
八	月	8.00	7.70	7.85	7.90	7.50	7.70	6.80	6.80	6.90
九	月	8.10	7.70	7.90	8.10	7.50	7.80	6.90	6.90	6.90
十	月	8.00	6.00	7.00	7.80	5.90	6.35	6.80	5.00	5.90
十一	月	6.00	5.80	5.90	5.90	5.70	5.80	5.70	5.50	5.60
十二	月	6.40	6.00	6.20	5.70	5.70	5.70	5.50	5.50	5.50
二十三年										
一	月	6.10	6.00	6.05	5.70	5.70	5.70	5.50	5.50	5.50
二	月	6.20	6.00	6.10	5.70	5.70	5.70	5.50	5.50	5.50
三	月	7.10	6.20	6.65	6.95	5.70	6.38	6.86	5.60	6.28
四	月	7.40	6.90	7.15	7.20	6.70	6.95	6.90	6.50	6.70
五	月	7.60	7.21	7.38	7.35	7.15	7.25	7.00	6.90	6.95
六	月	8.15	7.50	7.88	7.80	7.30	7.55	7.60	7.00	7.30
七	月	9.40	7.90	8.65	9.10	7.70	8.40	8.40	8.40	7.90
八	月	10.90	10.00	10.45	10.65	9.75	10.20	9.70	8.40	9.05
九	月	10.20	9.70	9.85	9.95	9.45	9.70	9.20	8.80	9.00
十	月	11.30	10.00	10.60	10.95	9.75	10.35	9.40	9.40	9.40
十一	月	11.50	10.30	10.90	11.25	10.05	10.65	—	—	—
十二	月	12.40	11.00	11.70	12.15	10.75	11.45	—	—	—

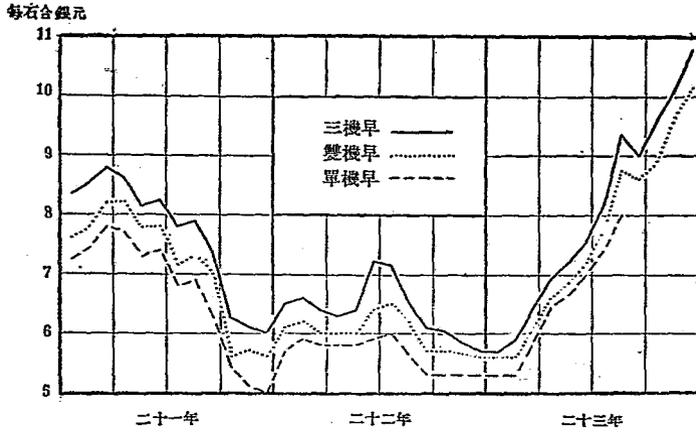
第四圖 江西省南昌市最近三年の三機早晚穀の市價趨勢圖



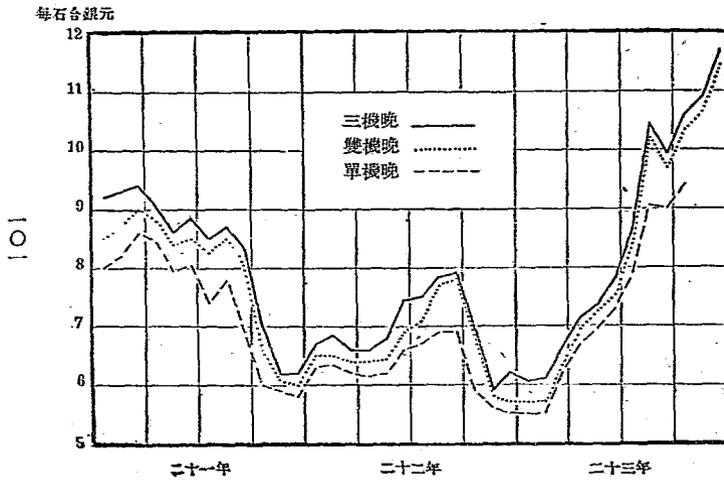
第五圖 江西省南昌市最近三年の三機早晚米の市價趨勢圖



第六圖 江西省南昌市最近三年の機早米の市價趨勢圖

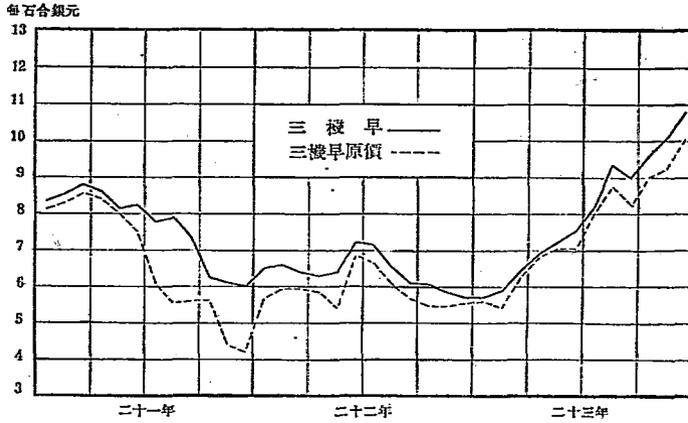


第七圖 江西省南昌市最近三年の晚機米の市價趨勢圖

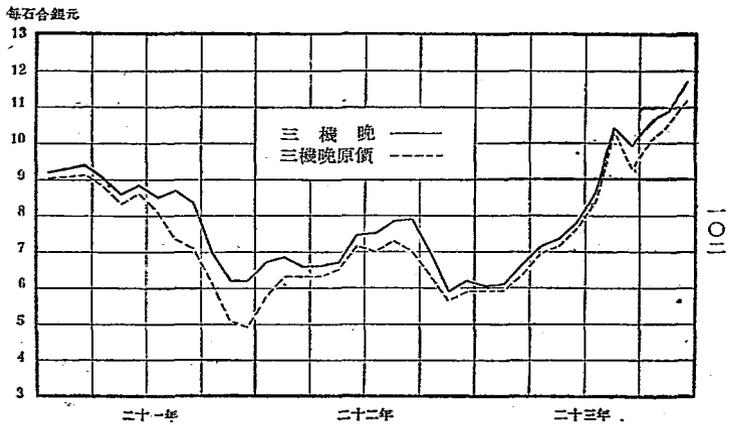


101

第八圖 江西省南昌市最近三年の三機早の市價と其の原價比較圖



第九圖 江西省南昌市最近三年の三機晚の市價と其の原價比較圖



## 第三章 九 江 市

### 第一節 九江米市の性質

九江米市の性質は交易にあらずして移出にある。九江に湖口は江西糧米移出地である。唯だ數額の相距ること甚だ遠く、九江を経るものは約七〇%以上で湖口を経るものは通常三〇%に達しない。これは次の如き原因による。

(一) 九江は南潯鐵道の終點であり、南昌に集中して移出される糧米の大部分が南潯鐵道による。

(二) 修水流域の米穀は塗家埠を集中地となし、塗家埠にいたつた後、その移出を欲するものは自然必ず九江に運ばれることになる。

(三) 九江は江西全省の對外商埠で中魯、中國、上海交通及び四省農民銀行等いづれも支店をここに開設し、各種の移出入業を經營してゐる商人及び漢口、上海等より江西に糧米の購入に來る者もここに機關を設けないものはない。

故に小切手の發行、市況の調査、交易の交渉等いづれも便利であり、且つ政府はここに海關を設け各汽船はいづれも停泊する。

(四) 九江市の人口は十萬にすぎないが本地及び附近各地に稻を産するもの甚だ少く、陸路から來るもの(鐵道

を除く)は絶無といふことが出来る。故に十萬の人口の食米は全部他縣の供給を仰がねばならない。これにより南昌及び上流に對する糧食移出の需要に就て言へば、九江も亦一重要消費市場である。凡て之等はいづれも九江を江西に於て南昌につぐ重要市としてゐる。その所以のものは即ち江西全省糧米移出の總門戸といふ點にある。

年來九江より出入する糧米の數額に關しては已に前文海關統計中に詳述したから再びここには述べない。九江と南潯鐵道との關係にいたつては左の表中に見られる。

最近五年來南潯鐵道による九江米穀移入の數量

(單位籽)

月	年	十	九	年	二	十	年	二	十	年	二	十	年
一月	一九二〇年	四、七八一、三一九	一三、四五五、六五二	三、七四一、九九二	五、八二五、二〇七	三、六八九、七八七							
二月	一九二〇年	三、七二三、九四七	一二、一三七、八八三	九九七、四一一	三、三一二、四五九	一、四二七、七四八							
三月	一九二〇年	四、二三二、八八六	三、二三五、六一九	一〇、〇〇七、二六六	二、九五八、七七八	一七五、八二二							
四月	一九二〇年	一、六四五、二八八	一、六九八、六四〇	三、〇七三、八六五	二、二一〇、四二一	九一、四〇〇							
五月	一九二〇年	七四、六〇四	三、一八八、三〇六	七、五三九、六六二	一、一八七、五四六	三七八、六九五							
六月	一九二〇年	三五二、九八八	八二六、六一五	四、一二八、三五二	一、一九一、〇二七	三七〇、〇〇九							
七月	一九二〇年	五、〇一四、一九三	一、六七三、五六八	三、六六六、八一八	二七九、〇三二	六九四、〇三六							
八月	一九二〇年	二、五五二、六七二	一、一五六、九八五	五三四、七六七	三〇〇、五四七	六六〇、二四三							
九月	一九二〇年	一、八〇八、七四七	七八一、四三六	七一一、八二八	七九六、七八三	六九二、九九〇							

最近五年來九江南濇鐵道による米穀移出の數量

十月	八、一八五、九五〇	二、二六四、二四六	五六七、一八六	一、九五〇、九四一	
十一月	八、四五五、九五七	一、九〇七、二〇三	四、三〇一、九八三	三、三一九、〇三八	
十二月	九、七一四、八八六	三、〇五五、六一〇	三、五〇一、七四七	五、一九八、九九八	
總計	六〇、五四三、四三七	四五、五八一、七八一	四二、七七二、八七六	二八、五三〇、七七七	八、一八〇、七三〇

月	年	十	九	二	十	二	十	二	十	三
月	年	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一月	一、五六〇	五、二五六	四、四八七	一、三三五						
二月	五、四二五	二、三八四	一、九三九							
三月			二、二〇〇							
四月	三八四	一九、五六七	四五〇	六、五九五	五、二一七					
五月	一、七八二、一〇五	三五、四四〇	四、六一四	一、八六九	四、七七三					
六月	三六一、八七九	八五五	四、六一四		一三、六〇四					
七月	五四、三五一	三八、〇六一	三、三〇〇	一九〇	六四、二三一					
八月	一一、二四六			二七〇	二四六、六九四					
九月	二四、一三三			一、六七〇	一一、五五四					
十月	七、〇九二	一、九二九		四〇〇						

一〇五

十一月	七、〇八五	三〇〇	一九九	二〇〇	
十二月	二、六九〇	八九二	一〇〇	二、六六〇	1
總計	五、五一四、九五〇	一〇四、六八四	二〇、八四七	一七、一二八	三四六、〇七三

## 第二節 九江米市の組織

九江米市を南昌に比すると次ぎの如き特徴がある。一は全市に機米廠が一つもないことである。ただし九江附近には産稻甚だ少く、陸路よりの來源絶無で外縣より來るものは移出に準備されてゐる故全部精米である。今一つは九江米市の組織は移出業を核心となし、當地に小賣米店は一百三十餘軒あるが性質上特に重要なものではなく、よつて九江米市の分析は必ず移出業より始めねばならない。九江移出業は通常左の如く分類せられる。

第一類は資本の比較的大なるもので南昌に小賣店を兼ねた精米廠を持ち、九江にても移出入店と小賣店を兼ね、且つ倉庫を持つてゐる。かかる米商は唯に資本が雄厚なるのみならず營業範圍が廣大であり、精米商小賣商卸賣商移出商を一身に兼ねてゐるから利潤の獲得は頗る大であり、且つ時には市場も操縦する。

第二類は純粹の移出商であり専ら臨川、吉安等内地の米市或は甚しきに至つては南昌より精製された食米を購入し、漢口、上海に運搬する。かかる米商は小賣店を設けず九江にて店をもつてゐるものは一つしかない。又時に倉庫を持つてゐるものもあり、時には倉庫すらないものもある。

第三類は九江の行家で通常或は自ら小賣店を設け或は小賣店を設けず専ら客に代つて内地から運んで來た精米を買賣する。かかる行家は全市に八家ある。彼等は時々大量の糧米を入手し且つ市場の狀況を熟知してゐるから一度利圖るべしと見るや亦かかる移出に参加する。

第四類は九江の小賣商で、普通小賣店を主としてゐるが利を得る情形を損んだ時には若干移出に手を出す。

第五類は九江の米店であり、自身移出賣買をしないが南昌或は臨川の若干の機米廠の委託を受け代つて移出交易をなす。

第六類は運轉通關店である。かかる商業は九江には甚だ多くその基本性質は決して米商ではなく、且つその轉運税關手續は決して米糧にのみ限られたものではないが、通常米商が移出の一部分の手續に就ていづれも彼等に託して代辨せしむるため少數の轉運通關店ばよい機があれば移出をもなし、手續費以上の利潤を獲得せんと企圖する。最後の第一類は多少資本を持つてゐる江西外の民船で、通常客に代つて貨物を運搬するが彼等は不斷に各地を往來し、各地の供求情形及び市場價格を熟知してゐるから、利圖るべしと見れば自ら賣買を行ふ。

以上が九江米市組織中の移出商の大體の情形である。

この移出業を核心とする米市組織に對するものは即ち九江の米糧倉庫であり、その數は頗る多く、各汽船公司及南潯鐵路局はいづれもかかる設備を持つてゐる。招商倉庫の如きは最も多き時には米二萬包を容るべく、太古倉庫も亦二萬包容れることが出来る。故に單に交通機關倉庫のみについていつても九江米糧の備容量は已に六萬五千包前後である。各轉運業は大小の倉庫を持たないものはない。今そのやゝ大なるものを挙げれば左の如くである。

九江縣米糧倉庫一覽表

店名	業別	地點	倉庫間數	約計容量	附記
裕民	轉運	倉	二	三〇、〇〇〇石	中國銀行其の一部を用ふ
同記		倉	三	二〇、〇〇〇	中國銀行の代理保管
新通		倉	一	八、〇〇〇	中國銀行の代理保管
有記		倉	二	一〇、〇〇〇	上海銀行の代理保管
新記		倉	一	七、〇〇〇	休業
悅來		倉	三	二〇、〇〇〇	休業
捷成		倉	三	一三、〇〇〇	休業
鼎牲		停車場ホーム	一	六、〇〇〇	休業
固本		倉	二	一〇、〇〇〇	上海銀行租借
總計			一八	一二四、〇〇〇	

積方に合堆と分堆とある。合堆とは萬石を積む事が出来るが、分堆では出口を設けなければならぬから高く積上げる事が出来ず合堆の半數である。

第二節 運輸情形

糧米の運搬販賣上九江が關係を持つてゐるのは上流は漢口、下流は上海である。

昔江西米は九江に集中して後大部分蕪湖に運ばれた。蕪湖米市衰落して上海が之に代つた後九江糧米は下流に運

送する時に大體上海に行く。しかし漢口の市價が高い場合には漢口に運ばれるものもある。通常の情形にては上海に運ぶ者は大體汽船により漢口に運ぶものは民船による。その裝運の經過は上海に往くものは比較的簡單で、大部分は各地を往來してゐる米商及び南昌、九江等各地の機米廠にして移出を兼ねてゐるものによつて運ばれる。

漢口に往くものは通常四種に分類される。一は漢口の民船（自買船）がやつて來て行ふもの、二は漢口行家が行ふもの、三は米商が直接運搬するもの、四は南昌九江等各地の機米廠にして移出業を兼ねたものが運搬するもの。運輸費用は民船を裝して漢口に往くものは石當り五角前後で、汽船を裝して上海に往くものは石當り約七角である。詳細なる名目は後節で述べよう。

九江碼頭の情形に就ていへば、昔は流氓の勢力甚大で一般米商はいづれも對策に苦んだが、近年になつて市政委員會が整理に努力した結果、現存碼頭は米を運ぶもの、鹽を運ぶもの等とその性質及び範圍を確定し、且つ領工を指定し、工人を登記したため流氓の弊は已に大いに除かれたが、ただ碼頭工人が仕事を強要する事は普通に見られることである。今糧米運輸と關係ある各碼頭の名稱及び工人人數を表にすれば左の如くである。

九江各碼頭部分名稱及び工人數表

區別	碼頭名稱	領工姓名	工人數
一分局	日清碼頭輪壘部	吳士良	六五
	長工部	吳輝柳	二七
過險部	千士申		一七
區別	碼頭名稱	領工姓名	工人數
南華碼頭	日清碼頭起肩部	李風山	六〇
	通興裕晉和裕有記堆棧	何善園	七六
	南華碼頭	桂友	一五五



#### 第四節 米の原價増加の過程

九江は江西糧米の移出地であるが故に、江西について言へば、糧米の運搬販賣は九江にいたつた時一段落を告げたといふことが出来る。然らば吾人はここに於て分析を加ふべき一問題がある。即ち糧米が原産地より九江にいたるまでの原價加重の過程これである。

糧米の運搬販賣は中國農産物の商品化問題の主要内容であり、江西について言へば、米穀は農業生産中比重の最も大なるもので最大多数の農民の生活は全くこれに依存してゐる。併しながら南昌、九江等の地で米價石當り十元を超過してゐる時、内地農民手中の稻穀は僅か二、三元の價にしか賣れぬのである。換言すれば米穀が生産者の手中より消費者の口中にいたるまでの経過は實に言ふにたへぬものがあり、都會では米價の高きに苦しみ、農民は穀價の低いのに困しむといふ怪現象を醸成するにいたつた。米穀原價増加の過程は實に糧食運搬販賣中の主要問題である。

今二石一斗二升八合（精米一石に等しい）の穀子が臨川の農民の手中より小賣店に賣られ、小賣店は臨川行家を介して米商に賣り、米商は南昌に運び行家を介して機米廠に賣り、機米廠は碾いて精米とした後九江に運んで上海に輸出すると假定した場合その原價増加の過程は左の如くである。

程次	類	別	費額	程次	類	別	費額
一	農民が小賣店に賣る(穀子市價二元に假定す)		四・二五六	一七	荷卸費		〇・〇六〇
二	小賣店の利潤(十分の一五)		〇・六三七	一八	庫倉費(九江到着後)		〇・〇二〇
三	臨川手数料(毎元三分の計算)		〇・一二八	一九	入庫費		〇・〇二〇
四	臨川、南昌間の運費(每石二角)		〇・四二六	二〇	出庫費		〇・〇二〇
五	途中損失(九九包を以て計算)		〇・〇四三	二一	江岸までの運搬		〇・〇三〇
六	南昌に至り販賣後米商の利潤(十分一)		〇・四二五	二二	葛船(碼頭船倉庫)		〇・〇二〇
七	南昌手数料(毎元三分の計算)		〇・一二八	二三	量目調		〇・〇〇五
八	扒斛の費用		〇・〇二三	二四	包閉ぢ(破れてゐなくとも規定に依り包閉ぢ料を出す)		〇・〇一〇
九	磨工		〇・一〇〇	二五	托 屑		〇・〇〇五
一〇	碾費		〇・一六〇	二六	積換(葛船から駁船へ)		〇・〇八〇
一一	荷作り(麻袋は消耗しないため計入しない)		〇・〇一〇	二七	駁船(大輪で)		〇・〇四〇
一二	牛行に至る下河賃(裝運開始)		〇・〇八〇	二八	保險		〇・〇〇五
一三	駁力(ハシケ賃)		〇・〇三〇	二九	上海までの運漕費		〇・五〇〇
一四	上力(驛に於ける搬入賃)		〇・〇八〇	三〇	機米廠利潤(十分ノ一假定)		〇・四二五
一五	裝車		〇・〇二〇	三一	移出商利潤(十分ノ一)		〇・四二五
一六	車費		〇・二七〇	三二	其他(碼頭の流氓の強請・拔取等)		〇・一〇〇
				總計			八・五八一

## 第五節 米 價

九江の米價は江西糧食移入の關係が特に密接なるため今回の調査は九江の米價に對し時を費すこと甚だ多く、左記の數字は全く二家の大米店の三年來の帳簿により抄録して得たものである。その毎日の數字は一日、十一日、二十一日の三日の市價平均より得たものである。今之を分述すれば左の如くである。

第一、九江米市には晚米多く早米は少い。兩者の價格の差異は最近三年に就て見れば、民國二十一年の差は極めて少くただ三月、五月、十月の三ヶ月中差が一元に近かつたにすぎない。二十二年全年内に兩種米價の距離は普通半元以上であり、この差は二十三年にいたつて大いに減少した。その原因は二十二年は江西の早米が非常に豐作であつたからである。

その次に最近三年來九江米價變動の情形にいたつては、即ち民國二十一年と二十三年兩年中の變動はいづれも烈しく、二十二年のみはやゝ正常であつた。二十二年の三機早米に就て言へば、最低の價格は七元八角である。三機晚米に就て言へば、最低價格は六元八角で最高價格は八元二角である。その間の上下は前者は二元四角、後者は一元四角にすぎない。二十一年の如きは同一の變機早米が一年の中四元の上下をなし、同一變機晚米が一年に三元四角の上下をなした。二十三年にいたつては夏季大旱に因り、上半期の市價はいづれも七元前後（晚米）であつたが、下半年八月の市價の如きは遂に十四元内外に暴騰し、その劇烈なる情形は實に近年來未だ見られないものであつた。

最後に三年來の九江米價と南昌米價を比較する場合に、民國二十二年八、九月兩月がやゝ異狀を呈した外、その他の各月の趨勢はいづれも大體相等しかつた。二者の差は民國二十一年の時に二元四角が最大で二十二年の時は一元五角が最大であり、二十三年は旱災のため八月の差は殆んど三元に達した。

# 江西省九江市最近三年來之米價

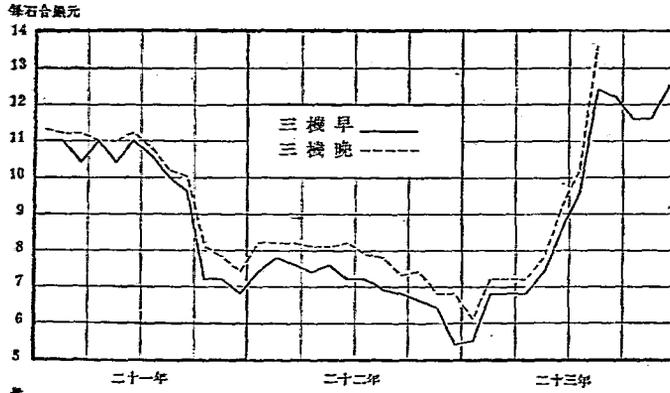
(每石合銀元數)

項 別	晚 米 類				早 米		額
	特種晚米	三種晚米	次種晚米	三種早米	雙種早米	單種早米	
二十一年一月	* 11.80	* 11.30	* 10.90	* 11.00	* 10.40	* 10.00	
二十一年二月	11.60	11.20	10.80	11.00	10.20	9.60	
二十一年三月	11.80	11.20	10.60	10.40	9.60	9.20	
二十一年四月	11.60	11.00	10.40	11.00	10.40	10.00	
二十一年五月	11.40	11.00	10.60	10.40	10.00	9.60	
二十一年六月	11.60	11.20	10.80	11.00	10.20	9.60	
二十一年七月	11.60	10.80	10.20	10.60	10.00	9.60	
二十一年八月	11.00	10.20	9.80	10.00	9.60	9.20	
二十一年九月	10.80	10.00	9.60	9.60	9.10	8.70	
二十一年十月	8.50	8.10	7.30	7.20	6.70	6.30	
二十一年十一月	8.20	7.80	7.20	7.20	6.50	6.20	
二十一年十二月	* 7.80	* 7.40	* 6.80	* 6.80	* 6.40	* 6.00	
二十一年平均	10.64	10.10	9.63	9.68	9.09	8.68	
二十二年一月	8.70	* 8.20	7.60	7.40	* 6.90	6.40	
二十二年二月	8.60	8.20	* 7.80	* 7.80	6.90	6.50	
二十二年三月	8.60	8.20	7.60	7.60	6.90	6.60	

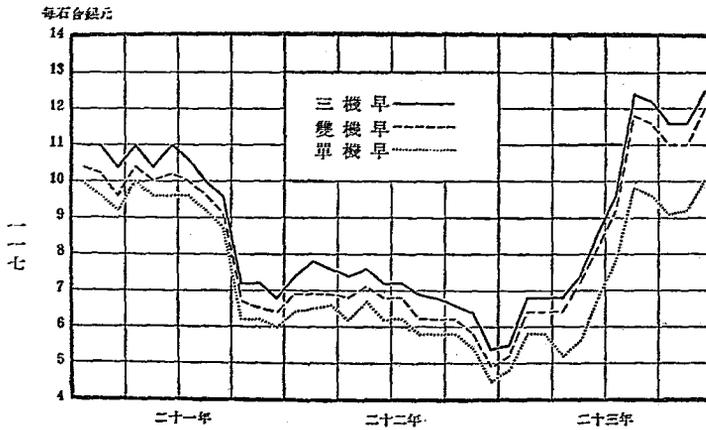
四	月	8,440	8,110	7,660	7,440	6,880	6,200
疏	月	8,660	8,110	7,660	7,660	7,110	* 6,700
六	月	* 8,880	8,200	7,600	7,200	6,800	6,200
七	月	8,200	7,990	7,440	7,200	6,800	6,200
八	月	8,440	7,890	7,440	6,900	6,200	5,800
九	月	7,880	7,800	6,800	6,800	6,200	5,800
十	月	8,440	7,440	6,800	6,600	6,200	5,800
十	月	* 7,200	* 6,800	6,440	6,440	5,800	5,400
一	月	7,440	6,800	5,660	5,440	* 4,900	* 4,500
二	月	8,266	7,775	7,114	7,038	6,466	6,011
二	月	* 7,550	* 6,110	* 5,660	* 5,550	* 5,200	* 4,800
一	月	7,660	7,200	6,800	6,800	6,400	5,800
二	月	7,660	7,200	6,800	6,800	6,400	5,800
三	月	7,660	7,200	6,800	6,800	6,400	5,800
四	月	7,800	7,200	6,800	6,800	6,400	5,200
五	月	8,200	7,800	7,440	7,440	7,200	5,600
疏	月	8,200	7,800	7,440	7,440	7,200	5,600
六	月	9,800	9,200	8,660	8,660	8,200	6,800
七	月	11,000	10,200	9,660	9,660	9,200	7,800
八	月	* 14,200	* 13,600	12,110	12,440	11,800	9,800
九	月	13,900	—	12,660	12,200	11,660	9,660
十	月	13,000	—	12,440	11,660	11,000	9,100
十一	月	12,660	—	12,000	11,660	11,000	9,200
十二	月	13,660	—	* 13,000	* 12,550	* 12,000	* 10,000
平均		10,566	8,566	9,448	9,332	8,877	7,466

註：\* 表明最高價和最低價。

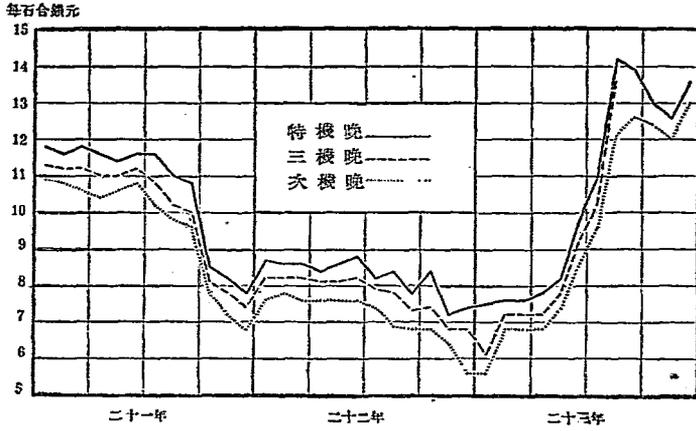
第十圖 江西省九江市最近三年の三撥早晚米市價趨勢圖



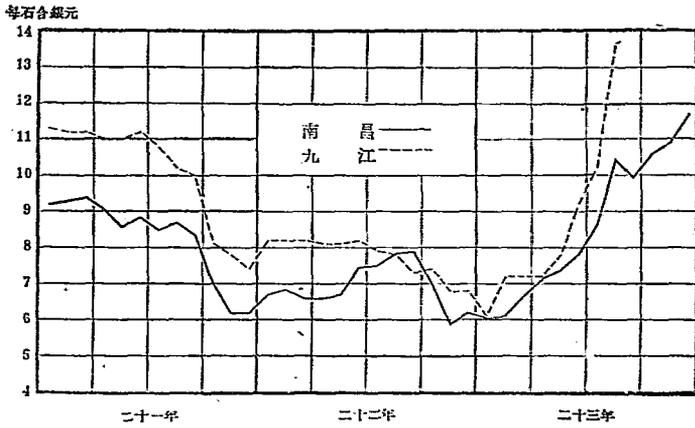
第十一圖 江西省九江市最近三年の機早米市價趨勢圖



第十二圖 江西省九江市最近三年の極晚米市價趨勢圖



第十三圖 江西省南昌市と九江市の三年來の三極晚米市價比較圖





## 附錄 (一)

## 江西省南昌市米業一覽

名稱	所在地	資本金 元	交租人名	名稱	所在地	資本金 元	交租人名
豐棧	民教路口	1,200	樊履仲	復順和	同上五三號	510	眞作雲
茂和	上西大街四號	600	樊福叔	復順祥	同上三號	510	徐金山
茂和	中山路五三二號	1,200	董煥培	裕合祥	同上四一號	510	羅財生
官付	同上六〇三號	3,000	江維燾	仁遠	同上三二號	510	張冠水
裕盛	新巷口二七號	600	鄧致遠	永生祥	同上二三號	510	漆雲卿
義生祥	上餘字一三號	1,000	羅會芳	復興祥	同上	510	漆雲水
裕興祥	同上九號	1,000	羅青山	復利厚	金龍路一號	510	徐金榮
裕成祥	中山路三三一號	1,000	魏存雅	順順豐	城隍廟二二號	1,200	吳成順
裕成祥	寶王廟四四號	800	徐正根	裕泰盛	城隍廟五四號	2,000	黎炳莊
裕成祥	同上二七號	510	羅會印	裕泰盛	隍子巷一四二號	900	王紹宗
裕成祥	洪恩橋二一號	600	李仰琛	裕泰盛	隍正街五八號	900	羅世傑
裕成祥	隍子巷四七號	510	魏安啓	裕泰盛	上水巷	510	羅世傑
裕成祥	同上三三號	1,000	胡克常	裕泰盛	隍正街三號	1,200	黎瑞祥
裕成祥	同上	1,000	羅謙山	裕泰盛	隍正街五〇號	900	黎瑞祥
裕成祥	延慶寺一九號	1,000	余允升	裕泰盛	同上五號	1,000	黃俊升
裕成祥	三神廟四七號	1,200	劉昌煥	裕泰盛	火神廟一四號	600	李永祿

信慶祥	三聖廟三四號	510	傅學迎	鎮徽樓六〇號	510	周信成
慶泰和	順九門三二號	510	陳子時	風神廟五五號	1,000	胡小狹
萬信	同上二二號	510	閔顯建	三義廟風神廟七三號	510	李觀光
信順祥	同上二一七號	1,000	閔志和	三義廟四一號	510	梁維順
許豐祥	慶瓜池一三號	510	熊慶的	瓦子角一一七號	900	高漢平
豐泰	倉殿側八〇號	510	許學泉	線巷街一一七〇號	900	萬慶堂
裕大	中山路東三〇號	510	傅學欽	同上二二〇號	1,200	吳小三
同厚	順道院一八二二號	510	許信綽	上徽亨九〇號	800	吳以度
厚昌祥	南林樹二四號	510	周德臣	線巷街七五號	900	張佳龍
福隆	坡頭街一三三號	510	閔龍山	復勝路七五三號	510	梁顯排
許裕盛	同上〇一號	510	許連興	同上七四三號	510	徐德佳
裕豐和	同上五七號	510	傅得榮	同上七三九號	510	陳守洪
永昌祥	同上三二號	510	李春連	下正街一五號	510	李昌九
寶源盛	同上三七號	510	傅光輝	塘子河四號	510	徐令栢
傅生	金盤路八五號	510	傅大永	北盤五號	510	李人榮
德厚	同上九三號	510	胡得榮	同上二五二號	510	吳章斌
德厚	同上五四號	510	范金福	東萬盤巷四七號	510	歐陽誠茂
				恒勝路七六八號	510	蔣品齊
				同上七七〇號	510	徐顯茂

江西省南昌市米業一覽

(111)

名	稱	所	在	地	資本金	支	配	人	名	稱	所	在	地	資本金	支	配	人	名
					元									元				
義興	祥	同上	七	七	四	號	李昌炳	義安	肥	前	八	段	一	三	號	毛榮達		
德盛	祥	同上	七	八	二	號	徐世耀	和	豐	同上	二	八	號	鄧木波				
喻和	祥	帥家坡	一	一	三	號	徐世耀	長	發	後	八	段	五	一	號	楊長純		
吳華	祥	同上	一	一	號	劉府英	萬	恒	學	同上	五	〇	號	高成昌				
義順	豐	德勝路	七	六	九	號	推功發	萬	裕	同上	四	二	號	趙協信				
義和	成	同上	七	五	五	號	李立福	萬	裕	同上	四	二	號	譚雨茂				
義和	成	同上	七	五	九	號	胡云欽	恒	興	浮	綽	頭	二	九	號	萬志高		
胡恆	泰	德外	下	正	街	二	羅竹山	裕	豐	九	段	廟	八	號	劉維賢			
仁恆	昌	德外	下	正	街	二	李義生	泰	祥	九	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	德外	下	正	街	二	李成緒	裕	豐	七	段	廟	八	號	貴			
李恆	昌	帥家坡	九	九	號	李人獨	李成緒	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	下	正	街	五	四	李茂生	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	帥家坡	九	九	號	李人獨	李茂生	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	下	正	街	五	四	李人明	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	下	正	街	五	四	李火生	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李恆	昌	同上	二	七	號	方泉波	永茂祥	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
方	人	同上	二	八	號	李寶生	永茂祥	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			
李	華	同上	三	一	號	李寶生	永茂祥	裕	豐	七	段	廟	八	號	劉			

李多福	同上一五五號	510	李仁漢	同立	泰豐	同上二五四號	510	鄧顯賢
裕昌	北漢街一六五號	510	李椰陽	同立	豐和	同上二五九號	510	李子清
周三	下正街二一號	510	周芝芳	同立	豐和	同上二七六號	1,000	李宇斌
寶生	北漢街二二號	510	徐發順	同立	豐和	同上二八二號	510	萬輝根
裕生	下正街三三號	1,000	曹荷安	同立	豐和	千家那巷一一號	510	傅運回
裕生	同上六一號	510	李顯桂	同立	豐和	榮子橋一一號	510	李興發
裕生	同上三〇號	510	張國川	同立	泰和	南海行官五號	1,200	程從舟
裕生	同上七八號	510	王老七	同立	泰和	三龍井一八二號	510	胡普生
裕生	同上四一號	510	王連瑞	同立	泰和	校廠西五九號	510	鄧柳根
裕生	同上四一號	510	王發生	同立	泰和	西大街五九號	510	王文科
裕生	同上五九號	510	鄧普保	同立	泰和	同上七六號	600	康以洪
裕生	同上七四號	510	鄧金榮	同立	泰和	同上七一一號	1,200	李麟泉
裕生	同上七五號	510	鄧思但	同立	泰和	同上七一一號	1,200	劉維新
裕生	同上七五號	510	徐國有	同立	泰和	同上七一一號	1,200	姜生發
裕生	同上七五號	510	徐興金	同立	泰和	同上七一一號	1,200	陳發發
裕生	同上七五號	510	徐火明	同立	泰和	同上七一一號	1,000	史協民
裕生	同上七五號	510	徐世隆	同立	泰和	同上七一一號	510	康裕生
裕生	同上七五號	510	徐老三	同立	泰和	同上七一一號	510	張箱朋
裕生	同上七五號	510	鄧必文	同立	泰和	同上七一一號	2,000	張正順
裕生	同上七五號	510	鄧學登	同立	泰和	同上七一一號	2,000	徐寶佐
裕生	同上七五號	510	鄧立權	同立	泰和	同上七一一號	1,000	
裕生	同上七五號	510	趙瑞甫	同立	泰和	同上七一一號	1,000	

### 江西省南昌市米業一覽 (續)

111

名 稱	所 在 地	資本金	支取人名	名 稱	所 在 地	資本金	支取人名
義泰源祥	德勝路七三八號	1,440元	李德源	義和	南關口二號	510元	張公望
裕三泰興和	同上七七七號	1,000	李仁烟	四生和	南關口六二號	510	何齊生
義興和	沱江路六號	1,000	魏麗卿	李錦順	同上六一號	510	李果傑
義和	同上三九號	510	袁福生	鄒榮盛	同上六〇號	510	鄒德勝
萬長發	同上五六號	510	徐孔吉	顧茂盛	同上五二號	510	鄒公召
安昌祥	同上五七號	1,000	萬志本	全豐祥	同上四二號	510	余榮子
永昌祥	石廠街一一九號	2,000	賀安芝	茂泰祥	同上二〇號	510	魏大運
陳義興	字廣發四一八號	510	周啓國	生和祥	同上五五號	510	魏必勝
陳全興	同上四七八號	510	鞠榮生	立新祥	谷市街五一號	510	李永祥
陳全興	同上四八八號	510	陳亮吉	信和	東城巷四六號	510	魏九根
裕源祥	中山路九號	510	羅念水	李長和	同上六一號	510	李德熾
裕源祥	中山路口六一〇號	900	吳立官	聚盛	同上六〇號	510	胡啓高
同豐祥	上河街一五〇號	1,000	柳維珊	廣祥	同上五六號	510	胡啓華
同豐祥	同上四八號	510	羅守誠	洪泰	同上九二號	510	徐老馬
同豐祥	同上六一號	1,200	譚兆榮	楊義	同上四七號	510	柳山水
新盛祥	同上〇七號	510	羅進風	豐和	坡市街九二號	510	徐洪翠
張豐和	上河街一〇三號	610	李文盛	和吉	十字街一七號	510	廖如山
利	同上八一號	1,000	萬少甫		同上八號	510	吳辰廣
	育泰倉一號	510	熊世元		十字街二二號	510	熊潤整

民突裕記	同	510	馮誠昌	順	同上四〇號	510	吳金生
文和記	油行街二三號	1,000	文英有	福	鐵樹坡一四號	510	項樹潤
泰大生	吉水倉三九號	510	魏益清	三	同上二一號	510	李瑞隆
文興發	賭家坡二八號	510	文英風	永	同上三〇號	510	蔡耀勝
許合興	同上四三號	510	許揚興	成	歐家非二四號	510	成和梓
同仁豐	茅竹架七九號	510	羅守樂	瑞	同上三四號	510	蔡子廷
大豐祥	廣行站上河街六〇號	600	傅鳳生	發	同上五七號	510	吳德修
永豐祥	同上	1,000	鄭常香	瑞	同上五七號	510	蔡子耀
厚恆	義源局四六號	3,000	丁全勝	永	同上四〇號	510	蔡永茂
福照	牛車水	2,000	黎瑞庭	發	同上二九號	510	蔡永茂
照記	德外正街六四號	1,000	李入勝	兆	同上二九號	510	蔡永茂
義興和	帥家坡八九號	510	黎照良	源	龍金塔四九號	510	謝樹林
義和祥	同上八八號	510	郭緒如	和	同上五九號	510	鄭九明
義興祥	下正街二三號	510	張益枚	志	同上六八號	510	徐維仁
永怡順	同上二二號	510	魏安員	和	葵濟院四號	510	吳耀輝
江裕祥	帥家坡九七號	510	魏安炳	吳	同上二三號	510	吳孝友
裕昌祥	下正街五六號	510	江基竹	恆	同上二八號	510	王命達
恆昌祥	同上八〇號	510	李昌其	成	同上二一號	510	徐豐根
胡泰和	北城左一〇九號	510	胡美排	合	同上二二號	510	魏大啟
			魏運和	發			吳永根

江西省南昌市米業一覽 (續)

1114

名 稱	所 在 地	資本金 元	安租人名	名 稱	所 在 地	資本金 元	安租人名
趙 順	同上二八號	510	胡忠坤	鄒 天	同上四八號	510	鄒本年
林 豐	同上三四號	510	唐潤身	永 順	學竹架三八號	510	周際芳
萬 茂	同上四〇號	510	吳先祥	厚 祥	神皮廠八八號	1,000	黎雲卿
李 玉	同上四五號	510	黃洪連	茂 祥	同上——四號	510	李昌國
胡 義	同上六〇號	510	李明發	元 生	同上七三號	510	柳老三
吳 雅	同上六四號	510	胡啓義	益 成	同上七〇號	510	雅光祖
吳 雅	同上六六號	510	鄉仁義	天 成	同上——〇〇號	510	胡家駒
蔡 和	同上七〇號	510	吳學昌	長 發	同上——二四號	510	陳隆福
蔡 和	同上六八號	510	吳賢生	徐 恆	同上——二八號	510	徐光遠
蔡 和	同上八〇號	510	吳顯花	德 昌	同上——三四號	510	徐守樹
蔡 和	同上四號	510	吳恩生	三 和	義渡局五號	510	程樹各
蔡 和	同上五六號	510	吳冬望	萬 順	同上六號	1,000	陳隆福
王 瑞	狹市街一五號	510	魏會義	萬 泰	順度廠——六號	510	熊步廷
李 人	同上二〇號	510	曾存宗	萬 發	同上五——號	510	萬成祥
李 人	同上九號	510	吳純雨	萬 泰	同上四二號	1,000	沈志生
李 人	德外下正街——二——號	510	李人相	萬 發	文學廟——八號	600	萬成州
李 人	下正街七號	510	李木根	萬 發	同上七四號	3,000	程樹森
李 人	同上——八號	510		萬 發	同上五二號	510	程樹森

顧和順	同上一二三號	510	傅榮順	同上四八號	510	趙香淵
顧和順	下正街一九號	510	徐瑞芳	同上二六號	1,000	徐觀暉
顧和順	同上三三號	510	徐冬根	猪市街九四號	1,000	萬志根
顧和順	同上〇九號	510	姚和望	猪市街七四號	510	魏國漢
顧和順	同上〇三號	510	徐正根	同上七〇號	510	呂仁泰
顧和順	同上〇三號	510	徐其瑞	沿江路二九號	600	羅景生
顧和順	同上七六號	510	萬大屯	同上三二號	1,000	李正平
顧和順	同上七六號	510	姚理作	安濟渡二七號	510	熊贊枝
顧和順	同上六三號	510	萬瑞生	沿鐵路三五六號	510	李贊俊
顧和順	同上七八號	510	胡廷仔	沿鐵路三三五號	1,200	王特立
顧和順	北城左一五號	510	胡三子	沿鐵路三三七號	600	羅年順
顧和順	帥家坡一五號	510	徐生根	猪市街二六號	1,000	吳保根
顧和順	同上三三號	510	鍾安啓	同上二四號	510	馮三毛
顧和順	下正街四六號	510	周人傑	同上三三號	510	馮才保
顧和順	同上八三號	510	陳家全	同上三三號	510	馮才生
顧和順	同上八四號	510	陳政朋	同上六號	510	鄧仰叫
顧和順	同上七二號	510	李順龍	同上八號	510	吳細生
顧和順	同上八二號	510	熊人水	同上七號	510	吳贊成
顧和順	北城左一五號	510	熊柏的	同上九號	510	鄧祥元
顧和順	下正街二二六號	510	熊三娘	同上四號	510	鄧細堂
顧和順	同上二六號	510	熊鼎的		510	吳松榮

江西省南昌市米業一覽 (續)

111

名 稱	所 在 地	資本金 元	支配人名	名 稱	所 在 地	資本金 元	支配人名
茂生積和	同上三三號	510	張三妹	大和	洛陽橋二五號	510	熊子仲
茂信三餘同義新聚永泰	同上五二號	510	吳香子	三源大和	同上四三號	510	吳維生
和興和	同上五五號	510	吳仁生	合源和	同上五八號	510	魏賢波
和興和	同上六二號	510	熊柏生	順和	同上二二號	510	李以龍
和興和	同上九二號	510	熊林雨	茂和	同上四號	510	譚和隆
和興和	同上六〇號	510	吳德江	和	同上五號	510	吳先李
和興和	同上六四號	510	吳生根	豐和	同上二一號	510	李學培
和興和	吊橋街二號	510	吳炳源	和	同上四二號	1,000	吳錫奕
和興和	同上三號	510	吳尚風	厚生	同上二六號	510	熊林根
和興和	同上八號	510	吳尚波	三和	同上二一號	510	熊正和
和興和	同上七號	510	楊昌江	大和	洛陽橋二九號	510	張神界
和興和	同上二五號	510	魏子云	昌和	同上八二號	510	張必忠
和興和	黃河公廟一六號	510	魏必財	楊昇	同上二一號	510	張文作
和興和	同上二〇號	510	魏元波	義和	同上	510	宗平新
和興和	玉府觀四〇號	510	魏元波	興和	同上八三號	510	張順生
和興和	玉府觀四八號	510	熊林根	茂和	同上	510	張順生
和興和	玉府觀四九號	510	魏元波	茂和	同上九號	510	萬亦龍



江西省南昌市米業一覽 (續)

名 稱	所 在 地	字 本 金 元	安 理 人 名	名 稱	所 在 地	字 本 金 元	安 理 人 名
豐 大 豐	永 和 路	510	甘 廷 輝	廣 瑞	貢 岡 街 九 號	800	黃 阿 相
豐 大 豐	永 和 路 後 街 一 六 七	510	徐 明 印	順 發	永 和 門 一 四 〇 號	510	李 常 潤
豐 大 豐	永 和 路 五 三 號	510	徐 明 敏	順 發	寶 順 橋 九 七 號	510	徐 長 茂
豐 大 豐	德 勝 路 四 二 六 號	800	黃 宇 庭	順 發	花 園 街 一 三 號	510	梁 克 楚
豐 大 豐	同 上 四 六 二 號	1,000	楊 文 香	利 成	柳 泉 上 二 八 號	2,000	詹 本 文
豐 大 豐	東 落 宜 街 一 七 號	800	劉 香 遠	和 成	六 眼 井 一 八 號	1,000	徐 龍 三
豐 大 豐	新 建 橋 前 五 五 號	800	萬 志 誠	大 康	善 賢 寺 一 四 五 號	1,000	項 芳 英
豐 大 豐	新 建 橋 六 〇 號	600	符 金 冠	興 發	南 營 坊 街 二 九 號	800	魏 公 祖
豐 大 豐	得 家 橋 二 五 號	1,300	游 逸 時	興 發	新 興 上 五 九 號	800	李 坤 祥
豐 大 豐	同 上 六 九 號	1,200	魏 文 斌	興 發	同 上	800	涂 裕 成
豐 大 豐	珠 市 街 一 七 號	510	魏 定 安	興 發	東 湖 邊 四 七 號	510	鄧 榮 岳
豐 大 豐	同 上 三 〇 號	800	王 迪 波	興 發	高 上	900	程 榮 珠
豐 大 豐	同 上 二 一 號	510	鄧 祥 林	興 發	同 上	1,200	程 敏 斯
豐 大 豐	同 上 四 二 號	1,000	張 基 雲	興 發	下 三 益 巷 三 六 號	510	鄧 瑞 太
豐 大 豐	同 上 五 二 號	510	楊 永 恆	興 發	天 石 街 下	900	謝 慶 生
豐 大 豐	同 上 二 〇 號	600	熊 旭 輝	興 發	同 上 一 三 四 號	510	程 公 餘
豐 大 豐	同 家 橋 二 〇 號	510	熊 林 軒	興 發	善 賢 寺 一 七 九 號	510	劉 鏡 照
豐 大 豐	東 豐 字 巷 八 號	800		興 發	同 上 一 四 八 號	510	程 公 興

凌成厚	北營坊一七號	510	鄭榮祥	福昌祥	高營坊二二號	510	李耀廷
凌厚茂	同上九九號	600	徐添成	泰和祥	湖王洲和字街一號	510	華茂源
吳友朋	陳家祠四號	900	謝亦信	合茂祥	湖王洲九號	510	郭茂源
福元祥	上韓坊下二二號	510	黃昌祥	豐源祥	湖王洲字街四號	600	郭玉池
榮泰和	同上四三號	1,200	杜文禮	仁大興	同上三八號	600	陳紹宜
大興祥	同上四三號	510	余廷廷	年興	環照樓城隍	600	仰鳳生
順豐	陳家祠六六號	600	余廷昌	和生	湖王洲字街五九	510	姓鳳珠
順豐	永分街一〇一號	510	黃即方	和生	同上六號	510	熊朝軒
萬和豐	公轎子祠一六號	600	徐仲銘	和祥	同元字街八八號	510	裴老太
萬和豐	環照樓一五號	510	陳道和	和祥	同元字街七八號	600	骨水生
萬和豐	毛家橋三號	510	黃永德	和祥	將軍渡七二號	510	蔡春生
萬和豐	營坊街一五號	510	李祥源	和祥	將軍渡一八號	510	劉德斌
萬和豐	同上二號	510	李祥源	和祥	同上二號	1,000	文賢福
萬和豐	公轎子祠二二號	510	李祥源	和祥	天興街二五號	1,000	萬發源
萬和豐	營坊街七四號	510	謝文洪	和祥	趙賢街一號	1,000	萬利
萬和豐	同上五八號	510	李祥斌	和祥	將軍渡五〇號	1,000	王加發
萬和豐	北營坊一〇七號	510	梁廷卿	和祥	漢濟院一號	1,000	萬發源
萬和豐	同上二二號	510	黃溫光	和祥	司馬廟一〇號	2,000	會麟卿
萬和豐	花園角五二號	510	徐文廷	和祥	將軍渡一七號	2,000	吳仲卿
萬和豐	毛角橋三四號	510	鄧官子	和祥	茅竹梁三〇號	1,000	康世福
萬和豐	毛家橋一〇七號	510	李金榮	和祥	欽謝坡三〇號	1,000	趙伯亭
萬和豐	毛家橋二八號	510		和祥	隊家井	1,000	

江西省南昌市米業一覽 (續)

1111

名稱	所在地	資本金	安配人名	名稱	所在地	資本金	安配人名
盛泰	信稱街一二號	1,000元	羅慶成	仁遠	下正街七五號	510元	熊仁甫
陳興	騰軍渡九六號	1,000	鄧觀貞	和興	上新洲頭段一號	510	熊志價
永瑞	猪市街一八號	1,000	馮伯龍	盛富	福州南墩廟一三號	510	鄒加富
豐和	騰軍渡六九號	1,000	吳純剛	同泰	玉清觀一三號	510	喻山傑
安祥	騰軍井四四號	2,000	楊簡斯	大祥	瓜溪街一三號	510	徐士亮
肥共	道外十字街南盤口六一號	1,000	李持燮	順順			
共記	解坊街一號	1,000	馮永昌				
興盛	騰軍井四四號	600	蔣汝權				
新大	珠字街六七號	600	馮汝權				
興隆	環城路三二七號	600	毛楚基				
隆和	榮江路一七號	800	殷則池				
隆生	盤頭	510	李和根				
茂祥	將軍渡五三號	510	熊金根				
和隆	千輿街九八號	510	殷益義				
李茂	玉清觀二四號	510	吳細則				
胡仁	南關口八字街一七號	510	李富泉				
	猪市街一八號	510	熊細旺				
	騰軍渡七五號	510	胡大宅				

## 附 錄 (二)

### 江西省南昌市豆麥業一覽

名 稱	所 在 地	資本金 元	支理人名	名 稱	所 在 地	資本金 元	支理姓名
新和厚	德勝路六一八號	10,800	陳祖綉	協泰和	西棉花市四〇號	35,700	劉海山
長泰成	上河街七五號	4,000	周道生	茂和	茅竹架二六號	4,000	萬楚維
慎德、康	上河街一一四號	5,700	魏 晉	新茂	新建縣前四四號	1,200	劉體非
裕順祥	新建後塍八一號	5,000	魏星吳	大隆	前皮條六九號	3,000	張魏卿
萬義興	延慶寺六號	2,000	劉公衡	三源	三源廟四九號	1,000	陳國宥
裕興和	永和路一一三號	1,000	傅大輝	德隆	羊子巷二二號	1,000	楊春林
李厚和	德勝路七一五號	1,000	萬錫山	三德	三德廟一號	3,000	陳金門
同裕	西棉花市二五號	1,400	熊紹成	隆泰	隆泰井九九號	1,000	劉洪波
	同上三七號	2,500	吳中秋	新泰	西棉花市三五號	12,000	
	同上八七號	13,700	劉振之	新泰	夢洲街九九號	72,000	楊運年
		20,200	鄒瑞泰	新泰			
		1,800	張鴻泰	新泰			







支那經濟資料刊行に就て

東亞新秩序の建設は新支那中央政府の成立によつて、愈々具體的計畫的に進められるであらうが、その根幹をなす新支那の經濟建設こそ最も緊急且つ重大なる任務でなければならぬ。これ小社が新支那經濟の建設に必備の最も信頼し得る基本的資料として下記の二〇冊を逐次翻譯刊行する所以である。

- |    |                  |    |                      |
|----|------------------|----|----------------------|
| 一  | 長沙經濟調査           | 一一 | 鎮江米市調査 (定價二・〇〇)      |
| 二  | 重慶經濟調査           | 一二 | 無錫米市調査 (定價二・〇〇)      |
| 三  | 涪陵經濟調査 (定價一・八〇)  | 一三 | 上海米市調査 (定價二・四〇)      |
| 四  | 老河口經濟調査 (定價四・〇〇) | 一四 | 湖南の穀米 (定價一・四〇)       |
| 五  | 萬縣經濟調査           | 一五 | 桐油                   |
| 六  | 九江經濟調査 (定價三・〇〇)  | 一六 | 河南・湖北四省棉產運銷          |
| 七  | 江西糧食調査 (定價三・〇〇)  | 一七 | 河南・湖北四省小作制度 (定價三・〇〇) |
| 八  | 江西米穀運銷調査         | 一八 | 河南・湖北四省土地分類研究 (上)    |
| 九  | 小麦及び麵粉 (定價二・〇〇)  | 一九 | 同 (下)                |
| 一〇 | 蕪湖米市調査 (定價三・四〇)  | 二〇 | タンダステン鑛誌             |

昭和十五年八月十七日印刷  
昭和十五年八月廿二日發行

江西糧食調查  
定價二圓二〇錢

發行者 鐵 村 大 二

東京市神田區鍛冶町  
三ノ六 (鐵町ビル)

印刷者 淺 野 剛

東京市芝區櫻川町一

印刷所 合資 金 羊 社

會社

發行所

會社

生

活

社

東京市神田區鍛冶町三丁目六鍋町ビル

振替東京四三三〇一番

